竹山に暮らして

石塚 雅明

竹山に暮らして

目次

ことのはじまり……1
作業小屋からずっと……9
最初の竹山の日々……17
バトンタッチ……27
三度目の危機を超えて……35
竹山というところ……43
この土地について……51
この土地の植物たち……59
竹山を食べる……65
わたしたちの自給自足……73
外にかまどをつくる……81
薪をつくる……89
木熊をつむ……97
撹乱……105
川と池を掘る……113
水辺の世界……123
地図をつくる……131

一年通観……141
千客万来……149
鳥たちの気持ち……159
雪と暮らす……167
春はいつから……175
春から夏そして秋……183
雑草という草……193
ワインのブドウを植えてみる……201
あるものでつくる楽しみ……209
炊事当番……221
老いを生きる……231
酒と温泉の日々……239
竹山へのお返し……247
竹山に暮らして……255
おわりに、そして……263

表紙画　浦　一也
イラスト　石塚　雅明

ことのはじまり

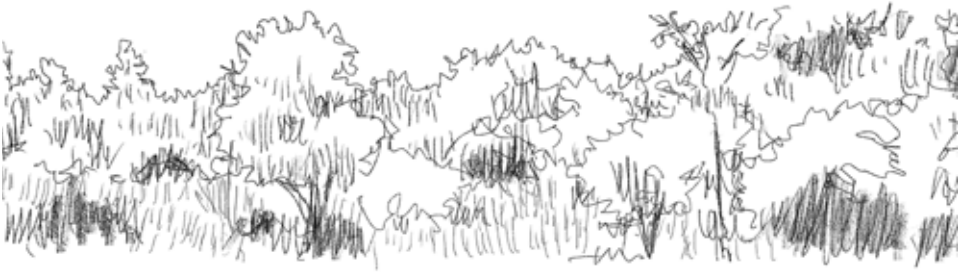
ここ竹山に暮らし始めてもう五年になる。

三十五年経営してきた事務所を、優秀な後継者に恵まれたことで事業承継をしたのが二〇一七年。それからご隠居を決め込み、今の暮らしがはじまった。その間に年齢も七十才になってしまった。早いものである。思い立ってここでの暮らしについて書いてみることにした。それがこの本である。

「石塚さんは今、どんなところに住んでいるんですか？」と聞かれると、常に「千五百坪の土地を手に入れて、森に囲まれた暮らしをしているんです。」と答えている。その「千五百坪」と言う時に、自分の鼻の穴がぷくっと広がってしまうのは、ご隠居としての悟りの境地には程遠いということか。

ところがこの「千五百坪」と「森に囲まれた」というのは実はあやしい。土地を購入する時に言われたのは「千五百坪」だったが、契約の際に確認した登記簿によれば「千四百九十九坪」で一坪足りない。さらに境界測量の結果をみると「千四百九十八坪」で、どんどん減ってくる。これでは「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と鼻を膨らませるのも憚られ、声も小さくなってしまう。

この事態を神様がかわいそうに思ってくれたのか、電柱の立て込み工事に来た業者の作業車がぬかるみにタイヤを取られて脱出しようとした際に我が家の境界石を倒してしまうという事件がおきた。業者は早々に境界石の復元をしてくれたのだが、その際の測量結果がなんと「千五百・〇一坪」となった。これで堂々と胸をはって鼻も膨らませて「千五百坪の土地を手に入れ・・・」と



言えるようになったという次第。

もうひとつの「森に囲まれた」というのはもっと怪しい。

いわゆる地域森林計画に位置づけられた森林に面しているのは敷地の一面だけで残りの三面のうち二面は人が住んでいるお隣さんの土地である。いわゆるポツンと一軒家とは程遠い。それでも家の四周は高木が茂り、ほとんど木々の緑しか目に入らない。気分は森に囲まれたとして嘘ではない。ただ、冬になるとほとんどが落葉樹なので木々の間からお隣の家が丸見えになる。それでも家と家の間は六十ｍくらい離れているので森に囲まれた気分はかろうじて維持される。

実は、この土地の購入の決めてとなったことの一つにＳ市の都心の自宅から車で高速道路を使えば三十五分で着いてしまうという手軽さがあった。いろいろ周りの環境を知るにつけ、スーパーは車で二十分ほどの範囲に大小六件もあり、おまけに同じ範囲に大規模なアウトレットモールもある。我が家に欠かすことのできない品揃えのセンスが良い酒屋も二件ある。歩いて行ける距離には鹿肉専門のレストランや、美味しいハムやソーセージを入手できる店、それに絶品のパン屋もある。さらに言えば国内外に一飛びの空港も三十分ほどで着く。そう、極めて便利なところなのだ。

そんなところで「千五百坪の森に囲まれた（気分になる）暮らし」ができることになろうとは。きっかけは、隣家の友人のひとこえだった。

もう六年以上前だったと思う。そのころ家族ぐるみで親しくさせていただいていた妻の友人のお宅に、年に何度かお邪魔させていただいていた。別荘のように使われていたけれど、とても広い庭に色とりどりの草花をセンス良く配し、赤白の葡萄の棚や、栗やプルーンなど実のなる木もたくさんあり、「なんとかの庭」という趣だった。おうちもさすが建築家と思わせる品のある佇まいで、とても心地よい時間を過ごさせていただいていた。冬に訪れる鳥たちを間近に見られるのも驚きだった。

そんなお宅を訪ねたのはちょうどゴールデンウィークの頃だったと思うが、ご主人が突然「隣の土地が売りに出ているみたいだけど、ここは市街化調整区域なので資材置き場か廃車置き場などにされたら困るんだよね。石塚君、買わない？」と。

それが今暮らしている土地なのだが、その時は、どうも話の筋が自分ごととして思えなかった。確かにお隣が資材置き場などになったら、それも地形的に一段低い土地なので見下ろせば丸見えになり困るだろうけど、それで困るのは私ではない。笑ってすまそうとしたが、なんせ暇なゴールデンウィークの時だったので、敷地を探検しようということになった。他人の土地に勝手に入るのだから探検ごっこで済まされることでもないのだが、とにかく背丈ほどもある草が鬱蒼と茂っていて人は住んでいないのは明らかな荒地で、まあ、いいだろうということになってしまった。

草花に囲まれた隣人の家

入ってすぐのところは笹薮で、大きな木が何本も生えていた。なかには朽ちかけた大きな木もあり探検感はかなりのものであったと記憶している。その先には春先だったのでよもぎがいっぱい生えていたが、同時にガマの姿も増え始め、足元は一歩踏み出すとズブッと沈む状態に。要は完全な湿地状態。地面に目をこらすと水たまりがあちこちに見え、油のような虹模様の膜が浮かんでいた。かなり遠くには、屋根が落ちかかった廃屋があるのも見えた。

もし仮に私が買ったとしても、資材置き場か廃車置き場にするくらいしか思いつかないような、そうするにしても大変そうな土地で、ましてや住むなどということはとても考えられなかった。それなのに、お隣に住んでいるご主人の妹夫妻も「住まなくても、いろいろな楽しみ方がきっとできるよ。」と無責任に加勢してくる始末で、まるで原野商法の押し売りにあったようだった。

その後も、そこを訪ねるたびに「買おうよ」「また見に行こうよ」と誘われ続け、ある日「先日、建設業者のような人が見に来ていたので聞いたら、ログハウスの資材を置く場所を探しているって言っていた。いよいよ危ないね。」と。危ないのはこっちなのだが、とりあえず、敷地に立ててあった不動産屋の看板の連絡先に電話をしてみることになってしまった。

会って話を聞いてみると、広さは千五百坪あり、市街化調整区域の指定前に建った家があるので、今でもその面積の一・五倍までであれば建物をつくることができ、住むこともできるとのこと。

廃屋と売物件の立て札

その土地には最初の春から、夏、秋と何度か冒険侵入したことになるのだが、その間、話を持ちかけた夫妻が離れとして使っていた小さな建物をゲストハウスとして使わせてくれたのも良かった。あいかわらずひどい湿地なのだが、季節毎に表情をどんどん変えていく姿をじっくり観察することができたのは新鮮であった。いつの間にか訪れるのが楽しみになり、秋には、まだ名前も知らない草花を両手いっぱいに摘み取り、大きな花瓶に差している自分に驚いた。

私より冷静な判断ができる妻も、どうも気持ちが傾いて来たようで、土地を見に行くだけでなくS市の植物園のなかにある湿地園を一緒に見に行ったりして、湿原を楽しむシミュレーションをするようになってしまった。

私としてはそのころ、たまたま仕事で伺った小さな村や町で、大変だけれど楽しく誇りを持って暮らしている方々にたくさんお会いすることがあったのも背中を押すことになったのかもしれない。

T村を訪ねた時の話も忘れられない。酒席で副村長から「まちなかの便利なところに移住促進住宅の分譲をはじめたが今一つでどうしたものか。」と投げかけられた。酒の勢いもあって「村の良さに惹かれて住もうとする人は、まちなかの便利なところなど求めていないと思う。もっと自然に囲まれた・・・」と決めつけてしまった。そうしたら副村長「それなら石塚さん、二万坪の土地があるけで買わないかい。川も流れているよ。」と返してこられた。「そんなお金は・・・」と尻込みすると、「二万坪、二千万円でどう。」と畳み掛けられた。

私が摘んできた草花

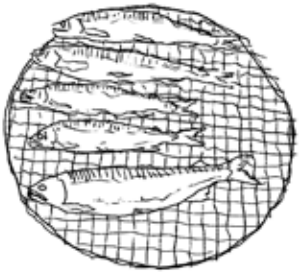
清水の舞台から飛び降りるつもりで有り金叩けばまったく手が出ない額ではないのにびっくりした。もちろん買いはしなかったが。

隣人の隣人、つまり話を持って来たご主人の妹夫婦だが、その存在も大きかった。何度か会ううちにとても人柄の良いお二人で気に入っていたのだが、ある時、ご主人が「川で鮎を釣って来たので、一緒に食べませんか。」と声をかけてくれた。鮎は香魚とも書くが、天然の鮎はひと噛みすると香りが口から鼻へといっぱいに広がり、思わずため息が出る美味しさだった。妻と「この土地を手に入れると、毎年、鮎を食べることができるのかな。」と頷きあったのが思い出される。

価格交渉をしたら一千万円を切るまでになったが、決して安い買い物ではない。それも野遊びのために。

だが、ほどなく購入することを決めてしまった。今から思えば、なぜ、こんな荒地を買うなどという決断をしたのか不思議である。が、そういうことになってしまったのだ。いろいろ決断の理由をあげてみたが、どれも決定打と言えるものはない。将来の暮らしを冷静に比較検討した結果とか理詰めの判断ではなかったのは確実だ。きっと、私たちの心をぐっと捉えて離さない何かがあったのだろう。

この決断が重要な意味を持っていたことを気づくのはもう少し先になるのだが、その話はのちほど。



私たちの気持ちを押した鮎の炭火焼

作業小屋からずっと

土地を購入したのが十一月の末だったので、冬の間は野遊びをおあずけにして、春になったらどう楽しもうか妄想に浸ることにした。

今までのように友人に甘えてゲストハウスを都度貸していただくのは気がひけるので、ちょっとした作業小屋を建てようということになった。幸いにしてここは市街化調整区域の指定がされるまえに住宅用に建物が建てられていたので、住宅が建てられる土地なのだ。

まず、作業小屋は土間がいいねということになった。

当然、手を洗ったりする水は必要だし、

お茶を入れる程度のお湯は沸かせた方が良い。

トイレもいちいち隣に借りに行くのも悪いし

六十m離れているのも不安なので必要だよね。

毎回、日帰りも慌ただしいので

泊まれるように簡単なベッドもあった方が良いね。

外作業をして汗をかいたまま寝るのはどうかな

シャワーぐらい浴びられるようにしたいな。

泊まった時の食事はどうする?。

こうなってしまったら考えは後戻りできなくなり、急なメールがきたり、資料をつくらなければならなくなった時のために、小さくても良いから仕事スペースが欲しいとか、やれ冷蔵庫はあった方が便利だとか。

自然に囲まれて野遊びを楽しめる小さな作業小屋というイメージはどこかに消えてしまって、気がつくとまちなか暮らしの便利さをそのままコピー&ペーストしたような立派に「家」になってしまった。それに、田舎暮らしの本に出て来そうな薪ストーブ、それもオーブン付きのが良いなどと、料理をつくりもしない私が言い出す始末。

妻は、しきりに「こんな湿地に家を建てるなんて身体を壊すのじゃないか。」と心配したが、「週末に立ち寄るだけだから。」と説得した。

それでも、なんでも一人大工の知り合いに土地をみてもらったら「まず、中古のユンボを買いなさい。そしてできるだけ多く暗渠排水を入れなさい。それからだね。」とのアドバイス。野遊びをするにしても、それだけ手強い土地だということだ。妻は、私が「ユンボ」のところで目がキラッと光ったのを見逃さず「そんなもの買って、いったいどこに置いておくの。」と釘をさされた。ただ、頭の中ではユンボなる小型重機を自在にあやつりながら溝を掘り、暗渠排水を埋めて行く自分が見えていたのである。

なんせ、土地は千五百坪あるので、どんなに建物が大きくなっても敷地に収まらないということはないし、建物も自分が良ければいいので徹底的にローコストでいけばなんとかなる。

と、思っていた。

それが大きな間違いであることに気づくのにそう時間はかからなかった。

ユンボーの幻影

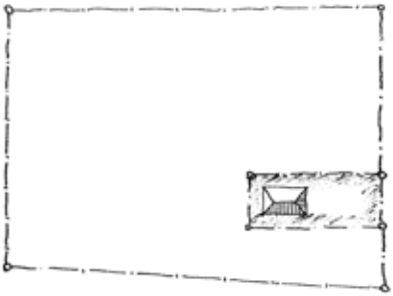
妻は長年自分で建築設計事務所をやっていたので、私が考えていることに無理があると薄々気づいていたと思うのだが、ここで水を差してはかわいそうと思ったのか、成り行きを見守る姿勢でいてくれた。

それでも、市街化調整区域のこの土地に住宅を建てることができるという証明書をもらうにあたっていろいろ調べてくれていた妻の顔つきが険しくなってきた。

以前、ここに住宅を建てた人は、千五百坪のうち百坪を建築敷地として建てていたので、新築することのできる敷地はその百坪の範囲に限られるというのだ。千五百坪のどこに建てようかといろいろ妄想していたのが一挙に現実に引き戻された。

さらに悪いことに、その敷地は公道に面していなかったのだ。道のように見えるが細長い私有地で、それもたくさんの方の共同名義になっているというのだ。その私有地は「みなし道路」とされていて、建物を建てる際に敷地は道路に接していなければならないという条件には適合するのだが、公道ではないのでそこを通行して良いかどうかは土地所有者の同意をもらわなければならないというのだ。そこが使えないとなると公道に面したところからその敷地まで自分で道をつくらなければならない。一大事である。

幸い土地を所有されている方はみなさん親族で、窓口になっていただいた方が工事やその後の通行に使ってかまわないと言っていただけたので事なきを



建てられるのは敷地の一部

得た。ただ、工事用道路として使うには重量車両の通行に耐えられないこともわかり、二百m分の道路の舗装工事をしなければならなくなった。

さらに地盤の調査をしたら、杭を打たなければならない状態だそうだ。作業小屋と思っていたのが、杭を何本も打つ豪邸のような建物になってしまった。木造のほとんど平屋の建物なのに。

さらにこれはすでにわかっていたことだが、その廃屋には上下水道も電気も来ていない。水道の本管までこれも二百m分自分で管を埋めなければならない。下水はちゃんと浄化槽を通した水でなければ川に流すことができない。電気は公道までは電柱を建ててくれるのだが、そこから敷地まで距離があるので敷地内に自分で電柱をたてなければならないとのこと。

後々、建築の計画が固まって工事費の見積もりをとったら、建物本体はローコストで頑張っても、目に見えないところに思わぬお金がかかることがわかった。妻曰く、「この目に見えないところの工事費で、ベンツが買えたね。」

とりあえずその年は、雪のなかにぽつんと建っている廃屋の写真を撮ることにした。廃屋はその冬の雪で潰れてしまってもおかしくないくらいの状態だったので、確かにそこに住宅が建っていたという証拠写真を残しておかなければ、市街化調整区域で建物を建てることもできなくなる可能性があったのだ。

そして正月休みは、ちょっと夢がしぼんだが、いろいろアイデアを出し合い妻が図面を引き、私は模型をつくることに費やした。

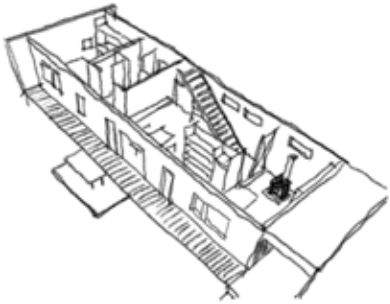
今にも崩れそうな廃屋

プランを考えるのは楽しかった。

なかでも敷地にどのように建物を配置するかは結構考えた。土地は東西を対角線にしたほぼ正方形。その東隅に近いところに建物を建てられる敷地がある。その場所から土地の木立をもっとも広く見渡せるように北西に面して南北に長い建物にしてみた。北や西に面して窓を大きく取るのは住まいとしてどうかとも思うが、そのことによって太陽の光をいっぱいに受けた木立を見ることができるのだ。建物の向きを決めたもうひとつの理由は、小さな二階の作業部屋からE岳を真正面に見えるようにしたかった。航空写真を手がかりに窓が山に面する角度に建物を配置した。建ってみるとぴったりの角度だったのだが、山を見る視線のちょうど途中に常緑のトドマツの大木があり山を隠してしまうことがわかった。計画的配置といっても、私の場合はその程度ということか。

建物のプランもいろいろ考えてなかなか決まらなかったが、その都度、家具付きのドールハウスのような模型をつくって検討した。家具はテーブルや椅子はもとより、私にとっては重要な薪ストーブと煙突まで細々とつくってしまったのだ。その時間が楽しかったのは言うまでもない。

最終的にほぼワンルームのコンパクトな平家にちょこんと二階が乗ったかたちに収まったが、結局、作業小屋からずっと住めそうな家になってしまった。建築費もまっとうな額になってしまったのは言うまでもない。老後は便利なまちなかのマンションにと思っての蓄えを全て放出してしまったのは、今から考



工事現場は水たまりの中

熱中した家の模型

えると大胆な決断だったのだが、何かに憑かれたかのように工事契約書に判を押してしまった。それがどのような意味を持っていたのかを気づくには少し時間がかかるのだが。

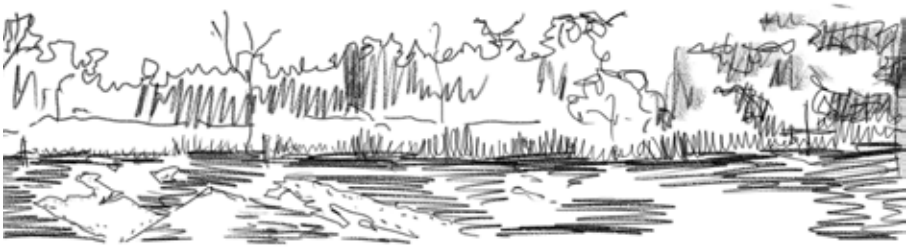
なんだかんだあったが、雪解けと同時に工事が始まった。

工事で重要なのは敷地の排水だった。以前住んでいた方も排水には苦労していたようで家の近くに素掘りの溝が川につながる側溝まで引かれていたが、それが役に立っていた感じはまったくなかった。よく敷地を調べると、それとは別に敷地際に立派な側溝跡が見つかった。跡と書いたのは、長い間放置されたことで、すっかり土砂に埋まって水路の役割を果たしていなかったようだ。その側溝は隣の敷地の側溝とつながっているのだが、高低差が三mほどあるので隣から流れ落ちた水が私たちの敷地に広がってしまっていたのだ。

工事をしてくれた人の話では「土砂がまるで扇状地のように広がっていたよ。」とのこと。その例えで言えば、家を建てようとしたところは扇端から先の低湿地になる。妙に納得。

側溝はもとの材料を生かして見事に復元され、ずっとそこにあったように風景に馴染み、流れる水も綺麗だった。でも急に敷地の水が引くわけではなかった。建物の工事が始まった時に見に行ったら、建てる場所を示す目印杭が水浸しの泥のなかにぽつんとあったのは、今でも鮮明に覚えている。

でも、ここまで来れば先に進むしかなかった。



最初の竹山の日々

十月十七日ようやく建物が完成し引き渡しとなった。その前の確認検査では外壁の板に大きく欠けた部分が見つかり、なんという工事の仕方かと腹がたったが、あとでご近所に聞くとキツツキの仕業だったとわかった。向こうにしてみればナワバリに断りもなくつくられた大きな箱を調べてみたということなのだが、飛んだとばっちりを受けた工事業者さんには申し訳なかった。引き渡し後に、新築特有の匂いを避けて換気のために窓を開け放していたら、突然、一羽の小鳥が部屋に飛び込んできて大騒ぎになった。幸い壁に激突することもなく無事に外に戻って行ったが、確実に彼らの世界に侵入したのはこちらだと実感させられた。

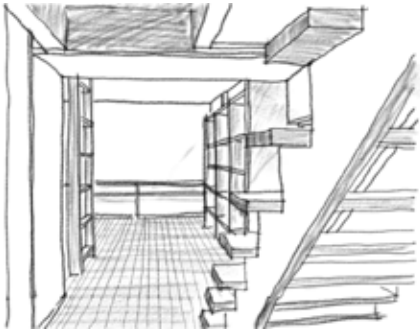
このほかにも完成までは色々あったが、それはおいておこう。

とにかく完成したのだ。

ただ、やることはいろいろあって、まずしなければいけなかったのは、フローリングのワックスがけだった。とにかく工事費用を切り詰め自分たちでできることはやるという方針だったので、がらんとした部屋に買ったばかりの布団を敷いて、三日がかりの仕事になった。

ダイニングテーブル作り、カーテンレールの取り付けなど細々としたことがいろいろあり、それらはみな週末作業だったので、なんとか落ち着いたのは一ヶ月半後ぐらいであった。

もう十二月も半ばになり、そろそろ雪の季節かと思っていたらドカンと来



なんとか完成

た。自宅のあるS市の街中も結構積もっていたが、除雪が行き届いていて車は動かせたので、週末は竹山でと来て見ると六十センチの積雪。幹線道路から家に行く道はとても車で行くことができない。隣家の友人宅に車を置かせてもらって、家まではパウダースノーをラッセルしながらようやくたどり着くことができた。翌日は晴れて時々雪が降る程度に収まったが、とにかくやらなければならないのは雪かきだ。

だが、とにかく広い。悪戦苦闘していると見かねた隣の見知らぬ方が小型のユンボで助けてくれた。このSさんかなりの高齢とお見受けした。住人ではないのだが、長らくここで働いていて昔のことも詳しく、あとあといろいろなことを教えてくれることになる。

幹線道路から家までの二百mの道の除雪まではさすがに手がでなかったが、ここは、隣近所で除雪組合をつくっていて、市から除雪のための補助をいただき自分達で除雪業者にお願いする仕組みになっていた。さっそく組合に入れていただき、ほどなく大型の除雪車がやってきてくれて、なんとか車も動かすことができるようになった。

十日後に竹山に来た時も、また車が雪で立ち往生してしまった。これでは来年早々に四駆の車に買い換えなければならない。

また、お金がかかる。

そんな感じて最初の竹山の日々は始まった。

大雪に車が埋まって

そんな竹山の日々も、たいへんなことばかりではなかった。

当初の作業小屋のイメージが残っているのは、玄関から入ってすぐの八畳ほどの土間だけだが、そこに薪ストーブをおいた。それもオーブン付きで料理ができる。窯開きは十二月三十日で丸鶏と芋を焼いてみたが、これがなんとも程よい火の通り具合で美味しかった。窓から外を見ると木々の枝ひとつひとつに新雪がのり一面真っ白な世界が広がる。土間には薪ストーブの炎がオレンジ色の光をゆらゆらと落とす。そんな風景に浸りながらワインと鶏肉を味わう時間がゆっくり流れる。

翌日の大晦日には、くるみ入りのパンを焼き、またワインをおともに豚肉のソテーと野菜を煮込んだスープで、はじめての竹山での年越しをした。

年が明けてもすぐ帰る気にはならず、長めの正月休みをとって九日まで竹山にいることにした。

年末から雪混じりの日が続いていたが、二日になってようやく暖かな日差しが訪れた。それを待っていたかのように小鳥があちこちの枝を行き来しはじめ、雪原をエゾリスが横断するのを目にすることができた。小鳥たちはせわしなく飛び回るので、その種類を見分けることは難しかったが買ったばかりの鳥類図鑑と双眼鏡を駆使して、コガラとカケスとアカゲラは何とかわかった。今から見るとコガラとしたのはハシブトガラではなかったかと思うが、まあ、そのような間違えはその後も山のようにある。

薪ストーブでパンを焼いた

鳥はまだましだが、木となるとさっぱりである。これは絶対に間違いないと言い切れるのはシラカバぐらいで、あとは、小さな木と大きな木ぐらいの見分けしかできない。私でもわかる木は庭木か街路樹に使われる木で、そのような木はほとんど見かけないのだ。それに、葉を落とした冬であればなおさらであった。それでも、風の通り道にあたった枝からサラサラとした雪の小さな雪崩が舞い散る姿は見ていて飽きなかった。それはまるで誰かがいたずらして枝をゆすって雪を舞わせているようで、それも気まぐれに、あちらの枝、こちらの枝と目の前の雪原を遊び歩いているようだった。

風といえば、北風なら北風で一方向から吹き続けるイメージがあったが、ここではそうではない。まるで意思をもった生き物のように不連続に動き回るのである。これが春になって草木に葉が繁ようになるともっと不思議な風に出会える。本当にひとつの葉っぱだけが、まるで手を振っているように激しく動くのである。他の葉は微動だにしないのに。

朝起きて雪原を見ると、家の近くまで動物の足跡が残っていることもあった。当時は足跡で誰が来たのかなんてわかるはずもなかったが、足跡を見れただけでちょっと興奮していたのを思い出す。

近くのゴミステーションといっても家からは五百m離れていてそれも坂道なのだが、買ったばかりのソリにゴミをのせて、帰りには自分たちが乗って滑り降りる。そんなことをしていたらあっという間に帰るときになった。

これは誰

次に竹山に来れることができたのは、ほぼ二週間後であった。

道路や家の周辺の雪は十㎝ほどで除雪はそれほど大変ではなかったが、今度は寒さだった。翌朝の最低気温はマイナス十八度で、そこまでくると普段は賑やかな小鳥たちの姿もほとんど見られず、シジュウカラが二羽来たぐらいでシンとして凍りついた静かな風景だった。

S市のまちなかではあまり記憶にない寒さだと思っていたら、二日後の朝にはマイナス二十一度まで下がった。晴れた日の朝は、放射冷却現象とかで気温がグッと下がるのだ。

そのかわり、厳寒の快晴の朝空はどこまでも透き通り、遠くの山並みが朝日を浴びてくっきりと普段より大きく見渡すことができた。

あまりの寒さに怖気付いたわけではないが、次に竹山に来れたのは翌月の半ば過ぎで、三週間以上たってからであった。冬場、それだけ家を空けているとすっかり冷え切ってしまってなかなか暖まらない。ようやく家が暖まったのは二日後だった。その日は朝から快晴で、部屋の中に陽が低い角度で差し込みそれが家を暖めてくれた。天気が良いとお客さんも賑やかだ。大きな窓の前をキタキツネが悠然と横切っていった。普通、人の気配を感じ取るとサッといなくなりそうなものだが、ちらっとこちらを見たあと、まるで何も見なかったようにゆっくり堂々と立ち去っていった。まあ、ここらの主はそっちなのだから当然か。その日は、アカゲラとシマエナガが同時に居合わせしたりするのも目

遠くに山並みを一望

にすることができた。

私たちも、天気の良さに誘われて隣家の友人から新居祝いにいただいたスノーシューを履き初めすることにした。敷地内をぐるっと一周するくらいだが、それでも結構汗ばみ身体が暖まる。よく見ると、斜面の雪が溶け落ちて土が少し顔を出しているところがあった。本格的な雪解けはまだ一ヶ月以上先になるが、それでも少しずつ季節が変わりつつあるようだ。前回来た一月でいえば元旦の日の出が午前七時三分で、日没が午後四時十二分。太陽の南中高度も二十四度と低かったのだが、この二月十八日では、日の出が午前六時二十六分で、日没が午後五時十一分と太陽が出ている時間がかなり長くなった。南中の高度も三十五度と高くなっている。一年の半分近くを雪と寒さに閉じ込められる地域にとっては、そのようなわずかな差でも、また、春に一歩一歩近づいていると気持ちが膨らむものなのだ。

もちろんS市のまちなかにいても、太陽の光が力強さを増しているのを感じられるのだが、竹山に居るとそのことが、生き物たちの動きや場所による雪の融け方などかすかなことからも感じられる気がした。

そんなことを感じることができた二月だったが、結局、竹山に来ることができたのはその四日間だけだった。一月は正月休みを長く取れたので十二日ほど居れたのだが、二月は年度末が近いせいか出張が多く十一日間それに取られてしまったのだ。

シマエナガを間近に見る

当初の構想は、週末の息抜きに野遊びができる土地を手に入れ、小さな作業小屋でもつくって外を眺めながらお茶を楽しむことができればという程度のことだったのだが。どこでどう魔が差したのか。いつのまにか老後の蓄えを使い果たしてまっとうな住宅を建ててしまった。

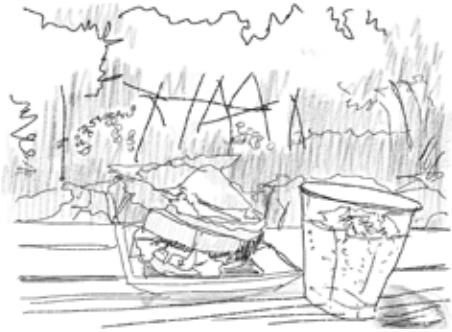
そうなったらなったで週末だけではもったいない。できるだけ長く竹山に居たいとう言う気持ちが大きくなった。実際問題として、厳寒期などは週末に訪れても除雪にかかる時間はけっこうなもので、また、冷え切った部屋が暖かくなるのを待つだけで貴重な一日が過ぎてしまう。そして、ようやく落ち着いたと思ったらもう帰り支度をしなければならない。

確かに竹山のこの土地は、ちょっと野遊びで訪れるというのではなく、しっかり腰をすえて日々の風景に目を向ける余裕がないと味わえない魅力があるのは事実だ。

できるだけ竹山に滞在する時間を長くしたくて、竹山オフィスの日というのを勝手に決めることにした。そうすると出張に出向くにしても、S市の自宅より高速道路や空港へのアクセスが便利で合理的でもあった。出張の帰りもまちなかのマンションに戻るより、静かで清涼な空気と暗くなりかけた空に木々の黒いシルエットが浮かび上がる景色が出迎えてくれるほうが疲れが癒えた。

ただ、良いこともあればそうでないこともある。

竹山にはラフで自由な服装でいきたいのだが、その足で出張となるとそれ



外での朝食は楽しかったが

なりの服装を持参しなければならない。竹山にお気に入りのジャケットを置いておくことにしたら、今度はS市に居るときにそのジャケットがないので慌てることになる。それに着替えの問題もある。

妻は食材の問題に頭を悩ませていた。食べるだけのこちらにはわからないが、その時の滞在日数に合わせて食べきれる食材をキープし、自宅のマンションの冷蔵庫の管理もするのは相当苦労したようだ。フードロスに敏感であればなおさらである。

いわゆる二地域居住の部類に入るのであろうがどうも違うようだ。夏の間はこちらで、冬になればあちらでというようなスパンで滞在できれば違うのかもしれないが、一週間の間であちらとこちらというのではあまりに慌ただしすぎる。それに三、四日の出張が加われば短期三地域居住の状態になってしまう。

その合間に竹山でしか味わえない生活をと欲を出そうものなら忙しいことこのうえない。何か田舎暮らし的なことをしたいと思って竹山に居るわけではないが、時間に追われると、ついあれこれしそうになってしまう。

ゆったりとした時間を楽しもうと思っていたのが、かえってあわただしくしてしまっている。完全に目的としたこととやっていることが逆転してしまっている。

そう気づいたときに訪れたのは三十五年経営して来た会社を後人に譲るという事業だった。

バトンタッチ

会社の事業承継については、随分前から考えていたことだった。幸い私は良きスタッフたちに恵まれていた。そして彼らに経営をバトンタッチするなら彼らが四十代早々のタイミングでしなければならないと考えていた。それは私が六十五才になるときだと。

なぜ、彼らが四十代早々の時期に事業を譲らなければならないと考えたのか。その理由の第一は若くなければいけないということだった。私が友人のYと事務所を立ち上げたのはちょうど三十才のときであったが、特にどこかの事務所でノウハウを学び独立したということはなく、ほとんど学生から起業したようなものだった。正直、都市計画や建築設計の専門的知識や実務経験は無いに等しかった。ただ、学生時代の十年間近くを歴史的街並みの保存のための住民運動の支援に費やしてきた体験だけが総てであった。それでも、依頼を受けた仕事ひとつひとつを一から考え、自分たちなりの解にたどり着くまで、膨大な時間を調べ考えることに費やすことができたのは若かったことにつきる。

また、経営的に苦しい時期にも、未経験の分野でありながらその分野では先進的な取り組みをチャレンジすることができたのも若かったからできたことだと思っている。

当時、六十五才になってもまだまだ現役でやれる自信はあったし、それまでの成果を評価していただきご指名いただくこともまだまだあったし、新しいチャレンジも怠らなかった。しかし、そのまま七十とか七十五とかまで私が経

事業を継いでくれた三人

営を続けたとすると、後継者たちは五十を優に過ぎてしまう。その年になると、それまでやってきたことには円熟味を増すであろうが、失敗を恐れず自分なりの新しいチャレンジをすることが難しくなってしまうのではないか。仮に失敗したとしても、それを糧に再びたて直す体力、気力があるだろうか。また、社会状況が大きく変わるなど時代の転換期に遭遇した時に、それに柔軟に対応して乗り切ることができるだろうか。

そのように考え、事業承継のタイミングは私が六十五才になる時と決めていた。そのためにはバトンを受けても良いと思ってもらえる経営状況と実績をつくる必要があったが、それに最後の十年を費やした。

幸いにして、優秀な三人のスタッフに共同代表というかたちでバトンタッチをすることができた。三人はそれぞれに個性的で、得意とする分野や持っているネットワークが異なる。それをひとつのかたちに束ねることができれば私にはできなかった新しい道を開いていけるのではないか。そんな思いでの事業承継だった。

正式なバトンタッチは私の誕生月に合わせて六月末とした。七月に入ると恒例の事務所旅行をかねてスタッフがそろって竹山に来てくれた。天気にも恵まれ敷地の中を案内したり、竹山での暮らしの様子を話したりして時間を忘れた。いい加減酔いが回った頃、事務所を引き継いで来れたN君がぽつりと「石塚さん引退するって本気なんですね。竹山に来てそう思いました」と言った。

竹山にみんなが来てくれた

N君には申し訳ないが、代表を交代した後も私は顧問という肩書きで経営の相談にはのっていた。仕事も私が関わった方が良いと思われるものには現場や打ち合わせに積極的に出向いていた。私としては、私が元気なうちはできるだけ自分の進め方やノウハウを現場をつうじて伝えておきたいという気持ちがあったからだ。それが大きな間違いであることに気づくことになる。

基本的には彼らが中心になって進められるようにしていたつもりではあるが、クライアントとの打ち合わせで方向性が行き詰まった時などは、クライアントの視線が自然と私の方を向いてしまい、そこでの一言で方向性が決まってしまうことがおきる。また、論点の整理も私が図解するとスムーズに議論が展開する。その時は「こういう場合はこう考えると良い。」と後人に伝えているつもりでも、そういうことが続くと、彼らの試行錯誤の機会や私とは異なるアプロートの可能性を奪っているのではないのかと考えるようになった。

社会はどんどん変化していっているし、それに伴って私の経験はどんどん過去のものになってきているはずだ。それを伝えいるといって次の世代の可能性を閉ざしてはいけない。そんな思いが強くなり八月には完全に現場から退くことを決めた。いろいろお世話になったクライアントに共同代表と伺い、引退の挨拶をさせていただいた。

正確にいうと、どうしても私ご指名の仕事数本と、研修講師については続けることにしたが、それ以外は完全に手を引いたし、口も引いた。おかげで月

のほとんどを竹山で過ごすことができるようになった。

その判断が正しかったことはすぐにわかることになる。彼らは経営スタイルをオープンに変えて全てスタッフ全員の合議で進めることにした。それは、私の目からすると経営判断のスピードが低下し、決定の責任の所在が曖昧になってしまうのではないかと思ったが、彼らはひとつの信念としてそれをやり通した。確かに最初はぎこちない話し合いだったが、そのうち気がつくとスタッフの自主判断、自主提案の機会が増えていっていると感じられるようになった。

また、働く時間も自由裁量制を取り入れ、スタッフに時間の自己管理を促すようにした。何かと打ち合わせや現場調整が多い業務の生産性を高めるために、大胆に週休三日制を宣言しそのうち一日をデスクワークに集中できるようにしたりした。そして一年足らずで若い有能なスタッフを何人も迎え入れ、その分、私の頃より売り上げも順調に伸ばしていってしまったのだ。

そんな彼らのチャレンジは、売り上げ云々よりこの新型コロナウイルスによるパンデミックという事態に力を発揮している。私たちの方法論として、様々な対話をつうじて課題解決の方向性や、課題を解決する力そのものを生むというのが柱にあった。その機会が閉ざされようとした時に、チームワークで、リモートによる対話システムを構築し、一方でコロナ禍における直接対話の方法もつくりあげてしまった。そしてリモートワークへのシフトに際しても、それまでに培われた自主判断、自主提案の力が大きな役割を果たしていると感じる。

スタッフ全員での合宿

バトンタッチがうまく行ったと実感できるのは先のことになるのだが、八月にお世話になったクライアントの方々に完全に引退することをお伝えして回った時に、何人かの方からは、後継を信頼して全てを託して身を引いたことを評価していただいた。企業の大小の違いはあるが、引退したといっても引き続き経営に口を出し、それが企業の革新力を失わせている例は少なからずあるようだ。

対外的に引退を宣言したあと、その年度いっぱいは、新経営陣のチャレンジに目を細めたり、眉をしかめたりしながら、残った現場に関わっているうちに時間は過ぎていった。ただ、年度が改まると状況は一変した。

やることがパタリとなくなったのだ。

そして引退してわかったのは、ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていることも実感できるのではないか、ということだ。誰かがそのひとを高く評価してくれている。誰かがそのひとを必要としてる。誰かがそのひとに感謝をしている。誰かがそのひとが居てくれることで心が安らぐと言ってくれる。誰かがそのひとに会うことで笑顔を浮かべる。どんな些細なことでも、他者という鏡に映ることで、自分の存在を確認することができる。そう感じたのだ。

もちろん他者を介さなくても自己確認できる力のある人はいるだろう。ただ、自分を振り返ってみると他者から評価されているという実感が、自分とい

鏡に映った私

う存在がいることを確認できることに強く繋がっていると思われる。特に、長年にわたりまちづくりの仕事に関わってきたからなおさらなのかもしれない。もちろん、まちづくりは私一人で何かができるわけではなく、そこには多くの人々がそれぞれの力を発揮することでまちはより良いと思われる方向に変わっていくのであるが、不遜かもしれないが、そこに私が関わることによってはじめて何かが生まれたと感じることが少なからずある。それが私を支え、私が生きてそこに存在することの証として認識できたのではないか。

その機会がパタリとなくなったのだ。そのことが私を非常に不安にした。息が苦しくなる感じを覚えたり、気落ちも不安定になった。今まで、まちづくりの仕事をつうじて得てきたものに私自身の存在確認があるとしたら、それが無くなった今は何にそれを求めれば良いのか。

ボランティア活動に深く関わるという道もあるかもしれない。いわゆる趣味の世界に没頭するという選択もあるかもしれない。しかし理由は定かではなかったが、それらはどこかしっくりこなかった。

振り返ってみると今までもそのような不安定な気持ちになったことは二度あった。そして、その都度、大きな決断をして強引に舵を切ることで乗り越えて来たのだった。そして今度で三度目になる。

一度目は、三十才になるあたりで、二度目は、それから二十年後の五十才になるあたり。そしてさらに十五年後の三度目。

三度目の危機を超えて

私のアイデンティティが失われそうになったと感じた最初は、社会から置いてきぼりになったと感じた時だ。置いてきぼりという表現は正確ではないかもしれない。自分から選択したことだったのだから。私は、大学四年の時に出会ったO市の歴史的環境を残す市民運動に十年近く関わっていた。その間、大学院に籍をおきながら大半の時間を市民運動に費やしていた。明治、大正、昭和初期と三代にわたってつくられてきた歴史的環境のど真ん中に計画された道路の見直しを求めた運動だが、都市計画決定済みで工事にも着手していた道路の見直しは困難を極めた。終盤には市民のおよそ半数にのぼる道路計画見直しを求める署名を集めるところまでいったのだが、結果的には歴史的環境の一部を残す妥協案で決着し、苦い敗北感を味わうことになる。それまでの決着の見えない長い時間と闘っているうちに三十才も目前になり、その時に例のものが襲ってきた。まわりを見れば同世代の友人たちは、皆、ひとかどの地位につき社会的実績をあげていた。私といえば、積み重ねたのは年だけという状態で、この先どうしたら良いのか、先の見えないくらい闇に覆われた感じであった。

その状況から逃れるために選択したのが、大学時代からの友人で市民運動を共にしてきたYと建築の設計と都市計画の事務所を起業するという道だった。二人ともさしたる専門知識や技術を学んだわけでもなく、大胆な選択であったと思うのだが。

ただ、いろいろな方の力をいただきながら、Yは主に設計の分野で、私は

必死で歴史的環境を守ろうと

主に都市計画の分野で、それなりの成果をあげることができたのは、振り返ってみれば若さの力だったかと思う。それと、なまじ専門知識や技術を学んでこなかったのが良かったのかもしれない。後に、都市デザインに三次元コンピュータグラフィックを計画ツールとして導入することにチャレンジできたのも、世の中が都市計画に住民参加の必要性や、住民主体のまちづくりの重要性が認識され始めた時に、すでに長年の市民運動で身についた感覚が活かされたのも、まさに素人であったから純真に信じるところを進められたのだと思う。

事務所をYと立ち上げてから十五年ほどたち、ようやく仕事は認められるようになったが、その間、寝る間のないという表現がおおげさでもない状態が続いていた。それに二人とも要領が悪いのか、働けば働くほど借金が増えるという経営状態だった。Yは一途にものごとを突き詰めるタイプだったし、自分自身を絶対的に信じ、それと異なる人とは鋭く対立することもしばしばあった。それが彼の持ち味とわかりつつも、このままで良いのかと深く悩んだのが二番目の転機になった。

結果的に、事務所を二つに分け、私は多額の負債とともにこれまでの自治体との契約実績を引き継ぐかたちで、現在の事務所に建て直すことにした。当然、経営的には負債の返済がキャッシュフローに重く響き薄氷を踏む思いであったが、なんとか徐々に安定し、スタッフにも恵まれ良い環境で仕事をすることができるようになったのだ。

この自分にとって二回の危機をなんとか乗り越えられたのは、家族をはじめ様々な方々の力があってだと思っているが、自分自身でいえば「今なら、もし、仮にうまくいかなくてもなんとか立ち直ることができるかもしれない。」という気になれる若さが何よりだと感じている。

その経験があって、事務所を引き継いでもらうなら、後継者が若いうちにしなければならないという気持ちになったのだ。ただ、そのことが、私自身の三度目の危機になろうとは思ってもいなかった。ちょうど友人のYが、長年の研究成果や取組実績を高く評価され、立て続けに名だたる賞を受賞され、書籍も発表されるなどしたことは本当に目出度くもあり、一方で、引退後の自分がなにものであるのかを思っていた私には、正直、感慨深いものがあった。

こうやって振り返ると、人から認めて欲しいとか、社会的評価を気にして、引退後の自分を不安に思うのは、なんと不遜なことかと思うが、そうだったのだからしょうがない。ひとは何をもって生きていると実感できるのかと、哲学的な問いかけをしても答えを見出すほどの頭もなく、仏陀の悟りはなんだったのかと本を何冊か目を通したが眠くなるばかり。そもそも仏陀が向き合った苦悩は、生、病、老、死と根源的なもので、私が抱える苦悩とは次元が違った。

そうこうしている時に手を差し伸べてくれたのが、この竹山の土地だった。それは、当初思い描いてきた野遊びの楽しみが救ってくれたわけではない。もちろん、薪を無心に割ったり、土を耕したりするのは楽しく時間を忘れさせて

くれたが、それらが心の不安を埋めてくれるほど簡単な話ではなかった。

竹山の土地の何が私を救ったのかを説明するのは、なかなか難しい。まわりの草や木や鳥たちを見ているうちにそういう気になったというと説明になっていないが、手短に言うとそういうことになる。

引退して竹山にいる時間が長くなったことにより、夜明けから日が沈むまで、春から夏、秋、冬と同じ場所をじっと見続けることは、今までになかった体験であった。ずっとそこにあるように見える草や木も同じようにでいてそうではない。同じ夜明けでも昨日と同じではないし、春がやってきたといっても昨年の春とは異なる。竹山の小さな広がりであっても、そこにいる草や木や鳥たちは、常に流れる川のように同じようでいて変化をしていっている。新しく加わるものもあれば、いつの間にか姿が見えなくなっているものもある。それでも竹山の風景は変わらず目の前にある。

最初にこの土地を下見に来た時に、一本の木に目が止まった。それは大きく折れ曲り幹だけが残った枯れ木で、それを目にして荒れた土地だなと思った記憶がある。そして、土地を買い家を建てた翌年には、これも景色として面白いかもと切るのをやめる気になった。それが三年目には、この老木は虫の住処を提供し、その虫をキツツキが探して木に穴をあけ、その穴にキノコが生え、菌の力で朽ちた木は地面に広がり土となる大きな自然の営みに気づいたのだ。そう、この世に意味のない存在はひとつも無いことをリアルに理解した。

いろいろな生き物の糧になる枯れ木

ひとは他者をつうじて自己確認することができ、生きていることも実感できるのではないかという思いは今でもかわらない。ただ、他者というのが社会や人間関係を差すだけではないと思えるようになったのは大きく違う。太陽や風や雪の日々の変化や、生き物や木々の振る舞いに目をやり、それらと呼吸を合わせるようにして自分が生きていることを感じることができるような気がしている。社会的承認欲がまったくなくなったわけではないが、それで心が不安になるといったことはなくなった。むしろ穏やかな気持ちになれる。

こんな気持ちの変化を与えてくれたのはこの竹山の土地なのだが、思い返せば単なる偶然の出会いが、その先に自分にとって重要な意味を持つことになるとは、まったく不思議なことだ。ひとから「石塚さんは、どうして田舎暮らしのような生活をされるようになったのですか。」と聞かれた時に「それは、神様の導きがあったからです。」と答えると怪訝そうな顔をされるが、かなり本気でそう思っている。ただ、神様はかなり雑だ。八百万いらっしゃったとしても、それで全世界の生き物を導くとすれば、確かにかなり大変だと思う。ひとつひとつ手取り足取り導いている余裕は到底ないはずだ。そこで、とりあえず手がかりになる事柄をバラバラとまいておく。それをうまく拾えるかどうかは当人まかせ。おそらく高いところから時々気が向いたらその後の様子を眺め、一喜一憂してそれを楽しんでいるのではないか。

友人から「隣の土地が売りに出ているんだけど買わないかい。」と湿地同然

私を見ている神さまたち

の土地を紹介され、まともに取り合わないのが普通だと思う。それを魔がさしたように買ってしまい、野遊びの場所程度に思っていたのが、いつの間にか老後の蓄えを使い果たして住まいをつくることになり、今は、ここを終の住処と思っている。そして、そのことが引退後の自分を見つけることになるとは。何がその先の自分に重要な意味を持ってくるのか見分けるのは無理だと思うが、何か心にひっかかるものがあれば、それはもしかしたら神様が蒔いた導きの種なのかもしれない。その種は誰か特別な人にだけ与えられるものではなく、誰にでも与えられるものでありそうだ。というか、かなり雑にバッと蒔いているような気がする。それに目を向け手を出すことができるかどうかはその人次第。そういうことなのかもしれない。

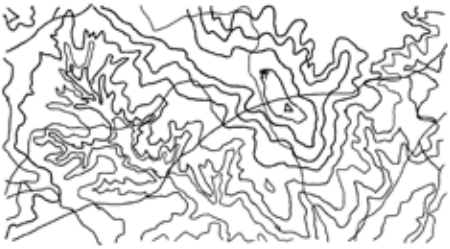
今はコロナ禍でそれまで当たり前にできていたことを慎重に、あるいは抑制して行動しなければならない状況になっている。もし、今でもまちなかのマンション暮らしをしていて、現役から完全引退したあとにコロナ禍の状況に置かれたら、私たちは、いったいどのような生活をしていたのだろうかと思う。神様は、そこまで見通して種を蒔いたのかはわからないが、この竹山の土地に導いてもらえたのには深く感謝している。

最近わかったことだが、神様は私たちのことだけでなく竹山のこの地の将来も見越してこの地に導いたのではないかと思う節がある。そのことについては、もう少しあとになってから触れたいと思う。

竹山というところ

この本のタイトルを「竹山に暮らして」としているが、実は竹山という住所は無い。私たちが住んでいるところは住所でいえば富ヶ岡となる。それはそれでご利益がありそうなありがたい名前なのであるが、この富ヶ岡の範囲は東西に六㎞以上あり、私たちが住んでいる場所をあらわすにはちょっと広すぎる。一九五二年発行の地形図には、竹山という地名が大きく書かれているが富ヶ岡という文字は見当たらない。どうやら竹山という呼び名の方が歴史がありそうである。

古い村史を見ると、富ヶ岡は昭和十年（一九三五）の字名地番改正によってつけられた地名で、それまであった高台と音江別を合併したとある。そしてこの高台は文字通り地形的に高台に当り、この頂上に当る竹山十字路附近からは、遠く山々やや近隣のまちを一望に見わたせることなどから、この高台の名がつけられたものとある。竹山十字路というから古くから東西南北の道が交差する高台にあったということになる。そして竹山の名称は、この辺にクマ笹が密生していたため竹山とつけられたと書かれている。クマ笹とあるが、正確にはチシマザサで別名根曲がり竹という。クマ笹とちがって丈が三ｍになることもある大物だ。日本でいえば孟宗竹がポピュラーだが、孟宗竹が中国から持ち込まれるまではタケといえばこの根曲がり竹だったそうだ。春になると親指くらいの太さの筍が出てきて山菜として人気がある。そのため、その頃に竹山の筍を目当てに一稼ぎする人たちが大勢入り、今では立派な筍が取れる根曲がり



昔の竹山の丘陵地形

竹は随分少なくなってしまったという。さらに昭和五十一年（一九七六）頃に一斉に花が咲く百年に一度とか言われる現象がおき、その後一斉に枯れてしまったとの記録もある。それでもうちの敷地の縁辺部には根曲がり竹がびっしり生えていて、そのうち東側の日当たりの良いところのものは丈も大きく、立派な太さの筍をいただくことができる。

地形的には竹山は広大な平野に舌のような形に張り出した丘陵の一番高いところに位置する。高いと言っても標高百十五ｍちょっとなのだが、他に遮るものはないので、今でもはるか遠くの山々が一望できる。春先など平地に向かってなだらかに下る向こうに、頂きに雪が残る山々が連なる姿はいつ見ても見入ってしまう。

この丘陵の一部は原始林として国の特別天然記念物に指定されており、それ以外でも森林が多く見られる。日本植生誌によれば、この丘陵はトドマツを主とする針葉樹林で下にはチシマザサが多いとされている。広葉樹林としてはハルニレーイタヤカエデ林、ミズナラーベニイタヤ林、シナノキーイタヤカエデ林、ヤチダモ林（ハシドイーヤチダモ群集）、ハンノキ林（ハンノキーヤチダモ群集）などが見られ、多様な森林があることによって、見られる植物の数も多く、都市近郊の天然林として貴重であると書かれている。私たちのすんでいることころでも、これらの樹木はよく見ることができ、野草もいろいろな種類に出会うことができる。

私たちが住むことになった土地は湿地状態だったと書いたが、このあたりはどうだったのだろう。この丘陵部の地質をみると全体的に火山性の土のようだ。地層を上から見ると、火山噴出物がベースの軽石質の砂に植物が堆積してできた泥炭が挟まったものから始まり、小さな軽石を含んだ泥炭質の粘土、その下に噴火の時に流れでたり降ってきた軽石の層がつづき、さらに下は粘土やそれよりやや大きい粒のシルトに泥炭質の粘土が見られるようだ。その下は安山岩質になるが、全体的に地表に近いところは軽石や粘土が多いようだ。丘陵の先端の低地に近い方では、明治の三十年代にそこで取れる粘土でレンガを焼いていて、今でもセラミック工場が見られる。このような地質だと地表に落ちた雨水はなかなか浸透しにくく溜まりがちになり、私たちの土地も湿地状態であったのはうなづける。

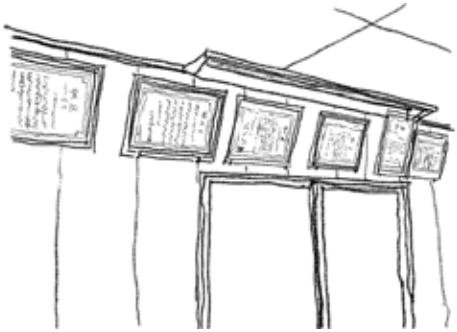
このような竹山に人が入ったのは明治二十七年（一八九四）頃とされており、当初は根曲がり竹に混じって生えていたイタヤやカバを使って炭焼きをされていたようだ。そのうち竹山の用材も尽き、遠くに出向き炭焼きを続けるかたわら、木を切ったあとを開墾して畑をつくっていたと記録にある。当時の風景を伝える写真はないので推測になるが、高木の姿はなく勢いの強い根曲竹が一面を覆って、ところどころに開墾された畑があるという状態だったのではないかと思う。基本的に、暮らしの場として人の手が入るところに鬱蒼とした森林が残ることにはならない。木々に囲まれた別荘地として有名な軽井沢や、雑木林

が原風景のように言われる武蔵野も、明治の頃は一面草地であったようだ。ここもそうだったのではないだろうか。

竹山にまとまって入植するようになるのは戦後すぐの昭和二十四年（一九四九）から二十七年（一九五二）頃である。樺太から引き上げて来られた方などが、国から土地を斡旋されて竹山に入るのだが、それも大変だったようだ。近くにお住いのSさんは、当時のことを話されるときに普段の温和な顔とは違う表情を浮かべながら「ほんとに、あのころは辛かった。」と言われたのが印象に残っている。

国は酪農を奨励したようだった。確かに粘土質の土地で畑をつくるにしてもまともな土にするには時間がかかるので合理的な判断だったのかもしれないが、それでも斡旋された土地には一抱えもある木がたくさん生えていたそうで、それを切って抜根するという重労働が求められたのだ。その頃には炭焼きで一旦失われた木々がまた大きく育っていたのだろうか。切った木の根っこを抜くのはとても大変な作業だったようで、Sさんのお父さんはS式抜根機というのまでつくられたそうだ。現在、竹山に住まわれている方々の多くは、そのような苦労を経験されていると聞く。

地区の集会所になっている竹山会館の壁には沢山の表彰状が飾ってある。それらはみな農業振興に竹山地区が貢献したことを讃えるもので、一九六〇年台の半ばには苦労が少し報われるようになったことがうかがえる。



竹山会館に掲げられた農業表彰状

そんな竹山も、一九七〇年から始まった大規模団地の造成に伴って移転を余儀なくなってしまった方々もいて、地域の繋がりは時とともに変わってきている。それでも今も竹山町内会として強い繋がりが残っている。現在、十六戸で町内会が構成されているが、私たちもそのお仲間に入れていただいている。毎年、決まった集まり事があり、コロナ禍までは年八回あった。町内の清掃などの後には小宴が催され、そこで聞く町内の昔の話や日々の出来事の話は興味がつきない。最初に私が聞いたのは、M会長のスズメバチのトラップの作り方だった。春先、少し暖かくなる連休の頃に、スズメバチの女王蜂が目覚め、巣をつくりはじめ徐々にハチの数が多くなり、それらのハチも総出で巣をどんどん大きくしていくのだそうだ。大きくなってしまった巣は素人が手を出せないくらい危険なものになる。ただでさえスズメバチに刺されると危険なのだが、巣を壊されるとなると総出で立ち向かってくるのでへたに手を出せないのだ。そこで女王蜂が巣をつくり始める前に駆除することが重要になる。そのための捕獲器のつくり方を絵入りで解説してくれる。M会長は頼まれれば大きくなった巣の駆除もするのだが、できればみんなで巣をつくるまえに対策を取りましょうというお願いなのだ。あと、大家族のMさんの木臼で二升の餅つきをする話や、建具職人のKさんの弟子入りした親方がノミを研いだら立てて倒れなかったという話など、ホホウという話ばかりだ。

年中行事のなかに竹山神社祭というのがある。竹山で標高が一番高いあた

教えてもらったハチトラップ

りに竹山神社はある。市史によると最初は小祠で春日大社と書かれた木札と鏡一対が祀られていたが、明治三十八年（一九〇五）に、縁あって毘沙門天を合祀して、眺望の良い現在地に創立されたとある。一九九八年には建て替えら鳥居のある現在の姿となっている。今は、神社のまわりはすっかり木々に覆われているが、木々が無かった頃は、山並みが一望できたようだ。竹山神社祭といっても特に神事があるわけではないが、年二回、神社のまわりの落ち葉を掃除し、お供えをして町内皆でお参りするのだ。そのほかに年が開ける深夜に皆で初詣するのを欠かしたことがないと聞く。町内会では建具職人のKさんが神社担当として行事の仕切りをされている。毎年、神社会計の報告もされるのだが、お賽銭も結構な額になることから、この地域だけでなく広くお参りに来られる方がいるということだ。

ここは、最初にふれたとおり市街化調整区域に指定されている。市街化調整区域は、市街化を抑制する区域とされ、住宅の建築も厳しく規制されている。市街化調整区域というと雑木林や農地がひろがり、ところどころに資材置き場などがあるイメージだが、なかには竹山のようなれっきとした集落もある。そこには豊かな自然があり、時にはその樹木などを生活の糧にし、またその自然と闘ってきた時間の積み重ねがある。明治の中期に先人が入植して以来、数々の苦労を重ねてきた人々が互いのつながりを大切にし、地域の守り神とし神社を祀り大事にしながら暮らしているのだ。

町内で竹山神社に参拝

この土地について

最初にここのことを「千五百坪の森に囲まれた（気分になる）暮らし」と書いたが、この土地を紹介してくれた隣家の友人が以前に撮った写真を見ると木が一本も生えていなかったことがわかる。ここは緩やかな斜面を造成して人工的につくられた土地だったのだ。一区画千から千五百坪で共同井戸から給水される計画的な分譲地だったことが伺える。

私の入手した土地の登記を見ると、一九六六年八月に分筆され翌年六月に前住者が購入していることがわかる。おそらく、その頃に造成されたものであると思われる。今から五十五年前になる。私が森といっているのはその間に育ったものということだ。最初の冬の大雪で除雪を手伝ってくれたSさんは分譲当時のことを記憶しており、木といえば区画道路沿いにトドマツが植えられていたくらいだという。それと巨石。私の土地にも立派な石が四個も鎮座している。この石については最初は趣味的に馴染めなかったが、そのうち何かありがたいものに見えてきて、今では年のはじめに供え物をして拝んでいる。

さて、話を木のことに戻そう。区画道路沿いのトドマツ以外の木は先住者が植えたかというと、そう思われるのは数本のオンコだけと見うけられた。結構な樹高で目立つのはハンノキとヤチダモで、あとはシラカバやクリそしてヤナギだ。いずれも庭園樹としては馴染みが無いもので、このあたりの丘陵の固有種に符合する。ヤチダモやヤナギが多いのは、ここが当初から水気の多い土地であったことが伺える。ハンノキやシラカバはパオイオニア樹種の代表格だ

造成当初の敷地周辺

そうだ。パオイオニア樹種は、栄養の乏しい土地でも真っ先に根を生やし、空中の窒素を地中に固定し次の世代の樹木が成育しやすい環境をつくってくれるのだそうだ。

クリはどうしてか。これは先ほどのSさんの話では、せっせと植林したのはエゾリスだとのこと。エゾリスは冬眠しないので雪に覆われた冬中どこかで食べ物を調達しなければならない。そのために、秋になるといろいろな木の実を集めては落ち葉の下などに埋めて冬に備えるのだそうだ。確かに地面をよく見ながら歩いていると、いろいろな木の実が落ちている。そしてその周辺には、その実をつける木が見当たらないことがある。これがエゾリスの植林なのか。だが、見つけるのは雪の融けた春先なので、どこに埋めたか忘れてしまったものかとも思う。彼らの忙しない行動と、どこかおバカそうに見える風貌がそう思わせるのかもしれない。隣家で自然に生えてきたクルミの小さな木をもらって、将来、私たちがいないかもしれないがエゾリスの食べ物になればと敷地の片隅に植えたことがある。植えて一ヶ月ほど経ったころその木の根元にクルミの実が落ちているのを見つけた。もちろん、その木のものではないのは明らかだが、エゾリスが将来の実りを楽しみにお供えをしたのではないかと真面目に考えてしまった。おバカに見えて実はしっかりした将来設計を描く力があるのかもしれない。私が見ている木々は、造成で裸地となったこの土地に風や虫や動物たちの力を借りて長い時間をかけて根付いてきたものたちであるのだ。

一旦裸地となったこの土地にどのように樹木が育ってきたのかを記録したものがあると面白いと思うのだが、そのようなものがあるはずがない。ただ、過去の航空写真を探して見てみると興味深いことがわかった。一九六一年の航空写真からは、この土地を含め周りは一面雑木林で、自然に恵まれた環境であったことがわかる。それが十年後の一九七一年の航空写真では木が一本もない裸地に変わってしまっている。この時点では家は一軒も建っていない。その五年後の一九七六年の航空写真では家らしき建物が六軒確認できる。都市計画法が制定され市街化を抑制すべき区域として市街化調整区域の指定制度ができたのが一九六八年で、それがこの土地に適用されるまで少し時間差があったと思われるが、それもあって駆け込みでつくられたのではないかと思われる。

その写真を拡大して見ると、木と思われる影が何本か確認できる。それからまた十年近く後の一九八五年の航空写真では木の影が列としてつながってきているのがわかる。その木の列は丁度四角い土地の北西から南東にかけて対角線状に位置している。建物は四角い土地に平行に建っているので人工的に植えた木としては配置が不自然である。どうして対角線に木が列をなして生えたのか。その分野の専門的知識があるわけではないので、あくまで素人考えであるが、次のようなことだったのではないか。

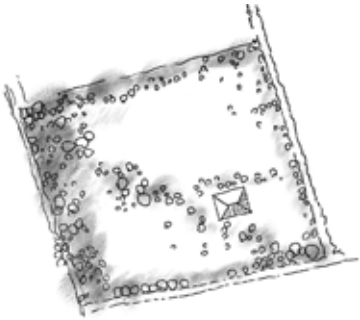
もともとの地形が土地の北東から南西に向けての傾斜地で、そこを平らに造成するにあたって、北東の土地を削り南西に埋めたとすると、木の生えてい

造成地はかつて森だった（四角は我が家の場所）

る対角線は表土が比較的残っていたのではないか。裸地のなかでかろうじて育つのに適した土があるところに風や生き物の力をかりて偶然降り立つことができた種が、一生懸命根をおろした結果だとすると感慨深い。

今は、いろいろなところに木が生えて明確に対角線の木の列は認識できない。それから三十五年以上経つので土もできてきたのかもしれない。ただ、よく見ると同じ種類の木が小さな集落をつくっているように見える。大きな木のまわりに同じ種類の小さな木が確認できる。ハンノキの集落、ヤナギの集落、ヤチダモの集落、ミズナラの集落などなど。それがさほど広くない敷地に点在するように広がり、その隙間を埋めるようにいろいろな種類の木が生えているのだ。もっと知識があれば、それぞれの集落やその間を埋める木々が、なぜ、そこに根をおろすことになったのか、水や土壌との関係で説明できるのかもしれない。

釣り好きのTさんが竹山のこの土地の樹木を見たときに、「日頃、釣りで行くところで見る樹木と種類が違うな。」と話してくれた。ここは樹種が多様で造林された山で見られるのとは違うということだ。多様性は、単にいろいろなものが混在している状態ではなさそうだ。多様性は、それぞれに適した場があること。その場を選択できるかどうかは自己的に決定できるというより他者の力や偶然の力が加われる状態であることが大きい。そして、それらがあるグループをつくったとして、その間にさらに生きる隙間があるということか。



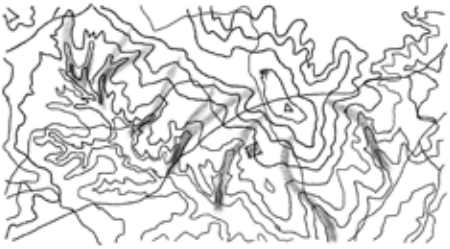
造成地に家ができたあとに生えてきた木々

こうして見てくると、もうひとつ疑問に思うことがある。造成で裸地となったここが、三十五年以上の時間のなかでどのようにして湿地状態になってしまったのかということだ。前に、側溝が土砂で埋まってしまってミニ扇状地のような状態になり、いわゆる扇端に相当するところが湿地状態になったのではないかと書いたが、そもそも側溝に流れる水はどこからきているのか。

過去の地形図を探してみたところ一九五二年発行の二万五千分の一の地形図があった。まだここが市ではなく村だった頃で、市街地らしきものは見当たらない。つまり素の地形がわかる状態の地図だ。これによると私の住んでいる土地は南北に長い丘陵の頂部近くに位置するようだ。丘陵の頂部からは四方に沢のような筋が確認できる。私の土地がある造成地は、その沢のひとつを何段かに平らに整地してつくられたもののようだ。

もうひとつわかったことは、この南北に長い丘陵の端部には明治以降レンガを生産する工場が盛んにつくられ、現在もレンガの産地として名の通ったところだということだ。私の土地も、家をつくる際におこなった地質調査の結果を見ると三m程度の深さまで粘土層だった。粘土は非常に細かな粒でできた土で、水も浸透しづらい性質がある。

そもそも水はけの良くない粘土が厚くある土地で沢状の地形であれば、雨が降ればそこを水が流れることになる。造成で平らにしてもおそらくその下に粘土層に支えられた水の道が残っているのではないだろうか。そういえば、こ



竹山の丘陵に刻まれたたくさんの沢

の周りの土地のいろいろなところに小さな池が見られるのだが、それらは水の道から僅かに流れてくる地表には現れない水を溜めたものかもしれない。そしてそれらの池から流れ出る水が側溝に集まり一年中枯れない流れとなっている。そう考えてみると、数万年の月日を経て堆積され、また風雨に削られしてできたこの土地の性質は少々人間が造成しても変わらず今も生きているとも言える。そして、人の手が離れ側溝が埋まったままになったことによって、行き場を失った水がちょっとした傾斜を頼りに僅かな土砂と一緒に土地全体に流れ、常に水の溜まった湿地のような状態になっていったのかもしれない。

造成直後に根をおろした木々も、水はけの悪い土地に適応するハンノキやヤチダモそれにいろいろな種類のヤナギが優勢になり、草花もアシやガマそれに苔のたぐいがあちこちにコロニーをつくっていったのだろうか。枯れた木や草も、常に水がある状態では土になることもできずいわゆる泥炭の状態で粘土層の上に堆積することになる。そうやって半世紀の時間をかけて今の土地の状態になり、そこに私たちが偶然に出会うことになった。

そう考えると、単に人が暮らす上で厄介な湿地に出会ってしまったと言ってしまうのは憚られる。土地は人間の尺度を超えた大きな大きな時間の流れのなかで変わらぬ性質を保ちながら、時としてその形状を変え、その都度多様な動植物を迎え入れ生きている。そのほんの一コマに私たちが加えさせていただいている。そう考えるのが自然のような気がしている。

この土地の植物たち

もう少し草花に目を向けてみよう。木もそうだが草花についてはほとんど見分ける知識がなかったのだが、それでも植物図鑑を頼りに日々見ていると何となくわかってくる。なぜかというと草花の中には明らかな集団をつくっているものがあり、どんなに節穴であっても目に入ってくるものがあるからだ。

まず目についたのはスミレだった。最初の年の春だったと思うが、ヤチダモやミズナラ、ヤナギの木々に囲まれて少しひらけたところがあるのだが、気温が徐々に上がってくると一面丈の低い草が緑色の敷物のようになり、そのうち小さな紫色の花が咲き始めた。木々も葉をつけ始め、その木漏れ日がスミレにスポットライトを当てるようになる。家のあるところからは丁度対角線の角にあたり離れているのだが、そこに行くのが楽しみになる。早々に妻と「すみれヶ原」と名付けた。

次に目についた集団はヨモギだった。「すみれヶ原」の隣にあったせいもあるが、特徴的な葉のかたちだし、葉にさわさわと手を触れて鼻に近づけるとヨモギ餅の香りがするのですぐわかる。まあ、その程度ですかと笑られそうだが、色やかたちだけでなく、香りや場合によっては味覚なども使ってなんとか敷地に生えている植物を理解しようとしていたのだ。ヨモギの集団はもう一箇所あるのだが、それを認識するのは少し後になってからだった。なんせ自分の敷地といっても一面木と草に覆われたところを隅々まで足を運ぶのは結構たいへんなのだ。

すみれヶ原

ヨモギの集団から先、少し日当たりの良いところに出るとセイタカアワダチソウの集団に出会う。稲穂のようなかたちに黄色い花をつけるので、これは見分けがすぐつく。このセイタカアワダチソウは、根から周りの植物の成長を邪魔する物質を出し勢力を拡大する厄介者らしい。ただ、勢力が拡大しすぎると自分が出す物質で成長が抑えられてしまうという。セイタカアワダチソウを蕾のうちに収穫して乾燥させるとデトックス効果のある入浴剤になるとの情報もあり、最初の年にせっせと刈り取ったせいもあるかもしれないが、三、四年たった頃には数が減ってきたような気がする。そのかわり増えてきたのがススキである。これも非常にわかりやすいのは良いのだが、セイタカアワダチソウに負けないくらい勢力を拡大する力があって、あっと言うまにススキが原になってしまう。

敷地の真ん中あたりは、特に水気が多く、分け入るとヌプッヌプッと足が沈む状態で、木もほとんど生えていない。その中で元気にしていたのはアシとガマだった。ガマは種の塊である「穂」がお祭りの屋台でみるフランクフルトそっくりなので私でも見分けがつく。この集団が湿地感を高めていたのだが、側溝を復活させ扇状地をつくっていた水をそちらに導くようにしたら急に数が減ってきた。三年ほどたったら、側溝沿いのわずかに水気が残るところに数本穂をつけるだけになり、その翌年にはまったく目にしなくなってしまった。それはそれで何か寂しい感じになるのは身勝手そのものなのだが。

特徴的な姿のガマ

アシとガマが姿を消していくのと入れ替わりに目に入ってきたのは、フキと野菊だった。アシやガマは丈が高いのでそれらはもともとその影に生えていたのかもしれないが、水気が引くのと同時に日の光もたくさん当たるようになり勢力を増してきたように思われる。フキと野菊は今のところお互いに侵食し合うようなことはない。ただフキは家を建てる時に水はけの良い場所にするためにたっぷり積み上げた砕石だらけのところに徐々に姿をあらわし、いつのまにか群落をつくってしまった。土などまったくなく他に競争相手の植物がいない場所で健気に仲間を増やしてくれたことで、殺風景な場所が変わってきたのは嬉しかった。それは単に植物が生えてきたというだけではなかった。フキの大きな葉が冬になり朽ちていくことで徐々に砕石だらけのところに土らしきものができてきたのだ。数年経つとフキだけでなく木々の落ち葉も加わり、風で飛ばされてきたいろいろなタネが小さな芽を出すようになってきた。五年経って砕石のところにブドウの生垣をつくりたくなって穴を掘ったら、上部三㎝くらいに黒々としたものができて、いろいろな植物の根がからまっていたのには驚かされた。

最初のフキの群落のすぐ傍に、不思議なサークルを発見した。春の早い時期にオンコと思われる小さな枯れ木を囲むように正確に定規で計ったような円形の緑の群落ができるのだ。時期がたつとそれにオレンジ色の特徴的な花が咲くことでヤブカンゾウの群落だとわかった。敷地の他には見られないそこだけ

ヤブカンゾウのサークル

の群落だたのだが、隣で勢力を増してきたフキがそのサークルに侵入し大きな葉をつけるようになり、だんだん元気がなくなったのかここ数年花を見ない。

野菊の群落は敷地の丁度中央あたりにかなり広い範囲であり、秋になると白や薄紫の花がそこら一面に咲くのは壮観だった。しばらくするとそこにも小さな群落をつくるものが出てきた。ハンゴンソウという植物で妙に丈が高くなりてっぺんに黄色の花を傘状にたくさんつけるのでよく目立つ。最初は小さな群落だったのがだんだん大きくなり、あちらこちらに分家して勢力を拡大しつつある。

この他にも小さいけれどミズバショウやエンレイソウの群落が確認できたが、それらは日陰に育つのであまり競合相手がいないのか、今の所はそれぞれに平和に暮らしている。

私たちがこの土地に住み始めて五年しか経っていないのだが、自分たちが暮らしやすいようにと水路を調整したことで、植生が大きく代わり、景色もどんどん変わってきている。条件が変わるとそこに適した植物が競って自分たちの場所をつくりはじめる。そのなかで丈が高いとか葉が大きいとか、過酷な条件にも適応できるとか優位な資質をもったものが勢力を増してくる。ただ、セイタカアワダチソウのように勢力を増しすぎて自滅するのもある、そしてそのあと、じっと機会を伺っていたものが台頭する。かれらは常に動いているのだ。それも短期間にかなりダイナミックに。

竹山を食べる

敷地内をうろうろしているといろいろなものを見つける。まず、目に入ったのはフキノトウ。まだ一面枯れ草色でところどころ雪が残っているときに、鮮やかな薄緑色の蕾は目に入らないわけがない。さっそく二、三個いただいて酢味噌和えや天ぷらで晩酌にいただく。独特の苦味と香りが口の中に広がると、何か新しい季節のエネルギーをいただいた気持ちになる。フキノトウを美味しく食べられる期間はそう長くはないのだが、それでもちょっとずつ違う環境で育った群落から時間差で収穫できるので、それなりに長く楽しめる。もうそろそろ終わりかなという頃にはフキ味噌にして余韻を楽しむこともできる。フキノトウが終われば、今度はフキの軸をいただくことになる。こちらはアクだしなどの下処理が必要だが、当然の美味しさだ。軸が赤いのはまずいと言われるが採りたてのフキなど馴染みがないせいか十分食べられる。大きな葉も肉など包んで蒸し焼きにするという使い方があってそれはそれで楽しい。

枯れ草色の地面もだんだん色づき始めるとササタケが顔を出す。ササタケは根曲り竹の新芽でタケノコよりは小さく細い。でも香りは負けていない。問題は採るタイミングだ。早起きは三文の徳の言葉どおり、早朝が勝負。朝でてきたものは手で根元を握って力を入れるとシャキッという感じで折れる。採ってすぐに下処理をするのだけれど、お湯で茹でるだけで良い。これも淡いえぐみがたまらず酒がすすんでしまうのでほんとに困る。敷地の四周に根曲がり竹が自生しているのだが、良いものは採れるのは一箇所だけ。個人的には太短い

のがうまいと思うので、それ以外は採らずに立派な竹になって新しい芽を出すのを期待する。無いときは無いですませる。そういうことができるのは家のすぐ近くにあるからで、これがわざわざ車を飛ばして採りに来たのであればそう潔く引き下がれないだろう。

同じ頃に顔を出すのがワラビ。ワラビ目になるまで見つけるのが難しかったが、一旦目ができるとあそこにもここにもと見つけることができるようになる。ただ、ワラビもあまり成長してしまうと硬くなるので、良さそうなのだけを選んで採るが、それでもちょっとした時間で二人で食べるには十分過ぎる量になる。翌年からはだいたいどこに出てくるか場所がわかるのでますます簡単に採れる。採った後、灰汁につけてアク取りをしなければならないけど、灰は冬のあいだ焚いていた薪ストーブからもらえば良い。

あと、春の定番にギョウジャニンニクがあるが、残念ながらそれは自生していなかった。ところが、そこに神の使いのようなMさんが登場。Mさんはこの竹山の町内会の会長で私と数ヶ月違いの同じ年だったこともあり、竹山では新参者の私たちに何かと気をかけてくれる頼りになる人なのだ。この人との出会いが無ければこれほど竹山暮らしを楽しめることができなかったと思う。そのMさんが、時々電話で「石塚さんのところに、これある?」と聞いてきて、無いというとすぐに持って来てくれるのだ。これまでいただいたのは、ギョウジャニンニクのほかに、ウド、ミョウガ、モミジガサなど。贅沢このうえない。

フキノトウ

ササタケ

いただいたギョウジャニンニクを植える

Mさんからいただいたものにシイタケのホダ木がある。家を建てる時にどうしても切らなければならなかった木から選んでシイタケの菌を埋め込んだものを二十本くらい新築祝いに届けてくれたのだ。二年後を楽しみに見よう見まねで寝かしたり立てたりしていたが一向に出てくる兆しがない。Mさんのところも良くないみたいで菌が合わなくなったのかもしれないとのこと。それでも処分するのは忍びなく上下を変えたりしながら置いておいたら三年目くらいに少しだけシイタケらしきものが出て来た。ただ、大半のホダ木は兆しがないままで、また翌年少し出るというのを繰り替えしている。昨年には自分で駒打ちという菌を原木に打ち込んでみたが、こちらもどうなるものか。

その間、近くの方が訪ねて来た時に「ここはヤナギタケが良く出ていたけどどう？」と聞かれた。そんなキノコは名前さえ知らなかったが、そう言われて図鑑を頼りに家の前の少し古くなったヤナギの木を見てみたら、特徴的な傘模様のヤナギタケが生えているではないか。図鑑を頼りにキノコを食べるなと言われるので私は消極的だったが、こういうときは妻が強い。さっさと味噌汁にして夕飯の一品にしてしまった。口に入れると少し揮発性の香りとヌルッとした食感で、かなり美味しい。

これに気を良くして敷地の木や倒木を観察していると、家を建てる時に切った木で薪にするには当時の力量では持ち上げることも切ることもできなくて野積みにしたままのものに結構まとまったキノコを発見した。これはMさんに確

木のウロに生えてきたヤナギタケ

認してもらったらエノキタケだと言う。エノキタケというとスーパーで良く目にするのは白くて細く束状になったものだが、茶色で太くまとまっているけどそれぞれバラバラに生えていて、とてもそうは見えなかった。でも、天然のエノキタケはそうなのだと言う。Mさんも自分の知らないキノコを図鑑で調べて食べるなんてことは絶対しないという人で、その人がこれは美味しいというのだから食べない手はない。さっそく酒のあてにいただくことにした。

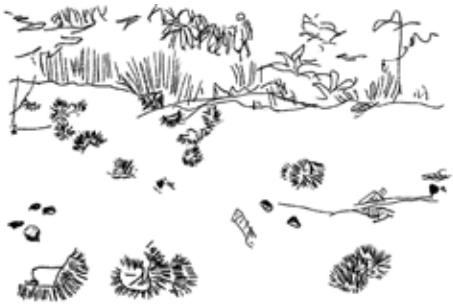
こうなると妻はキノコハンターとなって、いろいろなキノコを家に持ち帰り二人して図鑑とにらめっこするのだが、どうも決め手に欠けるものばかりで試しに食べてみるという勇気はわかなかった。そんなとき、妻がこれは間違えなくタマゴタケだというものを見つけて来た。傘は濃いオレンジ色から赤に近い色で表面は少し艶がある。見るからにこれは毒でしょという姿なのだが、軸の根元に白い殻状のものがあるのがわかる。これが名前の由来で土から出て来たときは卵の殻のような白い姿で、その上部が割れて赤い傘が出てくるのだ。Mさんはそんなもの知らないというし、どうしたものかと思ったが図鑑によると超美味でヨーロッパでは皇帝のキノコといわれるくらい珍重されていると書かれているではないか。こうなったら食べてみたい気持ちの方がまさってしまう。オムレツにして食べたら、強い揮発性の香りが卵と合ってなんとも言えない味わいだった。隣人がそれを聞きつけ、うちにもあったよと見せてくれたのはあきらかに毒のあるテングタケだった。

皇帝のきのこタマゴタケ

秋になると栗がたくさん実る。あまり大粒にはならないのだが、あちこちから集めれば栗ご飯には十分だ。もとはと言えばエゾリスが孫子のためにとせっせと植えたものというか、冬に備えて枯れ葉の下に埋めておいたものを忘れてしまったものかもしれないが、いずれにしろ彼らの努力の賜物なのだから、遠慮気味に採らなければ申し訳ない。まあ、そんな気遣いをしても美味しそうなものは真っ先に虫が食べてしまうのだが。

秋の恵みはそのほかにもヤマブドウがなるのだが、シラカバの木にからまってどんどん上に成長してしまっていて、採ることができない。高いところにできて採ることができないといえば、クワの実もそうである。サルナシもご近所の森では時々目にするが、残念ながらうちの敷地には今の所見当たらない。そんなに簡単になんでも手に入るわけではない。

春の山菜、秋のキノコや栗などは定番の恵みだが、欲深いというか探究心が旺盛というか、私たちはそこで止まらない。春先に採り放題になるヨモギを韓国お好み焼きのようなジョンにして食べてみたら美味しかったので、もっと敷地に生えているもので同じように料理できないか考えてみた。まず目に入ったのがスギナ。なんせ家の周りにはびっちり生えていてふかふかの緑の敷物を敷いたような状態になる。その前のツクシの時にも炒め物にしたりして美味しくいただいたが、どうも袴を取ったり下処理がたいへんなようだ。スギナになるとそのままいけるのではないかということでジョンにして食べてみた。



クリがあちこちに

ちょっとジャキジャキとした食感があるが、春を食べているようでこれはこれでいけるということになった。

こうなると、毒でなければなんでも食べられるのではという気になる。次に試したのがタンポポの花。これは花がパッとひらくように天ぷらにしてみたら姿も良いし味もまあまあだった。油で揚げることによって味の癖が和らぐようだ。タンポポの葉も油で炒めてみるとそれなりにいける。気のせいか野のものは季節の「気」をいただく美味しさがあるような気がする。スベリヒユという草もいける。ちょっと粘りがあるのだがそれが美味しい。図書館の本棚を見ると「道草を食う」といったたぐいの本が結構あり、そのなかでもスベリヒユはおすすめとあった。

お茶にして楽しめるものも結構ある。先のスギナもそうであるが、白い花が可憐なドクダミもあちこちに生えている。まあ、身の回りにはまだまだ食べたり煎じたりして飲めそうな草がありそうなのだが、先のお楽しみにすることにした。なにせ、Mさんからのいただきものが、背丈より高いフキ、立派な太さのウド、ひと抱えもあるヒラタケとか質量とも豊かでそれだけでも満足してしまう。さらに隣人が育てているカシスやブルーベリー、カリンズ、ブドウなども採り放題なので最初の年は果実酒にしたりジャムにしていたが、そもそも私たち二人でそんなに飲んだり食べたりすることができるはずもない。気が向いたら採って食べて季節を感じる。それが贅沢ということか。

スギナもご馳走

わたしたちの自給自足

よく「そんな広い土地を手に入れて、畑をつくって自給自足でも考えられているんですか。」と聞かれるが、そんな気持ちは毛頭ない。そもそもここは湿地状態でスコップを入れると土になりきらない枯れ草が薄い層をつくっていてその下は鼠色をした粘土になる。スコップでそれをすくおうとするとヌプッとした重い手応えで、うまくすくい上げられたとしても、その小さな穴がみるみる下から湧いてくる泥水で埋まっていく。そういう土地なのだ。野菜をつくろうとしたら、まず、暗渠排水という穴の空いたポリエチレンのパイプを埋めて水はけを良くしなければならない。そのうえで、水はけを良くする火山礫などと土を入れ植物の生育に適した土壌をつくらなければならない。土壌ともっともらしく書いたが、細菌などの微生物からミミズなど、様々な生物が住む環境が大切なようだ。枯れた植物や死んだ動物を分解して植物の栄養をつくったり、空気中の窒素を植物に渡したり、植物の害になる細菌などを抑えたりしてくれるのも土壌のなかにある多様な生物環境の力ということのようだ。そのような生きている土をつくる必要がある。それだけでも大変な労力と時間を必要とする。

そこまでしなくても竹山にはそれぞれの季節を味覚や香りを通じて感じさせてくれる植物が勝手に生えているのだ。それが竹山の食の中心にある。

その周りにあるのがMさんからのいただいたもののようなご近所同士のお裾分けだ。五年もいるといろいろな方と知り合いになる。その方々が「石塚さ

ん、これいらないかい。」と自分の畑でできた野菜や果物を持ってきてくれる。わたしの方からお返しするものがあまりないので恐縮するが、確かに収穫時期はいちどきにやってくるので、それぞれのお宅では食べきれないほどできてしまうようだ。それぞれのご自慢の畑の実りなので美味しいことこの上ない。贅沢な悩みとしては、ある時期同じいただきものが集中することか。

さらにその周りにあるのがご近所の農家さんの野菜だ。隣家のNさんの息子さんが、新規就農され近くで畑をやっている。有機肥料で収穫まで無農薬で栽培することに拘られている。収穫の季節になるとまとめて買わせていただいている。それに良く買わせていただいているのが農協の直売所だ。種類は少ないが地元の農家さんの名前入りで旬な野菜が並ぶ。それも安い。ご近所の農家さんでお年を召された方も、時々、この直売所には出されていた。あのおじいちゃんがつくった野菜と思うと一段と親近感がわく。

さらにその周りにあるのがこのまちとその周辺の数々の農家さんの野菜だ。きちんと土をつくり、丹精込めて育て、丁寧に収穫したものばかり。ただ、店頭に綺麗に並んでいる野菜の影に、形が悪い規格に合わないなどの流通側の理由で日の目を見ない野菜があるのはどうも気になる。農家さんの作業を見せてもらうと収穫までの大変さもさることながら、この流通にのせる選別に必要とする労力がばかにならない。そのようにして店頭に並んだ野菜を買うことまでが竹山の食のベースだと思っている。

この土地での恵の和

自生しているものを採っていただく。ご近所さんからのお裾分けをありがたくいただく。ご近所の顔の見える農家さんから購入する。頑張っている地域の農家さんから購入する。それだけで素人の野菜づくりが登場する隙がなくなってしまう。ただ、そのうえで台所からつっかけで外に出てちょっと彩りや香りになるものを摘んできて使う贅沢はしてみたい。

家を建てた翌年、雨が降るたびに家の周りにできる水たまりに耐えられず、Mさんにお願いして、暗渠排水と砂利を入れてもらうことにしたのだが、その時にMさんから「畑くらいやらないかい。」と言われて、ついでに小さな畑ができるようにそこにも暗渠排水と礫、それに黒土を入れてもらった。「もっと広くなくていいの？」と言われたが、妻が謙虚に「それだけでもできるかどうかわからないので。」と本当にこじんまりした畑をつくってもらった。

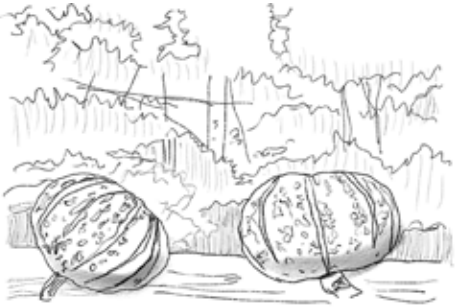
それも、妻の構想としてはワイルドな原野に整然と畝がならぶ畑は似合わないということで、できるだけ境界もあいまいに、野菜だけでなく好きな野草もパッチワークのように畑に共存するのを目指すことになった。振り返ってみるとこの考え方は正しくて、良く風景に馴染んだ畑になっている。最初に植えたのはハーブ類とトマト、それにラディッシュだったか。いずれも身近にちょっとあると重宝するものだ。ハーブはミント、レモンバーム、オレガノ、タイム、チャイブ、シャンツァイ、シソなどである。残念ながらローズマリーはこちらでは露地で越冬できないので鉢植えにして畑に置いてある。ハーブは当然料理

ささやかな畑

にちょっとあると嬉しものだが、花をつける姿も綺麗で舌だけでなく目も楽しませてくれる。トマトは栽培しやすいこともあるし、いくらあっても煮て冷凍しておけば冬にも使える。この畑はもっぱら妻の領域であるが、ちょっと脇にカシスやブルーベリーの木を植えさせてもらった。まだ、苗に毛の生えた程度であるが、少しだけ朝のヨーグルトにのせると彩りも綺麗だし、朝から野の「気」をいただけるのが嬉しい。

数年経つと妻も畑づくりに慣れてきてもう少し大きくしたいというのでMさんから礫と黒土をもらって少し拡張した。つくる種類も少しだけ増えて豆、きゅうり、ナスが加わった。といってもそれぞれ一、二株なのでしれている。肥料はもっぱら生ゴミの段ボールコンポストでつくった堆肥と大量の落ち葉の腐葉土なので良い循環になっている。そういえば、町内のゴミステーションに生ゴミが出ているのを見たことがない。そんなもったいないことをするわけがないということか。我が家の段ボールコンポストは都心のマンションにいるときからやっていたのだが、その時は少し気になった匂いもこちらにきて野の匂いに慣れると、とても良い土の香りだったということに気が付いた。

昨年の畑にはかぼちゃも登場したが、それはコンポストに入れたかぼちゃのタネから勝手にでてきたのだという。ご近所からお裾分けいただいた立派なかぼちゃの子供なので成長を期待して見守っていたら、一丁前のかぼちゃが二個実った。コンポストはそんな粋な循環もしてくれる。



コンポストから実ったカボチャ

そんな妻の畑の成長を見ていると、わたしの畑も欲しくなってきた。何かを育てるのは楽しそうに見えるものだ。しかし、またMさんに暗渠排水を頼むのも気が引けたし、わたしのわがままをそう大げさにする必要もないと思った。なんせ飽きっぽい性格なので耕作放棄地ができてしまうことになりかねない。そこでいろいろ調べているとレイズドベットという方法があることがわかった。これはイギリスのガーデニングで、庭の片隅に家庭菜園をつくるのに適した方法だという。紹介されるのはたいがい木の板で枠をくつってそこに土を入れ野菜を高植えするというものだ。これなら水はけの悪い土地でも作れるのではないかと思った。ただ、ガーデニングというにはワイルドな原野なので、材料もそこにあるもので作れないか試行錯誤をしてみた。

とにかくうちには折れてしまった枝がたくさん出る。そのうち比較的真っ直ぐで適度な太さのあるものを選んで、鉈で先を鉛筆を削るように尖らせて杭をつくる。最初は一本削るのに結構時間がかかったし腕も痛くなったが、そのうち慣れてくるとどんどんできるようになってきた。その杭を湿地に打ち込み植える桝の形をつくっていく。そのあと、しなやかに曲がる柳の小枝を杭に編み込んでいく。五十㎝くらいの高さまで小枝を編みながら積み上げれば桝の完成だ。これだと、もし畑がうまくいかなくても材料を土に還すことができる。あとは礫と黒土と落ち葉でつくった腐葉土と酸性をやわらげるために石灰をまぜ入れてレイズドベットの畑の完成だ。ワイルドな原野にも馴染むのも良い。

レイズドベットに実ったトマト

材料は敷地で手に入るもので

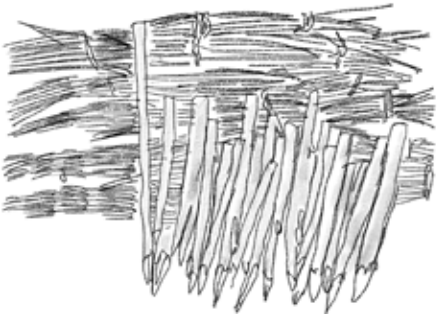
レイズドベットをつくってみる

調子にのって二つもつくってしまったが、はて、何を植えるか。

できるならタネから育てたいところだが、なにせ小学校の夏休みの成長日記以来のことだから、無理はしないで近郊の農家さんの元気な苗に頼ることにした。手に入れたのはパセリ、イタリアンパセリ、セロリ、パクチー、アーティチョーク、オレンジバーム、バジル、セージだったかな。それにミニトマト。あと、彩りにナスタチウムとマリーゴールドも加えた。彩りといってもナスタチウムはわさびのような味がして食べられるし、マリーゴールドはトマトなどと相性が良く病気や虫から守ってくれるようだ。

中央にミニトマトを植えるとして支柱をつくらなければならないが、レイズドベットをつくるときに使った柳の枝を使ってみた。円錐形に仕立ててみたが自然の材料なのであまり違和感なく風景に馴染んでくれた。そればかりかしばらく経つと支柱から葉っぱが出てきて生きた木でできた支柱になった。トマトもこの支柱が気に入ったのか、マリーゴールドに助けられたのか、ぐんぐん育って実をたくさんつけてくれた。

毎朝、天気が良くても悪くてもレイズドベットの畑を見回り、ちょうど食べ頃のを収穫して、朝ごはんに添えるのが日課になってしまった。それでもピークになんると二人では食べきれない。やはり、身の回りの自然や人々がもたらしてくれる恵みきちんといただき、そのうえに日々の彩りをそえる作物をいただく。それがわたしたちの地給自足のスタイルとしておこう。



外にかまどをつくる

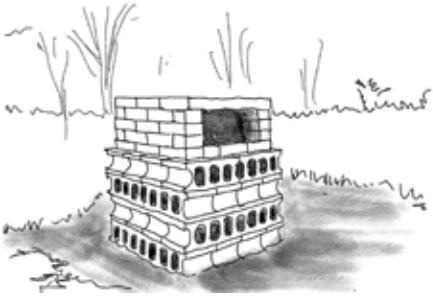
こういうところに暮らすと、どうしても屋外で何かしてみたくなる。ここらのホームセンターも販売戦略としてそこは織り込み済みで、屋外テラスの組み立てキットとかガーデンパラソルと椅子・テーブルのセットだとか、春になると並べはじめる。その手のものを買い始めるとこの原野ではかえってチープな感じになってしまうので手を出さないことに決めた。そうはいっても来るか来ないかは別としてお客様をお迎えするのに外テーブルはぐらいは欲しいので自分でつくってみることにした。長尺の板を並べて、馬と呼ばれる大工作業用の台の足に乗せるだけの簡単なものだ。それに、家を建てる時に切った白樺を切ってスツールにする。やや不安定なのといつの間にかキノコが生えてくるのが難点だが、それも味のうちということで。

それでホームセンターの販売戦略から逃れたと思ったが、そうはいかなかった。それがピザ窯だった。コンクリートブロックと耐火煉瓦を積んでつくれる簡単なもので、これだったら私でもすぐにできそうだった。そもそも竹山での生活にピザ窯が本当に必要かというとそうではない。ピザなんて年に何回食べるものか。それも自分で焼いて。それはわかっているのだが、なぜか気が引かれてしまう。本屋でアウトドアのコーナーを見ると必ず「ピザ窯をつくってみよう」という類の本がある。それも、アウトドアの腕自慢たちがそれぞれに工夫したつくり方を披露してくれ、しばし見入ってしまう。古来、男はかまどをつくることを本能的に欲するのだと勝手に納得して買ってしまった。それが、

長い長い試行錯誤の始まりだった。

ホームセンターで手に入れたピザ窯セットは、コンクリートブロックを四段積んでその上に耐火レンガを敷き詰めてベースをつくり、その上に耐火レンガをコの字に三段積んで、一番上は長モノの耐火レンガを乗せて天井をつくるといういたってシンプルなものだ。一応、水準器も買ってコンクリートブロックの下を砂で水平にすることだけは気をつけたがあとはひたすら積むだけの作業でできてしまう。さっそく窯開きということで窯の中に薪を積んで火をつけてみた。薪が良い感じに熾火になったところで、自家製生地のピザを焼いてみた。春先のまだ寒い時期だったせいもあるが、生地が焼けてくる前に熾火がみるみる弱くなって、なかなか焼き上がらない。一枚目はなんとか焼けたけれど、二枚目が悲惨な生焼け状態に。泣く泣く家のキッチンでフライパンを使って焼くことになった。まあ、それなりに美味しかったが生地の生焼け感がどうもいただけない。

とりあえずできる工夫として、熾火の熱がすぐ逃げていかないようにたき口を一段低くし奥を一段高くしてみたが結果は少しましになった程度ではかばかしくない。やはり中をドーム型にして輻射熱を中央に集めるようにしないといけないのか。そうなるとドームの型枠をつくって耐火レンガを耐火モルタルで積んでいかなくてはならない。妻は将来も使い続けるはずがないと見抜き、せっかく野趣のある庭にピザ窯の廃墟を見たくないと主張する。さあ、どうする。



最初のピザ釜

この野趣に富んだ庭をどのようにしていくかは、当初まったくイメージがわかなかったので、妻の言う通りしっかりとした構造物をつくってしまうとあとでやり変えるのに苦労することになる。ここは素直に積むだけの窯でどこまでできるかをチャレンジすることにした。

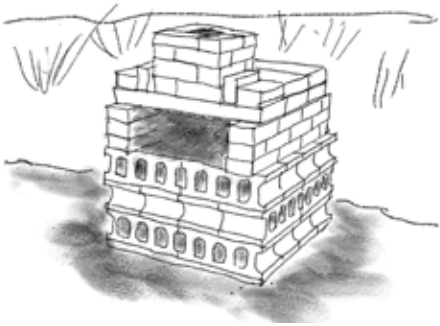
ものの本によるとピザ窯は四百度くらい高温にする必要があるようだ。オーブン用の温度計で測定すると薪が燃えているうちでも二、三百度程度にしかなっていなかった。まずは火力を上げるようにしなければならない。そのためには大量の酸素が必要になる。洞窟のような構造の窯では吸気と排気が同じ一つの口になってしまって、どんどん酸素を送り込めない。そこで煙突をつけられるように耐火レンガの長尺板に穴をあけることにした。特殊なノコの歯とタガネで穴をあけようとしてみたが、これはこれでなかなか手強く、最後に思い切りタガネを打ち込んだら一部割れてしまった。それでもなんとか穴らしきものができたので煙突をつけてさっそく火を炊いてみた。これは思った通り勢いよく炎が上がるようになって一歩前進することができた。ただ、これでも薪が燃えているうちは良いのだが、熾火になってからは相変わらず温度が長時間維持できない。

煉瓦を積むだけでドーム状の形をつくることができれば窯の内部に熱を貯めて輻射熱も期待できるのだが、煉瓦を台形にハツって型枠に沿って積み上げるのは、穴一つ開けるのに苦労したことで腰が引けた。煉瓦を少しずつずらし

石棺のようになった混迷釜

て積むことでドームとまではいかないものの少しふくらみのある内部ができないかとやってみた。そうするとあちこちに隙間ができて、そこから熱が逃げそうな気がしてきた。そこで耐火モルタルで隙間を塞ぐことにしたのだが、それが見るからにブサイクな外観になってしまった。あまり良い例えではないがチェルノブイリの石棺というのがぴったりという感じだ。それでも高温が維持できればよかったのだが、そうでもない。以前のような生焼け状態にはならないけれど、二、三分でパリッと焼ける感じにはならない。

一冬たってもやはりチェルノブイリの石棺はまわりに馴染まないことは明らかだったので、一旦解体することにした。ドーム状の形をつくることはあきらめて奥が階段状に数段高くなる程度に納め、煙突部分を煉瓦を高く積むことにしてみた。煙突部分を煉瓦で積むことにしたのは、煙突部分も高温の保つことによって薪の燃焼ガスがそこで二次燃焼することを期待したからである。そうすることで熱効率も高くなるし、煙の発生を最小限に抑えることができる。結果はとても良好で、今までにない火力になり、煙突から煙ではなくロケットのような炎が立ち昇るようになった。窯のなかの温度もどんどんあがり目標の四百度に達した。そうしてしばらく炊き続けると窯の内側の煤けた煉瓦が高温になって白く変わってきた。こうなればしめたものである。さっそくピザ生地をこねて焼いてみた。本当に二、三分でパリッと焼けたのには嬉しくなった。もちろん味は Buono!。



ようやく納得のいくピザ釜に

一応、目指すピザが焼けるようになったのは良いのだが、案の定、そんなに出番があるわけではない。そこで、オーブンがわりに使ってみることにした。冬場は土間の薪ストーブのオーブンでパンを焼いたり、ローストビーフや焼き魚、さらにはおやつのケーキやクッキーも焼けて楽しいのだが、さすがに初夏になってからも土間とはいえ家の中のストーブに火をつける気にはならない。そこでピザ窯をオーブンとして使おうというわけだ。煉瓦を積んだだけの窯なので温度管理は運任せのところはあるが、十分使えることがわかった。温度も四百度などと頑張らなくても良いので炊き上げる時間も短くて済むのも嬉しい。木々のみどりが風の流れに揺れるのを見ながら、パンの焼ける匂いが漂ってくるのを待つ時間は、贅沢この上ないと心から思う。

もうひとつ冬の土間の薪ストーブの楽しみは、明け方のひんやりとした寒さに布団を出たくない気持ちを振り切って土間に向かい、薪ストーブに火をつけ、そのパチパチという明るい音を聴きながらお湯を沸かして入れるコーヒーのひと時である。気分の問題だとは思うが薪ストーブで沸かしたお湯で入れるコーヒーは一段と美味しい気がする。それを初夏になってもできるとなると、そのまま外のテーブルでコーヒーを飲みながら、明るい声で鳴き交わす様々な鳥の声に耳を傾ける時間を持つことができる。

そこで、ピザ窯の隣に煮炊きのできる薪かまどをつくることにした。これもピザ窯と同じように、煙突部分で薪の燃焼ガスを二次燃焼させる構造にした。

ピザ釜でくるみのケーキを焼く

そうすることによって、焚き口のところで煮炊きできるのと同時に、煙突の先から出る炎でも煮炊きができるのだ。この二口かまども現在の形になるまで何度もやり直して、効率的な空気の取り入れ口の工夫や、煮炊きに適した煙突の高さの調整などをした。そういう試行錯誤ができるのは、単にコンクリートブロックと耐火レンガを積んだだけのものでつくるということにこだわった結果だ。折に触れダメ出し指摘をする妻のひとことに感謝しなければならない。くやしいけれど。

これらのピザ窯と薪かまどは、正直、そう沢山の出番があるわけではないが、心からあって良かったと思ったのは、二〇一八年九月六日の胆振東部地震の時だった。地震直後から発生したブラックアウトは翌日も続いたのだが、煮炊きには不自由することがなく済んだ。薪さえあれば、暖も取れるし、灯にもなる。そして煮炊きにも不自由しない。趣味のような薪ストーブやピザ窯であるが、それがいざという時の支えになるのは嬉しい。災害への備えといっても多くは喉元過ぎれば暑さを忘れるように、持続的に意識し続けるのはなかなか難しいが、日頃の楽しみがいざという時の備えになるように考えると意外とできてしまう。

ピザ窯の出番はそれだけでなかった。これだけ粘土質の土だらけなら陶器はできないかと思って、煙突の位置を後ろにもってきて陶芸窯に変えて見たら、千度は無理だったけど、八百度まで上げることができたのはびっくりした。

ピザ釜の横にかまど

薪をつくる

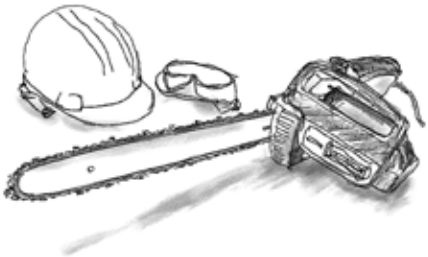
薪ストーブはあくまで補助暖房で時々調理に使う程度のものであるが、何度も繰り返しになるが、それでもつくづくあって良かったと思う。ただ補助暖房といっても一冬で使う薪の量はおおよそ三、四㎥が必要で、ちょうど家の長い軒下に収まるくらいの分量になってしまう。最初の年は家を建てる時にやむなく切った木が使えると思っていたのだが、そう甘くはなかった。薪ストーブを買った店に言わせると、薪は乾燥させなければタールが出てストーブを痛めるとのこと。それも木の芯まで乾燥させるには割った状態で乾燥させなければならないようだ。薪を買わせる口実かと勘ぐったりしたがせっかくのストーブを痛めてしまっては元も子もないので断念することにした。そのかわりその店から薪を買ったら三㎥で七万円くらいになった。薪も結構な値段がするのだ。

そうとわかれば、翌年は自分で薪をつくるしかなかろうと思って頼みの町内のMさんに相談してみた。まずはチェーンソーでストーブに入れられる長さに丸太を切って、それから斧で割り、半年から一年乾燥させてようやく燃やせる薪になるとのこと。ただし、乾燥させすぎると木の油も飛んでしまって火持ちが悪くなるようだ。木の種類によって燃え方も違うらしく、薪にしようとした白樺は、火付は良いが火持ちがしないと言われてしまった。ナラの木は良いようだが、シイタケのホダ木に適しているので燃やしてしまうのはもったいないとも言われた。木を薪にするといっても奥が深い。

さて、薪にするためにはまずチェーンソーが必要ということだが、やたら

ハードルが高くなってしまった。確かに家を建てる際に切った木の太さからするとノコギリでは日が暮れるか、腕が疲れて使い物にならなくなるのは目に見えていた。さてどうしたものか。Mさんのアドバイスは的確で「石塚さんはチェンソーを使うのは初めてだと思うので、エンジン式じゃなく電動式にした方がいいね。替え刃もついて手頃な値段のものがあるので、それにしたら。」とのこと。さっそく勧められたものを探しにホームセンターに行ったら、いろいろな種類のチェーンソーがずらっと並んでいて、さすがここらのホームセンターは違うと感じ入ってしまった。お目当のものもあって、ヘルメットとゴーグルと一緒に買ってきた。戻ってさっそく開封すると、素人にはちょっと尻込みするような立派に凄みのあるチェーンソーだった。

付属のマニュアルを見ると、ほとんどが注意事項で特にチェーンソーが木に跳ね返されるキックバックというのが怖かった。これまでも仕事で行った先で、チェーンソーで大怪我をしたとか、死んだ人がいるという話を一度ならず聞いていたのでなおさらだ。恐る恐るスイッチを入れて見るとエンジン式のチェーンソーのような爆音はしなかったが、それでも刃の並んだチェーンが高速で回るのを見ると、本当に自分が使えるのか正直腰が引けた。でも、そう言ってもしょうがないので試しに切って見ることにしたが、血しぶきのように木の切り屑が飛び散るのでアドレナリンがドバッと出た。その勢いで次を、そして次をと切り進むととちょっとした快感に変わってきた。



人生初のチェーンソー

当時チェーンソーで切っていた丸太の太さは大きいもので直径二十五㎝ほどで、今から振り返ると大げさな気がするが、切るのにかなり神経を使い疲れ果てた記憶がある。我が家の薪ストーブは少し小ぶりなので丸太は三十㎝に切り揃えるのだが、それを玉切りと言うそうだ。少ないとはいえ一年分の薪をつくるのだから玉切りの数も相当になる。それに、最初の頃は丸太を玉切り用の台に乗せて切るようにしていたので、太い木は重くて台の上に持ち上げられなくて切るのを断念したこともあった。

なんとかチェーンソーで怪我をすることなく玉切りが終わったら、今度はそれを薪のサイズに割らなければならない。薪を割るといったら斧を振り下ろすイメージがあるので、早い段階でホームセンターの斧コーナーに行って目星をつけていた。大草原の小さな家で父親が振るういかにも斧というものが並んでいた。太い柄がわずかな曲線を描いていて見るからに美しい。さっそくそのひとつを持ってみたらズシリと重い。とてもこんなものを振りかざして打ちおろすなんてことはできそうもなかった。その脇に、グラスファイバー製の柄のものがあり、そちらは軽くて扱いやすそうだった。柄が真っ直ぐで鮮やかな黄色というのが残念だが扱えなければ始まらない。そこで買っておけば良いものを玉切りが終わってからじっくり選ぼうと先送りにしたのが間違いだった。いよいよ薪割りだとワクワクした気分で売り場に行ったら、目をつけていた斧は売れてしまって無かった。残っているのは、「どうだい、あんたに使えるかね。」

玉切りした丸太の山

と言いたげな重い斧ばかり。呆然と売り場に立ってばかりいても薪はできない。とにかく買うしかない。それでも、レジから駐車場の車まで買った斧を持って運ぶ間に何度、本当に使えるかと思ったことか。

結果的にはそれが正解だったとあとになってわかった。

最初はまったくダメだった。何がダメと言って斧が木にまともに当たらないのだ。重い斧を振り上げて力一杯叩きつけると思ったところに当たらない。下手に空振りすると自分の足に当たってしまうので、屁っ放り腰で斧を振るうのもいけないのだが、とにかく木の芯に当たらない。それも刃が斜めに当たったりするので、その都度、手に痺れが走る。木にうまく当たると衝撃が少ないのだが、あたり損なうと痛い目にあう。

それでも、せっかく買った斧を捨てて高い薪を買うのは意地でもいやだったので我慢して続けていると、そのうち偶然芯に当たることがある。その時、パンと割れるとまんざらでもない気分になる。まあ、二度偶然は続かないのだが。やっかいなのは芯に当たってもパンと割れずに、刃が木に刺さり込んでしまうことがある。刃を抜こうと思ってもなかなか抜けない。思わず木ごと振り上げて叩きつけようかとも思うが、体力に自信がないので斧をなんとか抜こうとするのだがなかなか抜けない。なまじ体力があって木ごと振りかざしていたらもっとひどいことになっていたかもしれないと後から思うが、刃が食い込んで抜けなくなった斧も惨めだ。

斧で丸太を割る

そうこうしているうちに、少しは薪らしきものができてきた。やっているうちに木によっては割りやすい方向と割りにくい方向があるのがわかってきた。いわゆる節というものだ。木の幹から枝が出た部分は年輪が幹と枝でそれぞれに作られるのでそれらが重なってとても硬くなるのだ。そこに当たると斧が跳ね返されるほど強くて割れない。節は枝として育って見た目でわかるものもあれば、枝になりきらずに幹に埋もれた隠れ節もあるので厄介だ。最初は、見た目でわかる節は、それを外して斧を当てれば良いと思っていたのだが、幹の芯の方から枝はできてくるので、そううまく外して当てることはできないのだ。外仕事の達人のMさんのアドバイスだと幹の芯と枝の芯がとおったところをねらうのが良いという。そんなことしたら、かえって割れないのではと思ったが、実際にやってみると意外とパンと割れることがわかった。割れた断面を見ると幹と枝の年輪が一体化した造形に、生命の力を感じてグッとくる。

だんだん薪割りに慣れてくるともっと太い木を割ってみたくなる。さすがに太い木は一発でパンと割れることはめったにない。同じところに何度も斧を当てて割るという方法もあるとは思うのだが、あいかわらず思ったところに当てられないので諦めた。いろいろ試行錯誤してみた結果、ケーキカット方式が私にはあっているようだった。ホールケーキを切り分けるように芯から放射状に斧を打ち込むのだ。最初は何の手応えもなく跳ね返されるのだが、二度三度ずらして打っているうちに、打ち込んだ力がすっと木に受け入れられる時がく

幹と枝が一体化した木の断面

る。おそらく少しずつ木の年輪の繊維が断ち切られ、ある時弱い方向に深く亀裂が入るようになるのではないか。そうなると太い木も部分的に割れて、あとはどんどん楽に割れるようになる。そこまでできるようになるとまんざらでもない気分になる。

Mさんによると、太い木は芯に当てるのではなく、端から削ぎ落としていく方法もあるという。確かにそうすると年輪の抵抗は少なくなる。徐々に端から削ぎ落としていくと太い木の径も細くなってくる。そうなれば普通通り芯に当てて割ることもできるようになる。

そうこうして薪割り三年目になったら斧の柄が折れた。相変わらず思ったところにうち下ろせずに刃の付け根の部分の柄を木に当てているうちに柄が劣化してついに折れてしまったのだ。まあ、それだけ一生懸命薪割りをした結果だと思うことにして斧を新調した。ちょっと季節が悪くて店頭の斧の品数も少なく、前より重い斧しか残っていなかった。まあ仕方がない。

新しい重い斧を振る方法を少し変えてみた。それまでは斧を振り上げて振り下ろす方法だったが、今度は後ろに大きく振って円運動のように振りかぶるようにした。振り下ろす時に力を入れるのではなく、振り下ろす時に腰を沈めて重い刃が落ちる速度を加速させるのだ。そうすることで木に当たるときに余計な力が入らないので正確に芯に当たるようにもなった。薪は力で割るのではなく斧の重さで割るということのようだ。

こんな太い丸太も割れるように

木熊をつむ

薪ができたら今度はそれをストックしておかなければならない。田舎暮らしの家の軒下に薪を積んであるあれだ。両端に積む薪の高さにあった支柱を立てそれを支えに薪が崩れないように積むようだ。ところが、最初の年に買った薪を運んできた人たちは、そんな準備をしていない我が家の軒下にいとも簡単にヒョイヒョイと積んでいく。それでは崩れてしまうだろうと思ったが、そこは積み方にちょっとした工夫があった。両端の薪を積む時にところどころ横向きに薪を積みそれをちょっと内側に傾いたようにセットするのだ。そうすることによって、両端の薪は内側に転がる力が働いて互いに突っ張り合い崩れることが無いのだ。

翌年、試しに同じ方法で積んでみたが意外と難しい。どうしても両端が積むうちにだんたん内側に傾いてきて美しくない。支柱が無いのに両端がまっすぐ積み上がっているのが美しいので、そうでなければ単に積んだだけに見える。まあ、人に見せるものではないのだが自分的に納得がいかない。横向きに積む薪を少し外側にせり出させるとなんとかそれらしくなってきた。

次の問題は、どこに積むかだ。冬の便りが届く頃には、薪ストーブの置いてある土間から軒下伝いに行き来できる縁側に積むと便利で、一応、一冬で焚く薪の量を積むことができる。ただ、夏の間とか季節の良い時に縁側が薪に占領されているのはいただけない。幸い、敷地は広いので積むところはどこにでもある。ちょうど食卓の窓から見える木々の一角に積んでみることにした。

都心のマンションのベランダで使っていたすのこ板を下に引いて地面からの湿気が薪を腐らせないように自分なりに考えてみた。そこは野ざらしになるので積んだ薪の上にポリカーボネートの波板を乗せ雨も防ぐことにした。その屋根を固定するのに木の枝を乗せ、縄で下のすのこ板に結びつけた。我ながら立派なものができたと自画自賛。食卓の窓から遠くにオブジェのように見えるのも悪く無い。

妻が「それを木熊（きぐま）と呼ぶことがある。」と教えてくれた。木々に囲まれて立つ姿は、熊と言われればそう見えなくもない。それに「薪を積んだ」というよりも「木熊をつんだ」という方がなんとなく様になる。すっかりこの木熊という言い方が気にいって、まわりの人に言いふらしていた。

そのように調子に乗っていると足を掬われるのが常である。

一年、風雨と雪に晒された木熊は、縄が切れ屋根は飛ばされ、すのこ板の効果などどこえやらという感じで下の薪が腐りかけ、凸凹した地面のままに積んでいたのであちこち崩れてしまった。厳しい自然に耐えた老熊の威厳は、少しも感じられず、単に素人の薪積みの悲しい末路を晒すことになった。

すっかり野のなかでの薪積みに自信を無くし、大人しく縁側とは反対の屋根の下に支柱付きの薪積み台をつくってそちらに積むことにした。そんな時に、町内のKさんから「どこかで円形に薪を積んでいるのを見たよ。ああいう積み方もあるんだね。」と言われた。

木熊１号

薪を円形に積むというのはどういうことか、さっそく調べてみた。シベリアで見たとか、スイスで見たとかいろいろある。「スイス積み」という名前もよく出てくるのだが、あちらでは「holz hausen= 木の家」と言うらしい。積み方を教えてくれるテキストや動画もいろいろあるが、それらによると薪を円形に並べて積んでいき、円の内側の空洞にも薪とか枝とかを詰めていくというシンプルなものだ。これならできそうだし、形も悪く無い。基本は円筒形なのだが、ものによっては上にいくほどゆるやかに広がっているものや逆に狭まっているのとか形は微妙に個性がある。また、薪のいろいろな形の断面が円のカーブに沿って表情をつくっているのも良い。なかには枝だけで積んでいるのもあって大小の丸で壁ができているのはちょっとしたアートだ。

さて、どこに積むか。こんな形なら草や木々に囲まれたところにこそ似合う。昨年の反省も造形美への憧れの方が優ってしまうのは困ったものだ。場所を決めたら円形に草を刈りさっそく積み始める。昨年の経験のあるし、少しぐらい凸凹があった方が味が出るような気がして、直線上に積み上げるより精度が要求されない分、楽だと思った。ところが思わぬ落とし穴があった。やはりね。

円筒形に積むということは、筒の内側の円と外側の円では長さが違わなくてはいけない。ほぼ同じ幅の薪を積んでいくとなると、どうしても扇状に外側が開いてしまう。その外側の隙間を埋めるように次の薪を積んでいくと徐々に外側に傾いた状態になってしまうのだ。そのまま積み続けるとどんどん傾斜は

木熊２号

急になり積んだ薪が滑り落ちてしまう。積む薪の傾きの調整は、昨年の木熊積みでやった方法を応用し、ところどころ外側の円に沿って横向きに薪を置き、それを枕にして次の薪を積むことにした。そうすると外側への傾斜は修正され地面と平行に戻るのだ。そうやってどんどん積んでいったら、中の隙間に薪や枝を入れて崩れにくくしなくてもいけそうだった。

出来上がった円形の木熊はなかなかの造形で、環境アートのようだった。若い頃に好きだったニルス・ウドとかアンディー・ゴールズワージーといったアーティストの名前が思い出されて、一人世界に浸ってしまった。夕暮れになったらランタンを持ち出して円筒形の筒の中に置いて、木熊にできたたくさんの薪の隙間から漏れる光を楽しんだりもした。そんな木熊も冬はすっかり雪に埋もれて雪の小山になってしまったが、それも季節の風景のひとつとなっているので良しとしていた。

そんな思いは、春の雪解けとともに消えて後悔だけが残った。雪の小山から出てきた木熊はデジャブのように昨春の無残な姿に似てあちこちの薪が崩れてしまっていた。さらに設置した場所が最悪で、春の雪解け水にすっかり浸ってしまい地面に近い方の薪は見るからにそう遠くない先に土に還らんとしていた。草や木々に囲まれた場所に木熊が凛と立つ姿は風景としては心を打つものがあるが、良い薪をつくるという視点からは最悪だと二度目にしてようやく納得することになった。

雪の下から崩れた薪の無残な姿が

同じ過ちを繰り返さないように木熊は絵になるかどうかより水はけの良いできるだけ平らな場所を選ぶことにした。そうなると適地は限られる。家を建てるための重機を入れられるようにつくった駐車場は厚く砕石を敷き詰めているので水はけもよく条件は満たしているのだが、なんせ殺風景この上ない場所なのだ。植物を植えようにも砕石を掘り返して土を入れなければならないので手が出せないままでいる。そんなところに木熊を積んでもなあという気持ちは捨てて実を取らなければ冬場の良い薪が手に入らず薪を買い続けなければならないことになる。

それに、この頃になると町内のMさんが、「石塚さん、薪にする木はいらないかい。」としきりに声をかけてくれるようになってきた。あちこちから「冬になる前に、この木を切っておいて欲しい。」という依頼があって、切った木の始末に困っていたこともあるのだろうけれど、ありがたい話で断る理由がなかった。そうこうしているうちに秋も深まるころには、大小の丸太や枝が敷地に山積みになってしまい、それをなんとかしなければ冬の除雪に支障が出る状態になったという事情も後押しした。

積む場所を決めるのも周りの風景など手がかりがないので、とりあえず車の出入りの邪魔にならないところにした。場所が決まればこれまでの試行錯誤の積み重ねがあるので手早く積むことができた。いただいた丸太などで薪はたくさん出来たので、結局、三基つくることになった。それに、作り方の情報に

ならって木熊の中の空洞は細い枝をぎっしり詰めて崩れにくくしてみた。

出来て見ると、これまで見て見ぬ振りをしていた殺風景な駐車場に何かしら表情が生まれてきた。特に、そのうちの一つを枝を主に積んだ木熊にしてみたのだが、これが柔らかな曲面をつくってなかなか良いのだ。木熊の姿が映えない場所だと思っていたが、逆に木熊が風景をつくる力があったということだ。

よくデザインされたランドスケープというのはいろいろある。特に田舎暮らしとガーデニングは対のような関係に捉えられる。しかし、この湿地同然であった敷地で絵に描いたようなガーデニングは無理だし、そもそもあまりする気もなかった。一方で、日々の生活の中で必要とされるものが巧まずに優れた風景をつくるということがある。小さな農村や漁村には、そのような風景をまだ見ることができるが、ここ竹山でのランドスケープデザインのひとつの方向性が見えてきたような気がした。

一冬越して、春先になっても水に浸ることもなかったし、崩れてもいなかった。少し気温も高くなり始めた頃、枝を積んだ木熊の足元から小さな動物が顔を出しているのを見つけた。野ネズミだ。ネズミといっても大型の灰色のネズミではなく、小型で茶色の愛らしい表情のネズミである。そのネズミは木熊の中から周りを伺うとちょこちょこと足早に外に出てきた。と、続いてその後を追うようにもう一匹。さらにもう一匹。この木熊は冬場暖かく安全に暮らせるネズミ一家の住処になっていたのだ。これはまずい。

木熊も風景の一部に

撹乱

竹山に家を建てた翌年、小さな畑作りを手伝ってくれた町内のMさんから「石塚さんのところで木は植えないのかい、マルメロなんか香りが良くていいよ。」とすすめられた。Mさんからの提案は疎かにできないので畑の近くに少し大きめの穴を掘ってMさんからもらった土を入れて植えることにした。木の苗を扱っているところを数件見て歩くうちに、食べられる実のなる木も植えたくなった。その時植えたのはマルメロの他、梅とブルーベリーとカシスだった。その後、梅とマルメロは実ができるまでには時間がかかるが毎春、香りの良い花を咲かせて家の周りに彩りを添えてくれた。ブルーベリーとカシスはすぐに実ができ年々収穫も多くなってきた。

さらに欲を出してプルーンの苗を二株植えた翌年の春。雪解けとともに姿を現した木々の根元の様子がなにかおかしい。妙に白っぽいのだ。近づいて良く見ると細かに削られた跡がある。それも根元を一周し高さ十㎝くらいがそうなっているではないか。プルーンに至っては五十㎝ほどの苗の全てが削られていた。Mさん曰く「これはネズミにやられたね。」

木の表皮のすぐ下には、葉が光合成でつくった炭水化物などのエネルギー源を根に運ぶ重要な管があるのだが、そこをやられてしまったのだ。土の中の水を葉に運ぶ管はさらに奥にあるので傷つけられていなかった。なので、その年は何も無かったかのように花を咲かせてくれていた。ただ、翌年になると元気がなくなりマルメロは葉を落とすこともなく立ち枯れてしまった。梅は蕾を

皮を食べられて丸裸になったプルーンの苗木

つけてもう一年かなと思ったが、その蕾も硬いままで終わってしまった。

木熊の下からネズミの家族がぞろぞろ出てきたときには、これ以上食べられてしまわないようにすぐに木熊を解体し、芯の小枝を取り除き風通しの良い状態に積み直した。そして冬を前にした雪囲いの際には、木の根元と土の間を覆うように頑丈なシートを被せておいた。ただ、それでも何本かのブルーベリーが犠牲になってしまった。このような食害はネズミだけでなく、ここK市ではエゾシカ、アライグマ、キツネなどによる農業被害は年間延べ五・五haにもなるようだ。

植物にダメージを与えるのは動物だけではない。あれは竹山での最初の夏だっと思うけど、敷地のなかで一、二をあらそう大きな木であるハンノキが夏の盛りなのに葉が茶色になってしまった。良く見ると葉はレース模様のように葉脈を残して向こうが透けて見える状態になっていた。近くには小さな黒い甲虫がウヨウヨうごめいている。調べると文字通りハンノキハムシというものらしい。この虫は大発生することがありほとんどの葉は食べられてしまう。なんせ、葉に産み付けられた卵が孵化して幼虫になると一ヶ月ほどもりもり食べ続け、その後土に潜り蛹になるのだが、二週間ほどで羽化して成虫になり、また、冬が来るまでもりもり食べ続けるのだそうだ。ハンノキが枯れてしまうのではと心配になり駆除を試みるがきりがない。これが二、三年続くとピタリといなくなり、ハンノキもその間、枯れることはないのだそうだ。

ハンノキハムシによってレース状になった葉

敷地の中を歩いていると時々、比較的太い枝が落ちていることがある。風で折れたのかなと思っていたがそうでもなさそうだ。木々を見上げてみると枝の付け根の樹皮がきれいに無くなっているのが目についた。ネズミはあんなに高いところまでわざわざ登っていくとも思えなかったし、プルーンだとかの若木に比べると硬くて不味そうだ。現場を押さえたわけではないが、どうもアカゲラやコゲラなどのいわゆるキツツキか、ゴジュウカラの仕業というかお仕事のような気がする。これはまったくの推測だが、そもそも枝の付け根はその先の枝や葉の重みや風などの力に耐えなければならないので亀裂ができやすい。ほんの小さな亀裂でも、できてしまうとそこは菌類や昆虫の絶好の棲家や栄養になる。鳥は樹皮の下に潜む昆虫を狙って樹皮を剥ぎ取りにかかる。そうすると水分や養分の行き来が妨げられやがて枝は枯れて落ちる。そんなところかもしれない。木も元気な枝や葉に生きる力を集中させたいところだが、自分では剪定ができない。それを菌類や昆虫や鳥が手伝っているのではないか。ここに暮らしてただただ樹木や草の様子を見ていると、そのような意図せぬ繋がりがいろいろなところで感じられる。ただ、ときには荒々しい試練もやってくる。

二〇一八年の九月五日の未明、前日に近畿地方に大きな被害をもたらした台風二十一号が日本海を北上し、ここらでは珍しいゴーッ、ゴーッという唸り声がしばらく続いた。朝になれば雨風も収まっていたが、家から出る道に大きな木が何本も倒れ行き来ができない状態になっていた。敷地のなかも見慣れた

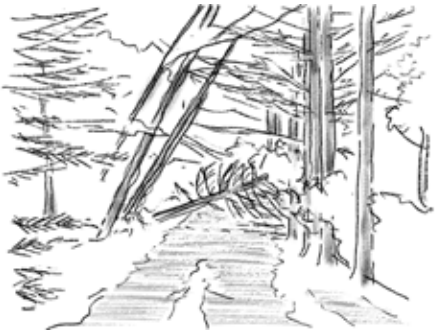
枝の付け根だけが

景色が少しおかしいと感じて見て回ると、あちこちに根ごと土から引き剥がされた木が何本も横たわっていた。あれだけどっしりと立っていた木がいとも簡単に倒されているのを見ると、地球の大気の移動である風だが、その力の凄まじさに怖気付く。

空を見上げると鬱蒼としていた場所が、妙に明るくなっていた。それまで空を覆っていた木々の葉が木ごとなくなってしまったのだから。その後どうなるのか。おそらく倒れた木のうちヤナギなどは生命力が強いので根が少しでも土に残っていれば、すぐにでも新しい芽が出て枝になっていくだろう。日当たりの悪かったところは、春先のまだ木々の葉が茂らない前に目覚めるスミレがほぼ独占していたが、これからは、そうはいかなくなるかもしれない。この時を待っていたヨモギやセイタカアワダチソウが準備を始めているだろう。

このように大風、大雪、洪水、大火事など、それまでの環境を一変させる出来事を「撹乱」というらしい。この撹乱があるおかげで、その環境で優位な種だけが占有を続けるのがリセットされ、生命の更新が促進されたり、種の多様性やが保たれるということか。それにしてもやることが荒っぽい。

台風が通り過ぎた翌六日の未明に、震度五弱の地震に襲われた。胆振東部地震だ。我が家の被害は、棚のガラス器が床に落ち飛び散っただけで済んだが、震度七の激震に襲われたところはいたるところで山体崩壊が発生し、木々だけでなく多くの方の命が失われた。



台風で倒れた木が道を塞ぐ

昨年の春には集中豪雨があり一時間当たりの雨量としては過去最高を記録した。また、冬には二十四時間降雪量として過去最大を記録した。雪はその後も断続的に降り積もり今までにない積雪量になってしまった。これには樹木も悲鳴を上げ、多くの木の枝が折れてしまいヤナギの木などは幹自体が裂けてしまったものもあった。

私たちが竹山に暮らして五年であるが、その間に、大風、地震、豪雨、大雪といった撹乱を体験したことになる。過去もこんなに頻繁に撹乱があったのだろうか。撹乱は再生と多様性を保つための仕組みだとしても、頻度や規模が大きくなると、自然の再生力が追いつかない事態にならないか心配になる。

錯乱といえば、私たちが暮らすこの土地も人の手によって引きおこされた錯乱から始まっている。なだらかの丘陵を掘って埋めて平らな土地をつくるのに災害の威力とまでは言わないけれど、重機の力でさほど時間をかけずに済んでしまう。それも植物が再生するのに重要な表土をほとんど剥ぎ取って形を整えてしまう。幸いにして、ここの開発は規模も小さく、その後に続くことがなかったから、まわりの自然の力をいただいて半世紀かけて再生しつつあるが、もしこれが、規模も大きくたて続けに拡大する開発だったらここもどうなっていたか。人が手に入れた重機という道具は、錯乱と同様の環境変化を頻繁に際限なく引き起こすことができるのだ。そして、その結果は再生と多様性とは異なり、不可逆的にして均質な場所にしてしまう。

雪の重みで裂けてしまったヤナギ

この土地を手に入れたときにいただいたアドバイスに中古のユンボを手に入れるべきというのがあって、妻が苦い顔をしたのを思い出す。この程度の規模の土地であれば、小型のユンボさえあれば掘るのも運ぶのも積み上げるのも燃料さえあればなんでも簡単にできてしまうだろう。そして、やってしまった結果には長い時間付き合わなければならないことになる。人の手が入るということは、大なり小なり撹乱的な行為であるが、その結果については再生と多様性を失うものであってはならない。この竹山で時間を過ごすうちにそういう気持ちになってきた。

人の手が入るといっても手作業であれば自然の再生力の方がはるかに勝る。草を刈ることひとつとっても、鎌で刈る程度であればちょっとぐらい妻が大切にしていた草花を切ってしまっても、いつの間にか知らん顔で戻っていてくれる。さすがに太い丸太の玉切りはチェーンソーがなければ苦しいが、ここでの作業はできる限り手作業にこだわることにした。そうすることが自分自身にも良いことがある。おかげで食事制限などせずに自然にダイエットできるし、年をとっても筋肉を維持できる。S市のまちなかにいたときは近くのホテルのジムに通っていたこともあるが、それに比べてお金もかからないし、筋肉自慢のおじさんたちの圧に耐えることもなくて済む。なにしろ気持ちが良いのだ。清々しい空気をいっぱい吸って、穏やかな風景に囲まれ、汗を流す。こんな贅沢を味合わない手はない。

川と池を掘る

湿地状態だったこの土地も、住み始めて数年経つと水がたまっているところがめっきり見当たらなくなった。歩くとヌプッ、ヌプッとしていたのが、今ではフニュ、フニュという程度になった。当初、こんなところで暮らすと湿気で体を壊すのではないかと真面目に心配していたのが嘘のようだ。それにともなって景色も変ってきた。湿地の象徴のようだったガマの群落がまばらになってきたのだ。そしてその翌年には2カ所に数本が見られる程度になり、その翌年には姿を消したのだ。水環境がちょっと変わるだけで植生はこんなに劇的に変わるのには驚いた。同時にガマの特徴的な穂が見られなくなったことに、ちょっと物足りなさを感じた。わがままな話であるが、ガマが消えただけでなくまだ名前も知らなかった草花も種類が減って、数種類のイネ科の植物と、野菊とセイタカアワダチソウとハンゴンソウがやけに目立つようになってきたのだ。以前、植物の専門の方から湿地は陸地と水辺の両方の性質を持つことから、多様な動植物が見られ生物多様性の観点から重要な環境だと聞いたことがある。ああ、それはこういうことなのだと妙に納得した。

ただ、春先の雪解けの時期になるとそこかしこに水たまりができるのは以前のままだった。それも一ヶ月も経たないうちに消えていくのだが、あるときそれを二階の窓から眺めているとあちこちにある水たまりが連続した点としてひとつの線が見えてきた。造成された土地なので平坦な土地と決め込んで見ていたが、そのなかに水がたまりやすい低いところがあることがわかってきた。

雪解けの水たまりが連なって

そういう目で改めてこの土地を見てみるとかつての丘陵の傾斜に沿ってかすかに北側の隅が高くなっていて、家を建てたあたりが一番低く、また南の隅にかけて高くなっていることがわかってきた。水準器で計測したわけではないが、人の目でもそのような微妙な傾斜はわかるものだ。それに考えてみれば北の隅から東の隅に引かれた側溝に水が流れているのは、そのような傾斜があるからに他ならない。その時に、北の隅から家の周りを経て西の側溝に流れる川をつくることができるのではないかと閃いた。そうすれば水辺の環境ができ以前の植生には戻らないにしても多様性は少し回復し、景色も豊かになるのではないか。そう思ったのだ。さっそく妻に提案してみたら、返事は以外にも「良いね」だった。「川ができれば池もできるかもしれない。」と妄想を広げたのは彼女の方だった。確かにジベルニーのモネの庭とはいかないにしてもスイレンの咲く池ができたらこの土地にも彩が加わる。それにここは粘土質の土地なので川や池の底に人工的なシートを引く必要もない。

問題は、どうやって川を引くかだ。ユンボをつかって掘れば一週間もかからずにできてしまうが、それはしないことに決めたばかりだ。それに、どれくらいの幅と深さの川にすれば水が少ない時期にも川が枯れずにすむか。それには、試行錯誤が必要だと感じた。じゃあどうする。私の手元にあるのは先の尖ったスコップが一丁だけだ。掘る川の長さは少なく見積もっても百二十ｍはある。それをスコップ一丁で掘れるのだろうか。

ここに暮らして思うのだが、どうしたら良いか迷う時は、とにかくやってみることだ。やってみてわかることもあるし、思い通りにならなければやめれば良い。それも人一人の力でできることの良さである。

まずは川のルートを決める必要がある。普通は上流から下流まで水勾配を確かめながらルートを決めるのだが、測量する道具もないし、ホースに水をはって高低差を確かめるのも、この広さではやる気がしない。あれこれ思いながら雪解け水がたまったところを実際に歩いてみることにした。歩きながらきながら水たまりを追ってみると、確かに飛び飛びであるが繋がる線が見える。いや、見えるような気がした。この見えない線に従って歩き続けると起点となる側溝までつながりそうだ。ここまでくれば自分の勘を信じて掘ってみるしかなさそうだ。

最後まで迷ったのは側溝のどこから川を始めるかだ。一番勾配が取れるのは当然、北隅の側溝の起点になる場所だ。ところがそのあたりはかろうじて水芭蕉が残っているところでそこを掘り返すのは気が進まなかった。その水芭蕉の小さな群落を過ぎた側溝の下流に起点を決めた。

掘り始めるのは下流からと決めた。私がまだ小さかった頃、実家のまわりは未舗装で雪解けの時期にはあちこちに水たまりができていた。その水たまりから棒切れで細い溝を刻んで川に見立てて水を流して遊んだのを思い出す。水たまりに向けて下流から溝を掘って水たまりの水が流れたら成功。次の上手の

水たまりに向けて溝を掘って繋げる。そして水が流れたら成功。それを繰り返して上流の起点まで行きつく作戦だ。まあ、原始的試行錯誤法だが、これは経験的にも確実な方法だと思った。

最初の水たまりの水が流れた時には、おそらく私の目は子供の頃の水遊びの時のようにキラキラと輝いていたのではないだろうか。粘土質の土はスコップも入りやすく結構いけるような気がした。ただ、その期待はすぐに壁にぶつかった。木の根っこだ。大きな木のあるところは幹のまわりを大きく迂回するようにルートをとったが、それでも太い根にあたる。その根を切ってしまう勇気はなかったので根の下の土を掻き出して水が流れるようにした。それは結構大変で太い根からは無数の細いヒゲ根が土の中に網の目のようにあって、それを先の尖ったスコップで切りながら掘らなければならないのだ。それでも、次の水たまりまでという小さな目標があるからなんとか挫折せずに次に進むことができた。次に当たったのは石だ。隣人も言っていたがここらの土地からは丸石が沢山でるのだ。かつて、ここは海の下だったことがありそれがつながり川ができた名残だと思う。スコップを突き刺してカツンという感覚が手に伝わったら当たりだ。どんな大きさでどこまで深く埋まっているのか探りながら掘り起こすことになるのだが、中には結構、手こずるものがある。

夢中になって掘っていたら、木々の間から我が家が見える場所まで来た。このペースで行けば一週間かからずに川は掘れるかもしれない。

スコップでひたすら川を掘る

川を掘ると言っているが、幅はせいぜい三十㎝で、深さもスコップひとつが入る程度。それじゃ川というより溝ではないかと言われそうだが、そもそも川の水源が側溝を流れる水なのでしょうがないのだ。町内のMさんからも、「もっと広くしないのかい。」とダメ出しされているが、こればかりはどうしようもない。川幅を広くすればその分水深が浅くなり、夏の水が少ない時に川底が露出してしまう可能性がある。そんな規模だが、私たちにとっては立派な川なのだ。

時々、溝を水たまりまで掘ってもたまった水がうまく流れないことがある。原因は勾配が上流から下流にうまく取れていないからなのだが、どう修正すれば良いか。最初のうちは山勘であちこちスコップでさらってなんとか流れるようにしていたが、そのうち溝を掘る段階で足の裏の感覚で傾斜を把握できるようになってきた。人にはまちなかの生活で使わなくなってしまった感覚がいろいろ眠っているんだと思う。何かに夢中になってそれが蘇るのは気持ちが良い。これも原始的試行錯誤法の良いところか。

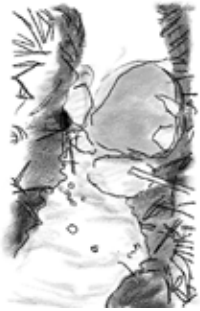
この方法の良いところはいろいろある。そのひとつに川のルートデザインがある。最初から計画的に掘り進めようとすると全長の高低差と比較して程よい高低差の二点を探して、その間を直線的に掘ることになる。そうすれば結果的に最短のコースとなり労力も節約される。ただ、人工的な水路のようなデザインになってしまう。そこに曲線を入れようとするとわざとらしくなる。それ

手前の側溝から掘った川に水を分ける

に対して原始的試行錯誤法は、自然にできたくぼみを読み取りそれを繋いで掘っていくのでその地形に合わせて自然と水が流れたい形になってくる。そもそも自然に川が流れをつくっていくのと原理は似ていて、自然の川は上流から形を決めてくるが、原始的試行錯誤法は下流からつくっていくという違いだ。

家の近くに川を掘る際には、掘った土を家側に堤防がわりに積んでみた。川を掘ったために増水時に家のまわりが水浸しになっては元も子もない。川上に行くにしたがって勾配も急になってきて上流の雰囲気が出て来た。結局、水源の側溝に行き着くまで四日で済んだ。あとは、側溝に堰をつくってコンクリート壁を壊すだけだ。コンクリート壁を壊すのには外かまどを作る時に手に入れていたコンクリート用のノコギリとタガネが役にたった。切れ目を入れたコンクリート壁に最後、金槌を打ち下ろすと側溝から掘った溝に水が流れ始めた。流れ落ちるのと溝の幅に水が広がって行くのを確認しながら、川に沿って下流まで辿っていった。途中勾配がゆるくなるあたりからは流れのスピードはゆるくなったが止まることはなかった。家の前のひらけたあたりを過ぎ、木々の間を縫うように流れ、一番下流の少し太い溝までたどり着き、源流の側溝と反対側の側溝に流れ落ち、川は貫通した。

上流の勾配が比較的急なあたりに、川を掘った時に出て来た石を積んでみたら、そこを水が流れ落ちる時にチョロチョロと明るい音が聞こえるようになった。妻は「せせらぎが聞こえるおうちになったね。」と言って喜んだ。

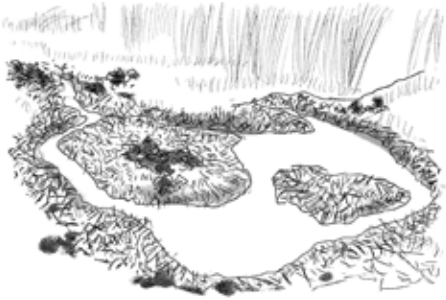


石を積んだところのせせらぎ

次は池だ。これはどうすれば良いか結構悩んだ。一番心配したのは池がボウフラの楽園になってしまわないかということだ。ボウフラ対策にはメダカを飼うと良いと言われるが、適当に掘った池にメダカを放つと動物虐待にならないか。そもそも越冬できるような池にするにはどれだけ深くしなければならないことか。いろいろ考えた末に、流れが常にある池をつくることにした。つまりそこだけ川幅を広く大きく曲がった川にして、その間をつなぐ水路もつくるのだ。そうすれば見かけは楕円形の池に中の島がある形になる。メインの広い川には石で堰をつくり池の水深が川より深くなるようにした。つなぐ方のサブの川にも堰をつくりある高さまで水が溜まったらそちらにも流れるようにした。増水時には調整池の役割も果たすのではないかと。

池のところは川よりも深く掘ることにしたが、そうすると急に石に当たる頻度が増して池のかたちができるまで二日かかってしまった。それでも川との境の土を切り崩すとどんどん水が流れ込み期待通りの池らしい姿になった。水面に目をやると池のように溜まっているけれど、流れがあることが確認できた。

川と池が完成してから数日たったら急に水量が減って来た。川下から川上に点検して歩くと、どうも側溝に設けた堰があまりうまくいっていないようで、多くの水がこれまでどおり側溝の方に流れているようだった。もし、側溝の水が増水した場合にそれが全て川に流れると氾濫して敷地が水浸しになってしまうかもしれないので、堰は側溝と川と両方に水が流れるようにしてあったのだ



川を広げて池をつくる

が、その塩梅が難しい。それでも川が干上がってはもともこもないので板を石で支えただけの堰を粘土も加えて水が漏れにくいようにしてみた。それと、そもそも側溝の水は常に水量が多いわけではなく落ち葉もたまり放題にしておくとチョロチョロとした流れになってしまうのだ。今までは、それでも側溝が落ち葉で完全に埋まってしまわない限り問題はなかったのだが、これからは川のために落ち葉掃除が欠かせなくなってしまった。水を自分たちの役に立てようと身近なところに引き込むとそれだけ丁寧に面倒を見なければならないということか。

そして、心配していた大雨もほどなくやってきた。川は掘った土を盛り上げた堤防のおかげで問題は無かったが、池が溢れてしまい中之島も水没してしまった。とは言ってもまわりに大きな影響を与えるほどではなくかえって植生の変化につながるかもしれないと思うことにした。ただ、水が引くまでの間、池の周りを歩くことができないのが不便だ。これまた家をつくった時の端材を見つくろって木道をつくることにした。木道と言っても板を置くだけなのだが、さすがに土に接する部分を少なくするために角材でかさ上げすることにした。さらにその角材を外かまどの火で焦がして腐りにくくするぐらいのことはしてみた。ついでに中之島に渡る小さな橋もつくってみた。この木道があれば池の周りが少々水没しても様子を見回ることはできるし、水没していないときでもそれなりの景色をつくってくれた。

池には木道も

水辺の世界

池ができれば次は植物か。池に合う植物を探していたら、お隣で増えて持て余しているクレソンを整理するとの情報をもらって、さっそくいただいてきた。急な話だったのでとりあえず、池の端に植え込んでみた。

でもやはり本命はスイレンだろう。さっそく庭木や野草を売っている園芸店に相談にいってみた。店のひとも庭の池はイメージできるが、原野に掘って作った池で育つスイレンとなるとあまり自信がなさそうだったが、少し小型のスイレンのヒツジグサならなんとかなるかもしれないとのことだった。ただ水深は最低でも三十cmはないと冬越できないのではないかと言われた。それも手に入るのは六月末になるという。がっかりした表情を読み取られたのかエンコウソウという黄色の花の咲く水辺を好む植物をおまけにくれた。

さっそくエンコウソウを岸辺に植たが、ヒツジグサを植えるのはそう簡単ではなかった。一旦通水した池を三十cmにヒツジグサを植える深さをプラスしたところまで掘り下げるのは容易ではない。まずは股まである長靴を調達し池に入ってみたが、足を入れて移動するたびに底の土がかき回され水がどんどん濁ってしまう。池の底にスコップを突き立ててもどこがどう掘れているのか確認ができない。それに大きな石に当たることも一度ではない。ここは原始的試行錯誤ではなく、周到に計画して臨むべきだったと反省した。

六月末にようやく色の違う三種のヒツジグサの株を手に入れることができたが、店のひとが言うにはそのまま土に植えても浮力で株が浮いてくるので、

いつの間にかオタマジャクシも

なんとか池に収まってくれた

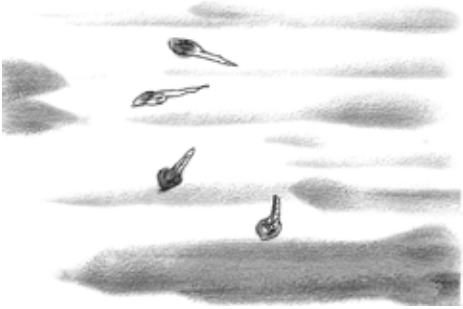
ヒツジグサを池に植えるための仕掛け

石をくくりつけるなど重りが必要だとのこと。これも通水前ならやりようがあったがさてどうするか。結局、ハンギングバスケットの網にシュロを敷き、そこに苗と土を入れ、最後に上に重しの石を乗せてバスケットごと沈めることにした。バスケットをつるすチェーンを持ち上げながら静かに目的とする場所に沈めると、これが意外とうまくいってなんとか池におさまってくれた。

川と池を掘った頃は一面茶色のモノトーンの世界だったが、五月になると水辺も淡い明るい緑色に変わってきた。そして六月に入ると早々にクレソンの白い花が咲き始めた。それを追うように六月の半ばにはおまけにもらったエンコウソウが黄色の花を咲かせた。こちらの春ははじめはあまり彩がないなかで、白い花と黄色い花が点々と咲く姿は心を和ませた。七月に入ると六月の末に植えたばかりのヒツジグサも負けじと花を咲かせた。

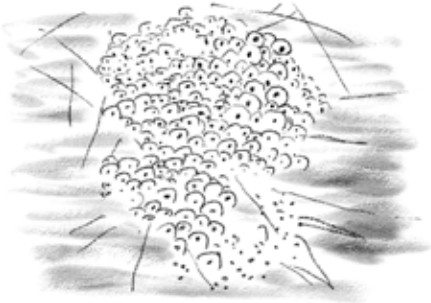
池の水も暖かくなってきて、アメンボウやミズスマシ、そして長いオールで背泳ぎをするマツモムシなど、水中昆虫の種類と数が一気に増えてきた。それにトンボも灰色のシオカラトンボや細身で鮮やかの青のイトトンボ、時には大型のオニヤンマまで池の水に惹きつけられてきた。

いち早く「石塚さんのいえに池ができたよ。」と生き物通信にのったのだろうか。八月に入るとオタマジャクシがいっぱいいるのに気が付いた。卵を見た記憶がないのだが、そもそも池をつくって数ヶ月でカエルが卵を産むなんて想像もしていなかったので見落としたのかもしれない。



オタマジャクシの姿を見たその日から、オタマジャクシの成長を見るのが日課になった。まるで小学生の夏休みの成長観察みたいだが、それを自然の状態で観察できるのは嬉しかった。最初に見てから十日もたったころオタマジャクシに足がでてきた。さらに十日後にはすっかりカエルらしい姿になってきた。そのころになると立派なカエルが姿を現すようになった。親ガエルが子どもの成長を見届けに来たのかなとも思ったが、大型と中型のカエルの二種いるのが気になった。

と、数日経つとあれだけいたオタマジャクシの姿がよくよく探さなければ見当たらなくなってしまった。急にカエルとして自立したとは思えない。あまり想像したくないが子どもの成長を見届けに来た親ガエルと思ったのは、単に腹を空かせたカエルだったのではないだろうか。ずっと成長観察を続けて来ただけになんともいえないエンディングだ。今になって振り返ると、オタマジャクシはこの小さな池でも常に過酷な生存競争に晒されていることがわかる。翌年の四月の初めに今度は立派なカエルの卵を見つけた。四月の半ばをすぎると卵の中心の黒い勾玉状のものがモゾモゾ動き始め、その数日後にはオタマジャクシとなり泳ぎ始めた。昨年のオタマジャクシより小さく別の種類のカエルなのかもしれない。今度は成長を見届けようと思ったが、それから数日したら姿が見えなくなってしまった。さらに次の年は、同じく四月の中旬に卵を見つけたが、それはオタマジャクシになったのを見ることなくいつの間にか消えてし



カエルの卵がいっぱい池に

まった。この三年間で一匹でも生き延びてカエルになり卵を産みにこの池に戻ってくることができていればと思ってしまう。

さて、話を川と池が完成した年に戻そう。夏の暑さがようやく収まって来た頃、池のまわりは草ぼうぼうの状態で何がはえているのかわからなくなっていた。そんなとき、池の水の中から細い葉をもたげているのが目に止まった。他とは違って少し肉厚の細い葉はガマのそれと思われた。もし、そうだとするとこの敷地から姿を消したのが、私が川と池を掘ったことによって蘇ったということになる。それも掘ってからわずか半年足らずでのことだ。川上から種が流されて池に落ち着いたのか。それとも、じっと地下でまた環境が変わるまで身を潜めていたのか。いずれにしろその復元力には驚かされた。

そもそも川と池を掘ることを決めた大きな理由は、水辺が無くなったことによる植生の変化をもう一度再生し多様性のある場所にできないかということだった。それが自分たちの手でスイレンを植えたりなんだりしている間に、水で暮らす昆虫が集まって来て、水辺を産卵場所にするトンボやカエルも目ざとくやってきて、ついには姿の消えたガマがもどってきたのだ。それも半年という短い時間で。

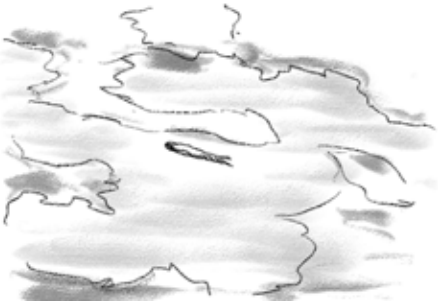
粘土質の水はけの悪い土地だったこともあり、いわゆるガーデニングを自らやることには関心が無かったが、植物を植えるのではなく環境に若干手を加えることで生まれてくるランドスケープを楽しむことをできればと思った。

戻ってきてくれたガマ

川と池ができて二年目の四月の末に大雨が降った。前の日から降り続いた雨は朝になってもまったく止む気配が無く、池は中之島も形を失い、大きさもの二まわりも大きくなったかと見えた。氾濫の状況を確認しようと二階の窓から池を見ると、なんとそこには二羽のカモが楽しそうに泳いでいる。色姿から雄と雌であることがわかる。私たちの池にカモが。家の中から息を潜めて観察していると、カモたちは池から川を上流に泳ぎ始めた。時々、雄が水から上がり、雌が川を泳ぐのを見守ったりしている。ちょうど、家のまえの畑の脇を通り過ぎてしばらく行ったところでUターンして池に戻ってきた。確かに上流は細かに曲がりくねって勾配も急になるのでカモには泳ぎづらかったのだと思う。結局小一時間居た後、飛び立って行った。

池を掘ってトンボやカエルがやって来たのはなんとなく想定の範囲だったが、まさかカモまでやってくるとは。そもそもどうやって知ったのか。空から見てなのか、水の匂いを頼りにか。それはわからないが、小さな川と池と思って居たが自然界では立派な水辺として認識されたと言って良いのではないか。なんせ、カモはその時だけでなく十日後にもまたやって来たのだ。さすがに、ここに巣をつくる決断はしなかったようだが、それでも大したことだ。

六月に入ると、池に黒いものが泳いでいるのが見えた。そのシュッとした姿はオタマジャクシではない。池の端の草に身を潜めて観察していると、それは紛れもなく魚だった。それも一尾だけでなく、少し大きめのが二尾、中くら



いのが三尾そして小さいのが二尾と結構な数だ。それこそ上流から流れて来たのかもしれないが、ついに魚が放流もせずに池を泳いでいるのを目にすることができたのだ。ただ、これもオタマジャクシの時のようにいつの間にか姿を見ることができなくなってしまった。

同じ六月の下旬には池の周りに地面を掘り返したような跡が見られた。明らかに獣の仕業と思われたが一体誰だろう。さっそくおもちゃのような暗視カメラを手に入れてセットしてみた。最初の日は何も写っていなかったので、少し場所を変えてセットしてみたが、それでも成果はなかった。やはりおもちゃではダメかと思った三日目、何かが写っていた。白黒動画でさらに気温が下がってモヤのかかったような画像だったが、尻尾の縞模様はアライグマと思われた。続けて同じ場所に翌日もセットしてみたら、今度はモヤが発生していなくて鮮明な画像が記録されていた。

おもちゃカメラなので生き物の温度を感知してから録画が始まるタイミングが遅く近づいてくるところは写ってなくて、突然、池の中之島に掛けた小さな橋からぬっと顔を出してこちらに近づき、それも二匹。いや、三匹。いや、四匹。つぎつぎと池の方から出て来て木道に濡れた足跡をつけていった。親とおぼしき大きいのがしきりにカメラの匂いを嗅いでいる。そのうち視界から消えたのだが、子供たちに手洗いを教えていたのか。アライグマは農家も困るやっかいものだが、その後は警戒して姿を見せなくなった。

カモのカップルが池にやってきた

小魚の姿も

アライグマの親子が手洗いの練習に

地図をつくる

川と池を掘るといった私が手を加えることで、植生やそこに生きる昆虫や動物の様子が変わっていくのを直接目にすることができたのは興味深い体験だった。これからも何かが少しずつ変わっていくのだろうが、それをできる範囲で記録しておきたくなった。そのためにはベースになる現状の地図が必要になる。それもどこにどのような木が生えているのかなど細かな情報がのっている地図があると良い。当然、それは自分でつくらなければならない。

敷地のことでわかっているのは、土地を購入するときにもらった測量図で敷地の四辺の距離と、建築確認申請に記載した建物の位置と大きさだけである。そこから木の一本一本の位置を調べて地図に書き込んでいく必要がある。いったい敷地に何本の木があるのかも検討がつかない。それでも、調べたいという気持ちはかなり強かった。自分の敷地にどのような木が生えているのかも知らないでいるのは、何か情けない気がした。木の種類が細かくわかってくると、またこの土地の見え方もきっと変わってくると思われた。

さて、どこから手をつけようか。まずは地図を書き込むおよそ畳半分の大きさの紙を用意し敷地の形と建物を描いてみた。次に、建物から近い比較的大きな木を目印として地図に落とすことにした。建物の端から木の方向と距離を測ってそれを地図に描き写すことを繰り返せば、いつかは地図が完成する。木の方向はスマホの方位磁石で北から何度と測ることができそうだ。問題は距離だ。ゴルフで使うデジタル機器でピンまでの距離とか障害になる木の高さなど

が測れるものがありそれを使うことにした。ゴルフはまったくやらないのだが、仕事で建物の位置や高さを計る必要があったときに購入したものが役にたった。建物の両端から見える範囲の木を測ってはメモをして、それを地図に書き写す作業をしていたら、どうも実際の木の位置と地図上の木の位置が明らかに違うところがでてきた。方位磁石は水平に構えないと正確に方角を示さないので何度か同じ場所を計るとその都度ちょっとずつ違ってくる。これではだめだ。

次に考えたのは、建物の両隅から木までの距離を測って、それを地図にコンパスで円で描くと、その二つの円が交わるところが木の位置になる。そうやって建物のまわりに目印になる木を増やしていけば、さらにその目印からの距離でその他の木の位置を地図に落とすことができる。これもやっているうちに変な場所に木があることになってきた。ゴルフ用のデジタル機器の精度に疑問を持ち同じ場所を何度も測ってみると都度、変な値が出てしまう。

ここはデジタルに頼らずアナログに行こうと決めて、伊能忠敬方式を試すことにした。伊能忠敬は距離を歩数で何歩あるかで測ったという。これなら怪しい道具を使わなくて良い。まず一歩の歩幅を測って、そのあと十歩歩いて実際の距離を測ってみる。たったそれだけでもぴったり同じ値はでない。伊能達は同じ歩幅で歩く練習を何度も何度もしたそうだが私にはできるとは思えない。いったいどうして伊能忠敬は、あんなに正確な日本地図をつくることができたのか。ただただ敬服するだけだった。

歩数で距離を測ることができるか

最初からそうすればよかったのだが、ホームセンターに直行して五十mまで測れる巻き尺を買ってきた。これで二方向から木までの距離を測り地図に落としていくことにした。しかし、これもやってみると意外と大変なことがわかった。何も障害物がなければ簡単なんだが、木や草が巻き尺をまっすぐに伸ばすのを邪魔するのだ。その都度、後戻りしてできるだけまっすぐに伸ばせるルートを探して計ることになる。それでも、巻き尺は嘘をつかないという信頼感で作業は進んだ。それをまとめて地図に写そうとするとコンパスで描いた円だらけになってどの交点がプロットしたい木の位置なのかわからなくなってしまい紙はどんどん黒くなるばかり。これも最初からそうすればよかったのだが、パソコンの作図ソフトで作業することに変更した。

パソコンの作図ソフトを使うと円の補助線を色分けすることもできるし、補助線と木の位置の印を別の紙（レイヤー）に描いて重ねてみることができるので、作業が格段にしやすくなった。木の位置を地図に落とす作業がかなり進んだ頃、東側から測っていった木と西側から測っていった木が、同じ木なのにずれていることがわかった。どの木を測り間違ったのか、測った誤差が塵も積もって大きくなってしまったのか。実際の木の見え方も参考にしながらチェックして修正を繰り返す作業にずいぶん時間をとってしまった。

どうにかこうにか木の位置を地図に落とし終わってからがまた大変だった。その木が何の木か一本一本調べなければならない。そのような知識はまったく

計測結果を図面に

無いも同然だったが、樹木図鑑を頼りに調べることにした。これにはずいぶん時間がかかった。なにせ、木の位置を測るのに都合が良いのは、まだ草丈が高くならない雪解けの時期なのだが、その時には木に葉が無いのだ。図鑑には木の幹の肌の違いも書かれているが、とてもそれだけではわからない。目につく大きな木は四季をつうじてよく見ていたので、例えばハンノキは特徴的な雌花と雄花で特定できていた。また、ヤチダモはゴツゴツとした大きな冬芽でわかった。春一番にまだ葉が出る前に雄花が咲くバッコヤナギも大ぶりの花から区別がついた。ただ、それ以外の木々についてはせいぜい、紅葉する木があるな程度の認識で、葉の形や、花や実の姿について詳しく観察したことがなかったのだ。なので、木の種類を特定するのは長期戦と構えることにした。

若葉が出る頃になると忙しくなる。原寸大の葉の写真で検索できる樹木図鑑を手に入れてそこらの木の葉と見比べてみたが、それでも「これだ」という確証が持てない。この図鑑は全国の樹木を対象にしているので、ここ北国の樹木まで細かくカバーされていなかったのだ。やはり「北海道」と明記した本でなくてはならない。それでも本に掲載されている写真から、これと同じものだと見分けるのは難しかった。むしろ一九二〇年からほぼ十年がかりで刊行された手書きの絵による樹木図鑑の方が、特徴を捉えて描かれている分、同定の手がかりとしては随分助けられた。そこには、木の様々な部位が季節を超えて描かれており、一枚の絵にその木の全てを捉えようとする意思が感じられた。

図鑑と見比べているうちに特徴的な葉の木は見分けがつくようになった。例えばミズナラとコナラ。どちらも楕円形で根元が少し細長くなっており縁が大きくギザギザしていて他の木の葉と違いが良くわかる。やっかいだったのはミズナラとコナラの見分け方だった。最初、小さな葉の方がコナラと思っていたのだが、それは個体差で葉の根元に軸があるかどうかが決め手のようだ。ミズナラは軸がなくて枝からすぐ葉のギザギザが始まる。針葉樹も常緑だったのでトドマツかエゾマツということにした。その見分けは木肌の色と肌合いが決め手と考えた。そうやって見分けるポイントを自分のものにすると楽しくなる。

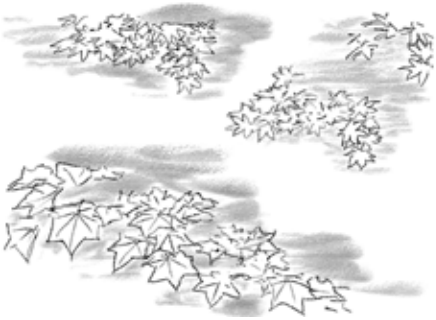
手のひら型の葉も他の葉とは見分けやすいのだが、それが何の木か同定するのは結構手間取った。手のひら型の葉はおおむねカエデ科だと思うのだが、それには何々モミジというのと何々カエデというのがいろいろあるのだ。モミジが指の股の切れ込みが深く、カエデは手のひらが立派と思っていると、指の切れ込みが深いハウチワカエデもあったりする。それに個体差もありそうなので迷ってしまう。そもそも私には植物を見分ける観察力が無いのかとも思ってしまうが、日頃あまり注意して木や花を見てこなかったことで植物目が未熟なのだということにして、ひたすら観るように努めた。その結果、私なりに春先に咲く花が濃い赤色で葉が深く切れ込んでいるのをヤマモミジ、花が緑色で葉の切れ込みが浅く手のひらが立派なのをイタヤカエデとしてみた。中には微妙に違いそうなものもあるのだが、それはあとでもっと植物目が養われてから見

分けることにした。

そんな感じで、とりあえず全樹木の同定が完了して図面に記録し終えたのが六月の頭だった。もっとじっくり一年を通して、紅葉の様子や実のなり方、木肌の様子など観察してから決めれば良いのだが、それは今後の楽しみとして一旦の樹木配置図の完成とした。いろいろ間違えはあると思うが、その時点で確認された樹木は三十一種類、三百二十三本。

最も本数が多かったのはトドマツで四十八本。これは、造成当時のことを知っているご近所さんの話だと造成に伴って植えられたもので、確かに道路ぎわに並木のように並んでいる。それに太い。次に多かったのがカワヤナギで三十八本。これは湿気の多いこの土地に適した樹種で造成後に生えてきたものと思われる。ヤナギもいろいろな種類があって同定が難しかったが、その他にイヌコリヤナギ、バッコヤナギなどが確認できた。次に多かったのがコナラ、ミズナラとクリ。これらは、おそらくエゾリスが植樹したものだろう。特にクリは日頃エゾリスが良く行き来する姿を見るあたりに点々と生えている。

大木に育っているのはハンノキとヤチダモ。特にヤチダモは家の窓の正面に堂々と立っている。春先に葉が出てくるのが一番遅いのだが葉の茂り方は立派だ。樹木調べでわかったのだが、そのヤチダモの大木から南の方角に無数のヤチダモの小さな木が生えて小さな森のようになっていた。冬の間の北風で種を飛ばして子孫を残しているのだった。



コナラ（右）とミズナラ（左）

モミジやカエデがいろいろ

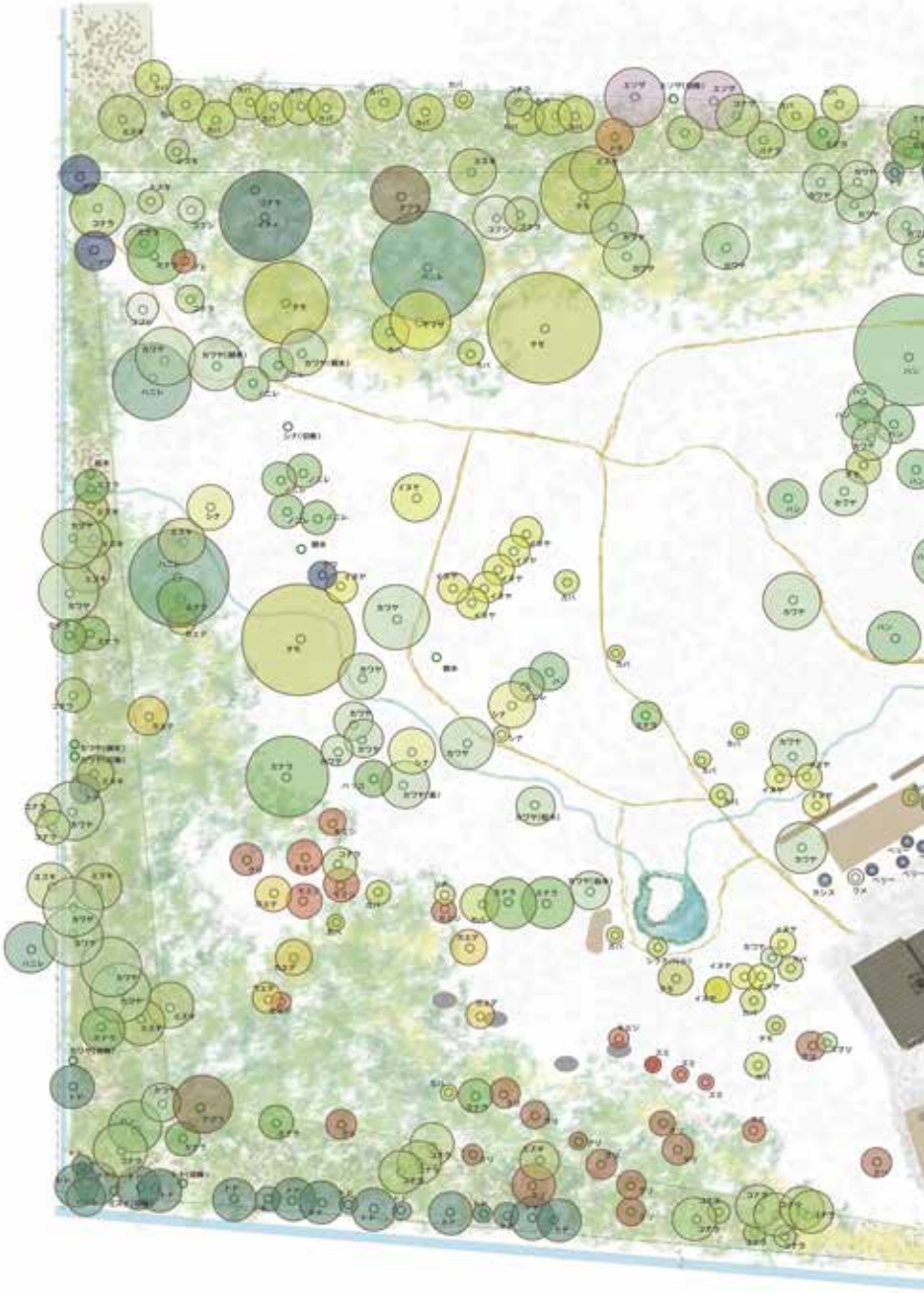
凡例

01) トドマツ	(トド)	
02) クリ	(クリ)	
03) シラカバ	(カバ)	
04) ヤマモミジ	(モミジ)	
05) イタヤカエデ	(カエデ)	
06) ハウチワカエデ	(ウチワ)	
07) ハシノキ	(ハシ)	
08) ヤチダモ	(タモ)	
09) ハルニレ	(ハニレ)	
10) ノニレ	(ノニレ)	
11) ミズキ	(ミズキ)	
12) カワヤナギ	(カワヤ)	
13) イヌコリヤナギ	(イヌヤ)	
14) バッコヤナギ	(バッコ)	
15) オノエヤナギ	(オノヤ)	
16) コブシ	(コブシ)	
17) ズミ	(ズミ)	
18) ツリバナ	(ツリバ)	
19) ミヤマザクラ	(ヤマザ)	
20) エゾヤマザクラ	(エゾザ)	
21) ホウノキ	(ホウ)	
22) トチノキ	(トチ)	
23) コナラ	(コナラ)	
24) ミズナラ	(ミナラ)	
25) イチイ	(イチイ)	
26) シナノキ	(シナ)	
27) ヤマグワ	(クワ)	
28) アキグミ	(グミ)	
30) ハギ	(ハギ)	
31) ノバラ	(ノバラ)	
32) ツツジ	(ツツジ)	
33) ストローブマツ	(スマツ)	
34) コシアブラ	(アブラ)	
35)		
36)		
37)		
0A) マルメロ	(マルメ)	
0B) ブンゴウメ	(ウメ)	
0C) カシス	(カシス)	
0D) ブルーベリー	(ベリー)	

0 1 2 3 4 5 10 15m

N

Takayama Tree Map® 2021.08.01

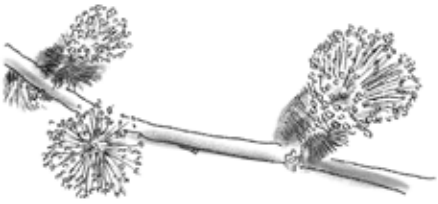


一年通観

敷地内の樹木の位置を地図に落としてわかったことがいくつかある。まず驚いたのは私が敷地として認識していたのは全体の四分の三くらいだったことだ。ちょうど魚眼レンズで敷地を上から見たような感じで、家の周りが実際より広く見え周りはほとんで知らない世界だったのだ。調べたのは雪解け直後だったので敷地の隅々まで足を踏み入れることができたが、六月ごろになると、根曲がり竹が勢いを回復して視界も遮るし入るのも拒まれる。そのエリアが結構広いのだ。根曲がり竹を刈り取ってしまえば一段と敷地が広く感じるようになるのは確実だった。だが、樹木調査中にそこに鳥の巣があることがわかったのだ。確かに茂った根曲がり竹の方から鳥の鳴き声も聞かれる。敷地として認識していなかったところは鳥たちの生活で重要なところだったのだ。

もうひとつ、樹木の位置と樹種がわかったことで、季節がかわるごとに「あの木はどうなったかな」と見に行くことができるようになった。ただ木が生えていただけだとそのような気持ちにならなかったと思う。一年を通じていろいろな植物がどのように変化して行くのかを自分のペースで観察することができる。今まで考えたこともなかった贅沢だ。

最初に気になったのはバッコヤナギだ。これは前に触れたように雪解けすぐに葉が出ないうちに花を咲かせる。花といっても繭のような形に花が密集している。緑色をしたのと白い毛がふさふさしたのとがあるので良く見て見ると二本の木が絡み合ってそれぞれ違う花をつけていることがわかった。図鑑によ



ると雄の木と雌の木のようだ。白いふさふさした方は、時間が経つと先端が黄色になってきた。雄の木で花粉がしっかりできてきたのだ。雌の木の方はだんだん細長く大きくなって先の尖ったそれぞれの小さな花の形がはっきりわかるようになってきた。その頃になると黄色く一際目を引いていた雄の花は茶色く小さなくちゃくちゃの塊になってしまう。雌の花は尖った先が綿毛のようになりどんどんその数を増してきた。やがて綿毛は膨らみバラバラになり小さな種を抱えて風に飛ばされて一仕事を終えることになる。それが四月半ばから六月半ばにかけての出来事だった。

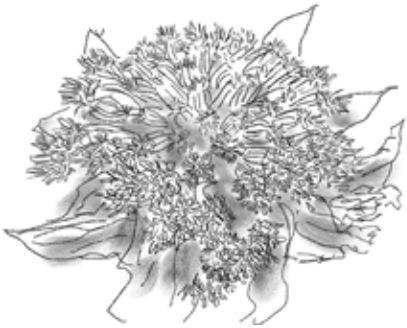
六月になってからはクリを観ることにした。クリは白い鎖状の花やイガグリは見たことがあるが、その間がどうなっているのか詳しくは知らなかった。白い花はいつ頃咲くのだろうと思っていたら、六月の半ばにはもう鎖状の蕾ができていた。このころはつやつやとした立派な葉に押されて目立たないのだ。やがて蕾が開くと良く見る白い鎖状の姿になる。たくさんのつぶつぶからイガのように無数のツノが出ているのだが、どれがあのクリの実になるのだろう。図鑑を見るとこれらは皆雄の花のようだ。ではどこに雌の花があるのか。それは鎖状の雄花の根元にできるのだ。全ての雄花の根元にできるわけではなさそうだが、良く見ると根元にぷくっと一段と大きな塊がある。やがてそれがイガのようにトゲトゲした塊になってくるのだが、そこからさらに白いトゲトゲした花を咲かせるのだ。そして雄花は茶色く枯れて行く。

バッコヤナギの雌の木（右）と雄の木（左）

クリの花（根元の塊がクリの実になる）

今更で恥ずかしいが、一本の木に雄花と雌花をつけるものと、雄の木と雌の木が別のものとがあることは、銀杏のなるイチョウとならないイチョウがあるということで薄々知っていたが、実際この目で詳しく観察したのは初めてで新鮮だった。私について言えば、植物について知っていることはほんの一部で本質的には知らないことだらけだ。

フキのこともそうだった。春、雪解けとともに家先に顔を出すフキの薹は味噌で和えると酒が進むんだなと悦にいっていても、そのフキの薹にも雄と雌があるのは知らなかった。確かに花が開いていない食べ頃のフキの薹の雄雌を見分けることはできないかもしれないが、食べられるのを逃れたものを観察しているとそのうち違いが見えて来る。外側を覆っていたものが開くと中からぎっしり蕾がつまった鞠のようなものが見えて来るがどれも同じに見える。その蕾が開き始めると白くパッと花が咲くのと、先が濃い紫がかった色の花が密集した状態のとに見分けがつくようになる。白いのが雄。紫のが雌。白い雄花が満開になる頃、雌花の丈が高くなり始める。やがて雄花は茶色く小さくなるが、雌花はどんどん丈が高くなり、花の形も白い綿毛の状態になってくる。かなり高くなったところで種のついた綿毛を飛ばし始めるのだ。そのうち雄花も雌花も姿を消し大きなフキの葉に覆われるようになる。家の周りには大きく3つのフキのコロニーがあるが、そのうちの一つについて雄花と雌花の数を数えてみたが、若干、雄花が多かった。そもそも私たちが雄花と雌花のどっちを多



くフキ味噌や天ぷらにしたかわからないので、雌雄ほぼ同数としておこう。

あれだけ再生を期待して池まで掘ったガマについても何も知らなかった。ガマの再生を確認した最初の年は葉だけで穂は見ることができなかった。ようやく穂らしきものを見ることができたのは三年後だった。それもちょっと太い茎程度のもので、良く見ると先の方が少し長く膨らんでいるように見えなくはない。一週間ほど経つと穂のようなものの先が割れて濃い緑色のものが現れてきた。てっきりこれががガマの穂になると思っていた。確かにそれから二日後には茶色い色に変わってきたのだが、どうも形が溶けたソフトクリームのようで、あの立派なフランクフルト型とは程遠かった。まだ株が未熟なのかなとも思ったが、さらに十日待つと溶けたソフトクリームは小さくなりその下の部分が太くなってきた。色も緑と茶の混ざった状態になり、テクスチャもあのマットな感じになってきた。上部は雄花で下が雌花と思われる。きっと、これが成長し上部は徐々に消滅しあの見慣れたガマの穂になるのだ。そしてあるとき穂の一部がほころびそこから白い綿毛が爆発するように出てきて、あとは風や水の流れに託すのだ。

こんな感じで、見慣れていると思っているものでも知らないことばかり。ましてや、今まで馴染みのなかったその他の多くの樹木については一年が未知の世界といっても良い。いったいいつ花が咲くのか、どこに実がなるのかなど図鑑を頼りにひたすら観るしかない。

フキノトウの雄花（右）と雌花（左）

ガマの雄花は上に（右）雌花は下に（左）

一年を通じて観察するのに最も変化を捉えやすいのが秋だと思っていた。今まで緑だった葉が黄や赤になる。でも、そのように色変するのは秋だけでないことがわかった。葉の形からイタヤカエデと思って秋にはオレンジがかった黄色になるのを期待していたら、五月に緑の葉が赤くなり始めた。図鑑で調べ直すとイタヤカエデの仲間のベニイタヤというのが春に若葉が赤くなるとあった。花にも色変がある。最初は淡い色だがそれがだんだん濃くなったり、その逆で濃いのが薄くなるというのは良くある。ところがズミという木の花は劇的な色変をする。春に蕾が膨らんで来ると鮮やかな赤色が目を引く。そして満開近くになると純白になるのだ。最初は違う種類の木かと思ったぐらいの変化を見せる。

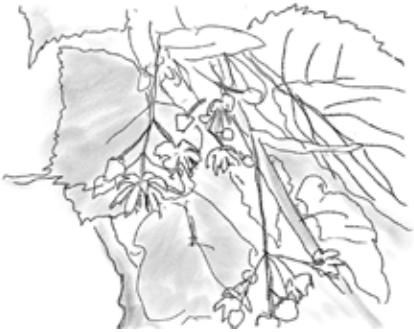
花といえば、春になるとご近所ではソメイヨシノやエゾヤマザクラが満開になる。コブシの白も良く目を引く。でも、うちにはそのように目を楽しませる花が見当たらない。まあ、ご近所との間には特に塀などもなく良く見えるのでお花見には事欠かないのだが。樹木調べをしているうちに一輪だけ花をつけるコブシを見つけた。葉の形からしてコブシと思われる木も数本あったが花は確認できなかった。木が密集して生えているところにあるので花をつけるには条件が悪いのかもしれない。サクラは葉が出る前に咲くと思い込んでいたが、ミヤマザクラはそうではなかった。葉が茂ったあと、それもサクラの季節をすっかりすぎたあたりで、白い清楚な花を咲かせる。この木も敷地の奥に生え

エゾヤマザクラの花

ていたのでそれまで見落としていた。そのほかにも見落としていた花はいろいろあった。シナノキもそのひとつだ。他の木に埋もれがちに生えていたのだが、ハート型の特徴のある葉だったのでシナノキとわかった。何度かその木の前を通るうちに茂った葉の間から長めの軸が伸びその先が分かれて丸いものができているのを見つけた。しばらく観察し続けているとそれが蕾でやがて白い花が咲き始めた。遠目にはあまり目立たないが、近づいて観ると下向きに細い白い花弁が開いた姿は、ちょうど線香花火のようで可憐であった。

秋の紅葉の季節は確かに風景が変わる。特に、ヤマモミジの紅色を太陽の光を透かして見るときは格別である。ただ、一年を通して見ると冬を前に全ての葉が落ちた後もすてがたい。樹種を特定するのに葉の形を観察していたので落ち葉からそこに生えている木を思い出すことができる。ここにミズナラの大木があったこと、ここにシラカバが数本あったこと、もちろんヤマモミジやイタヤカエデも半年のいろいろな変化を楽しませてくれたことと一緒に思い起こさせてくれる。

ややもすると植物のある瞬間を取り出し、それがその植物の姿と思い込みがちであったが、そんな単純なものではなく日々刻々と変化を繰り返し、また、成長していく姿があり、その時間に寄り添うことができたのは得難い体験だった。これも、色々苦労して敷地内の樹木を隅々まで調べたことで内在化というと大げさだが、植物たちとの距離が縮まったおかげかと思う。



シナノキの花

千客万来

私たちが木々に囲まれた生活を始めたことを知った方々から、「今度遊びに行くよ」と声をかけていただくことが多くあった。ずいぶん遠方からKさんがわざわざそのためだけに訪ねてきてくれたのには恐縮した。どんな世捨て人のような暮らしをしているのか見にこられたのであれば期待はずれであったかもしれない。それでもいろいろな方から「羨ましい生活ですね。」と言っていただけたのは素直に嬉しかった。しかし、そんな時は長くは続かなかった。WHOがパンデミック宣言をして以降、お客様が来られることは途絶えてしまった。それでも我が家は千客万来。

まず最初に来られたのがキタキツネだ。時々、敷地内を行き来しやすくするために草を刈ってススキや木屑を敷いてつくった園路をとことこと散歩している。キタキツネは寄生虫を媒介しエキノコックス症を引き起こすので親しくはできない。向こうも親しくする気はなさそうで、こちらの顔を見てもすぐに逃げ出すでもなく何事もなかったように悠然と立ち去るのである。ただ、夜中に鳴かれるとちょっと怖い。コンコンと鳴くと思ったら大違い。ギャーアーワーと大きな声で、まるで人間の大人が奇声をあげて叫んでいるようで事件性が高いのだ。

タヌキも数度いらした。一応、畑もあるのであまりお近づきになりたくないのでお引き取りいただこうと外に出たら、何を間違ったか縁側の下に潜り込んでしまった。姿は見えたので縁側に向かって一歩踏み出し圧をかけて見たが

エゾリス

タヌキ

キタキツネ

小さく丸まったままで動かない。少し可哀想だが冬だったので雪玉を投げつけて追い出すことにした。ところがそれでもピクリとも動かない。タヌキの「死んだふり」というのは本当で、それもかなり名優だ。諦めて家の中に戻って様子を見ていたが動き出した気配は無かった。このまま同居するのは勘弁して欲しかったが、しばらくして外に出て見ると姿が消えていた。さすがタヌキ。

隣人は庭をエゾシカが横切ったことがあると言っていたが、我が家の敷地には来られていない・・・はずだ。敷地のほとんどは夜は真っ暗闇になるのでどんなお客さんが来られているのか検討がつかない。数年前は家から百mも離れていないところでヒグマの目撃情報があってニュースになっていた。知らぬが仏である。それでも雪の積もった冬は足跡からどんなお客さんが来られていたのかある程度わかる。良くウサギの足跡は見るがお会いしたことはなく失礼している。

結構フレンドリーなのはエゾリスだ。最初の冬の明け方、寝室の窓のあたりで物音がするので目を覚ましたら、縁側に積んだ薪の上にちょこんと座ってこちらを見ているエゾリスと目があった。エゾリスは三角形の耳の上に長い毛があるのがなんとも可愛いのだが、仕草はどちらかというとおっさん臭い。股を開き加減にちょこちょこ動く姿はステテコがお似合いだ。ただ、全速力で敷地を横切る時は別人のように素早く、手足を胴と一直線になるように伸ばして地上すれすれを飛ぶように移動する。雪に残された足跡からも飛ぶ姿がわかる。

そんなお客さんたちのなかで、最も親しくしていただいているのが鳥たちだ。春分の日がすぎてどんどん日が長くなるとたいへんだ。明け方といっても日の出の一時間前ぐらいから鳥たちが一斉に鳴き出す。日の出の前の時間には、市民薄明という時間と、航海薄明という時間があるそうだ。市民薄明は灯などなくても歩ける明るさで、航海薄明は闇夜に水平線が浮かび上がる程度の明るさということだ。鳥たちは市民薄明など待っていられずに航海薄明の頃から鳴き出すのがいる。なので、竹山で夜更かしするのは控えるようにしている。鳥たちが一斉に鳴き出すのを鳥のコーラスとも言ったりするようだが、どちらかというとコンサート開演前のオーケストラのチューニングみたいで、それぞれのペースで鳴いている感じだ。良く聞くのはシジュウカラやヒヨドリであるが、オオルリやクロツグミが鳴くと思わず聞き惚れてしまう。

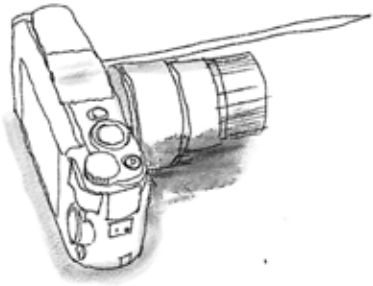
鳥は朝だけでなく、昼も夜もメンバーを変えてやってくるが、朝来るお客さんにはまいってしまうことがある。やはり寝室の窓際でコトコト音がするので見て見ると胸がオレンジ色のヤマガラが積んだ薪の上にチョコンと止まっていて、しきりに小首をかしげてこちらを見ているのだ。「まだ、起きないんですか。もう明るくなってきましたよ。」そして「大丈夫ですか。息してますか。」と言っているかどうかはわからないが、どこか、心配そうな表情で小首をかしげてこちらの様子を伺っているのだ。これには本当にまいってしまう。

いったいどのくらいの種類の鳥たちが我が家を訪れてくるのか、サインま

窓辺でこちらを覗き込むヤマガラ

ではもらえないが記念撮影をすることにした。動物写真家の使うバズーカレンズは重そうだったし一眼レフで揃えると高いので、超望遠コンデジで済ますことにした。文字通りコンパクトなのに望遠力がすごく、月のクレーターもくっきり写る。さっそく来訪記念撮影にトライしたが、痛恨の選択ミスをしたのに気が付いた。このカメラにはファインダーが無かったのだ。大きめのディスプレイがついているのだが、それを頼りに飛んでいる鳥を画面に捉えるのは至難だし、仮に木に止まっていても枝や葉の間にいる鳥を探し出すのは苦労する。そこで、焼き鳥などに使う竹串をカメラの上部にレンズの向けている方向にテープで止めてみた。これがあると竹串をターゲットに向けることで瞬時に画面に収めることができるのだ。

そうやって記念撮影に応じてくれたのは、トビ、オジロワシ、オオジシギ、アオサギ、カケス、マガモ、キジバト、シメ、ヒヨドリ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、アオジ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハシブトガラ、アカハラ、ツグミ、ウソ、クロツグミ、メジロ、ミヤマホオジロ、ホオジロ、モズ、オオルリ、カワラヒワ、アカハラ、キビタキ、アトリ、そしてシマエナガ。みなさん撮影にご協力いただきありがとうございました。中には撮影は遠慮したいという方もいる。良くいらっしゃるのに声だけのウグイス。畑づくりには欠かせないカッコー、奇怪な声で驚かせるアオバト、夜更かしのフクロウの誰か。あと、上空を通り過ぎるだけのハクチョウのみなさんかな。



コンデジを改造して

ゴジュウカラ
コゲラ
キビタキ
シジュカラ
マガモ
アカハラ
カワラヒワ
メジロ
ウソ
ヒヨドリ
オオジシギ
オオルリ
ミヤマホオジロ
カケス
クロツグミ

アオサギ
シメ
オジロワシ
アオジ
キジバト
ヤマゲラ
トビ
アトリ
モズ
ヤマガラ
シマエナガ
ホオジロ
ツグミ
アカゲラ
ハシブトガラ

悩ましいのは、お客様のおもてなしだ。ここに暮らし始めた当初から鳥たちの来訪は楽しみな時間だったが、おもてなしはしないようにしようと妻と話していた。餌をあげることで人の手に依存してしまいはしないか。そうなると私たちが死んだ後、生きていくのが大変にならないかということを真剣に話していた。ところが最初の冬の正月二日に窓の外を見ると、木にリンゴがなっているではないか。同じ仲間とはいえズミの木にリンゴができるはずがない。妻の仕業だ。あれだけおもてなしはしないでおこうと言っていた本人が、ヒヨドリの可愛さに負けてしまったようだ。もともとは自然豊かな環境に暮らして苦労しながらも食べ物には恵まれていたのが、人が木を切り造成して住み始めたことで食べ物が減ってきた。その分をおかえししなければ。それに、ご近所は皆餌台を置いたり脂身を吊るしたりしているのに、うちだけ我慢しても意味がない。というのが理屈のようだ。一週間後には窓の前に小さな箱が置いてあってヒマワリのタネが入っていた。当然、ヒヨドリはやってくるし、シジュウカラやアカゲラ、ゴジュウカラなどの小鳥が次々とやってくる。早朝に窓際にやってきていた鳥も、最初は「もう起きませんか。大丈夫ですか。」と言っていたのが、小首をかしげて「ご飯はまだですか。」と言うようになってしまった。翌年には、あり合わせの木材で立派な餌台もできてしまった。作ったのは私だが。餌台は木の枝を使ったりできるだけ自然の状態に近づけてみた。例えば、アカゲラなどのキツツキの仲間は脂身が好きなようだが、少し太い木の枝

に横から穴を空けてそこに脂身を詰めるようにしてみた。キツツキが木に穴を空けて中にいる虫を食べるのに近くしたのだ。とは言っても自己満足的免罪符にすぎないのだけれど。ただ、ひとつだけ絶対守るルールを妻と決めた。それは、雪が解けて土が出てきたら餌台は仕舞うということだ。

鳥さんたちが来てくれるのにはもう一つ悩みがあった。鳥の子供達が飛び始めるころになると、中には窓を知らずに激突してしまうのがいる。バードストライクだ。窓のガラス面は角度によっては良く外の風景を反射して鏡のようになることがある。そこにあたかも広い空間が広がって森につながっているように見えてしまうのだ。幸い、我が家に激突した鳥たちは脳震盪を起こしてしばらくじっとしていることはあっても、そのうち飛び立っていってくれた。ただ、隣人たちの話を聞くと、毎年のように亡くなる鳥がいるという。これは、明らかに後から家を建てて危険な状態をつくった私たちの責任なのだが、いろいろ調べても有効な対策が見つからなかった。良くタカなどの小鳥の天敵のシルエットをシールにして窓に貼るのを売っているが、効果は薄いみたいだ。

風車をたくさん作って窓の前に置いてみたり、蛍光色のテープをたらしてみたり、いろいろ試したが我が家の見かけが悪くなるばかりで効果はなかった。あるとき窓の西日対策に簾をつけてみたら、内側からの眺めもそう悪く無かった。そして鳥たちがぶつかっても簾がクッションになって大ごとにはならない。なので我が家は冬も簾がかけっぱなしの変な家になっている。

あの手この手でバードストライク対策

鳥たちの気持ち

妻がある時から奇声を発するようになった。「キッキッ、キッキッ」と大きな声で、それもどこか彼方に目を泳がせながら何度も「キッキッ、キッキッ」と。これはまずいと動揺したが、本人はどうやらアカゲラと会話をしたがっているようだ。それ自体も怪しい行動なのだが、その気持ちもわからなくは無かった。妻はアカゲラにも名前をつけていた。「ぽんちゃん」という。名前の由来はアカゲラが飛ぶ時の姿で、始終羽ばたいているのではなくバタバタと数回羽ばたいた後は羽をたたんでロケットのように進むのだ。その姿を言葉で表すと「ぽーん、ぽーん」と飛んでいるようだと言うのだ。それでも毎回同じアカゲラが来るわけでなく、頭のてっぺんが赤い雄と、黒いままの雌がいるし、明らかに体格が違うのも来る。でもそれはみな「ぽんちゃん」で、雄のぽんちゃん、大きなぽんちゃんで済ませている。まあ、それはそれで良いのだけれど、それだけ思い入れたうえ、季節を問わず家のすぐ近くまで来てくれるとなると、話してみたくなる。どうもこちらも洗脳されたのか、妻が「キッキッ、キッキッ」と言うと、ぽんちゃんも「キッキッ、キッキッ」と返してくるように聞こえる。何を言っているのか妻に聞くと「脂身はまだですか。」だと。まあ、それは確かかもしれない。

それから妻はアカゲラについていろいろ知りたくなって図書館でいろいろな本を借りて来た。その中の一冊を差し出して「これ見て」と言われたのが、アカゲラの舌の図解だった。アカゲラは頭を激しく振って尖った嘴で木に穴を

ヤマゲラの舌の構造

ヤマゲラの舌ちょろ

空けるのだが、それで脳を痛めることもあるようだ。それだけ必死に穴を空けた後、中にいる虫を食べるのだが、そのために特殊な舌を持っているのだ。舌の先は釣り針の返しのようにフックできるように曲がっていて、その舌を長く木の穴に差し込んで虫を食べるのだそうだ。その長く舌を出すための機構として長い舌を鼻から後頭部をぐるっと回るように収納しているのだ。確かに、アカゲラが脂身を取り出すところをアップの動画で写したことがあるが、それはまるで爬虫類の舌だった。アカゲラは「きもかわいい」のだ。

妻の話し相手はアカゲラだけではなく、ヒヨドリもそうだ。ただ、ヒヨドリの鳴き声は「ギーッ」とか「ヒーッ」なので、さすがに大声で会話するのははばかられるようだ。ヒヨドリはなんと言っているのか聞いてみると「リンゴはまだですか。」だと言う。同じじゃ無いか。まあ、それ以上に高等な会話をする必要が無いのかもしれないが。ヒヨドリといえば、東京などの大都市でも始終良く見かけるが、もともとは森と平地を季節ごとに行き来していたようだ。それが一九七〇年頃をさかいに年中まちなかにいるようになったそうだ。なぜそうなったかには諸説あるようだが、餌に不自由しないし、人は天敵にはならなかったからという説がある。竹山で見られるヒヨドリも通年で見られるので同じように生態が変わったしまっているのかもしれない。ただ、東京の都心での鳴き方は非常に強く威嚇的に「ギャーッギャーッ」鳴きあっていたが、ここではストレスが少ないのか会話的な鳴き方をしているように感じる。

鳥たちは自分の好みのお立ち台を持っていて、そこでよく鳴く。歌の名手のオオルリやクロツグミは敷地の中でも一、二の高さのミズナラのてっぺんがお気に入りのようだ。そこからよく通る声で歌うのはさぞかし気持ちが良いと思う。一方、歌はお世辞にもうまいといえないが、しきりに鳴くのが好きなヒヨドリは、何を思ったか我が家のテレビのアンテナをお立ち台として選んだ。声からしてパンク系を自認しているのか。そういえば、アカゲラは木を「コンコンコン」とテンポよくつつくドラミングを得意としてるが、なかにはお隣の金属電柱を甲高い音で叩くのが好きなのがいる。若い鳥たちの間ではニューウェーブが生まれているのかもしれない。アンテナをお立ち台としたヒヨドリは、見上げて声を聞いていた妻にウンチを落とした。かなり破壊系のようだ。思いっきり声をあげると腹に力が入るのか歌の途中でウンチをする鳥はヒヨドリだけではなく結構いる。おかげでアンテナの下の玄関階段の隙間から桑の木が生えて来て慌てて広いところに移植した。

鳥たちはどんな歌を歌っているのだろうか。鳥には言語があるという最近の研究もあるみたいだが、それだけでなく鳥たちには何か歌の美学があるような気もする。わかりやすいのはウグイスだ。例の「ホーホケキョ」なのだが、春先の若鳥にはそううまく鳴けないのがいる。妻は「フォトビジョン」と鳴いているというのだが、まさかと思って聞いていると、そう聞こえなくも無い。「ホー」のところのタメがうまくできないのだ。でも、何度もなんども鳴いて

クロツグミのお気に入りの演台

いるうちにだんだん上手くなってくる。難しいのは後半だ。「ケキョケキョケキョケキョ」と、よく息が続くと思うぐらい長く鳴く。ただ、そのうち「ケキョ・・・ケ、ケキョ」と不安定になってくる。歌の最後をどのように終われば良いのか迷っているうちにわからなくなってしまう。そんな感じに聞こえる。これが名手になると「ケキョケキョケキョケキョ」を長く弱まりもせず一気に歌い上げるのだ。歌の先生がいるのか、皆、練習を重ねて上手くなっていく。

鳥たちがよく鳴くのは早朝で、その一斉に鳴き出す様は「朝のコーラス」として知られているか、夕方もよく鳴く。ただ、聞いていると朝と夕方ではニュアンスが違うような気がする。朝は力がみなぎって希望に満ちた鳴き方だ。朝からナンパに精を出しているのだとは思うが、暗闇が空けまた新たな一日が始まる喜びを高らかに歌い上げていると思ってみたくなる。一方、夕方はクロツグミの歌を聞いていると、吟遊詩人のように今日一日の出来事を振り返り、音に乗せ語っているように思える。「あんな楽しい思いもした、こんな危ないこともあった、でも良い一日だったね。」と。そう、私たちも良い一日だったよ。

春に鳴き声を聞くとホッとする鳥がいる。オオジシギだ。遠くオーストラリアあたりからノンストップで飛んでくる渡り鳥で、途中、嵐に巻き込まれて命を落とすものも少なく無いようだ。「ギ、ギ、ギ、ギ」と鳴きながら大空高く舞い上がり、一転急降下する。その時の翼の風切り音が「ババババッ」と凄まじい。孤独な長旅を経てパートナーを探す姿にどこか哀愁を感じる。

長旅のオオジシギ

鳥たちをよく観察できるのは冬だ。木々の葉が枯れて落ちるので鳥が丸見えになる。それに餌台で寄せているので間近まで来ることになる。餌台は三つ用意している。野鳥に餌をやるのはどうのこうのと言っていたのに三つもかと言われそうだが、それには私たちなりの理由がある。家の近くまで良く来るのはヒヨドリ、シジュウカラなどの小型の鳥、アカゲラなどのキツツキだ。それぞれに体格も違うし好みも違う。ヒヨドリにはリンゴなどの果物、シジュウカラたちにはヒマワリやアワなどの粒餌、アカゲラなどには脂身と、それぞれ毎に餌台を別にし、互いの距離も保つことで余計な争いを起こさないように考えた。また、台の構造も横枝に止まるタイプと幹に止まるタイプというようにそれぞれの鳥の足の構造に合わせて工夫してみた。

最初は、餌のやり過ぎは良く無いと、少しだけあげるようにした。そうするとシジュウカラやハシブトガラやゴジュウカラなどは餌台の周辺の木に一旦止まり、それから餌台に来るのだが、ほとんど一斉に来ることはない。誰か一羽が餌台に行って餌を咥えて枝に戻るのを、他の鳥は待ったいるのだ。そして、順番に餌台に行って平和な食事の時間で終わるのだ。これは一回だけのことではなく良く見られた。雪が深く寒さも厳しくなって、つい、いつもより多めに餌を入れてみた。皆喜ぶだろうなと思ったら、今まで大人しく譲り合って順番に餌台に行っていたのが、一斉に来て、互いに相手を牽制し時には攻撃的に威嚇して沢山の餌を独り占めしようとし出したのだ。偶然いろいろなことが

キツツキたちの餌台

ヤマガラなどの小鳥たちの餌台

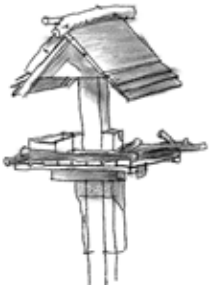
ヒヨドリの餌台

重なってそういう行動になったのかもしれないが、何か考えさせられる出来事だった。食べるものが少ないと分かち合い、不自由ないほど食べるものがあるとそれを独り占めしたくなる。そう見えないこともない。

餌台を三種にして距離を離したのは一定の効果があったようで、互いに他の餌台に行くことはなかった。ところが、そこにカケスが登場すると状況は一変した。カケスは数羽でグループをつくって行動するのを良く目にする。体格も一段と良い。私たちはそれを「カケス三兄弟」と呼んでいたが血縁のほどはわからない。彼らはどの餌台もお構い無しに食べ散らかす。そして、ある程度食べ終わっても餌台に居座り、他の小鳥たちが近づこうとすると威嚇して追い払う。この餌台は我々のものだと言わんばかりの態度だ。

餌台を守ろうという気持ちはヒヨドリも同じだが、態度はぜんぜん違う。リンゴの餌台の近くの枝に止まってじっと餌台を見守っているが、小鳥がリンゴに近づいても飛んで行って追い払うまではしない。ただ、羽がプルプル震えているので嫌がっているのは間違いなさそうだ。ただただ餌台の近くから離れずにじっとしている。それも冷たい雪がふりつけようがじっと耐えている。不憫な感じのするやつだ。

そんな冬のある日、外出から帰って玄関先まで来たら、突然、ゴジュウカラがまっしぐらに私の方に飛んで来て、頭の上に止まって肩に降りこちらを見るではないか。餌もないのに。少し鳥の気持ちに近づけているのだろうか。



雪と暮らす

秋が深まってくると急に忙しくなる。長い長い冬に備えて冬支度をしなければならないのだ。まずは、薪ストーブの薪を木熊を解体して玄関の脇の軒下とか縁側に積み直す必要がある。我が家が一冬で使う薪の量は、あくまで補助暖房と調理用なので四㎥ほどになる。薪の重さは木の種類や乾燥状態によって違ってくるがおおよそ一㎥当たり六百kgとすると二・四tになる。それをネコという一輪車の台車に積んでは移動して積み直すのだ。単純な作業の繰り返しだが、「今年の冬はどんな冬になるのかな。寒い冬になるという予報もあるので少し多めに高く積んでおくかな。」とか、「今年買ったばかりの角食用の型を使って薪ストーブでパンを焼いてみよう。」とか思いながら一本一本薪を積むのは、そう苦にならない。

冬囲いもこちらではきちんとしておかないと雪で枝が折れてしまう。それに野ネズミに樹皮を丸裸にされて枯れてしまわないように対策もしなければならない。昨年は厚いシートで根元を包みそれを地面に沿って広げて杭で固定してネズミが侵入できなくしてみたが、結果的にあっけなく突破されてしまっていた。今年は、どんな対策をとるかそろそろ考えておかなければならない。頼りにしているMさんもネズミとアライグマにはお手上げだと言っている。罠を仕掛けて捕獲するのが確実だとのことだが、捕獲したあとどうするのか。あの可愛らしい顔を見てしまったらなかなか決断はできない。薬剤の入った餌を使うというのもあるが、他の動物が口にしてしまわないかと悩ましい。そのうち、

縁側に薪を積み冬支度

ネズミの方で根負けしてくれれば良いのだがそんなことはあるまい。

あとは、大きな外テーブルの片付けがある。一応作る時に分解できるようにしてあるのだが、とにかく大きくて重い。昨年は横着してそのままの状態で冬を越せないかと思ったが、神様は甘やかしてはくれなくて過去最大の積雪をプレゼントしてくれた。おかげで、テーブルが雪の重みで歪んできてしまったので、掘り出して片付けざるを得なかった。かえって厚く積もって凍りついてしまった雪を掻き出すだけで余計な苦労をすることになってしまった。今年はちゃんと分解して縁側に積んでおかなければならない。

それに、この時期にぼうぼうと生えて枯れたススキを刈って敷地内の園路に敷いておくと、雪解けの際に園路の位置がわかりやすくて春の作業がしやすくなる。これも園路の総延長が二百m以上になるので相当な作業になる。大きなブルーシートを広げ、そこに刈ったススキをできるだけ多く積み上げてシートで包み、えいやっと頭の上に担ぎ上げて園路の先に運び徐々に敷いて行く作業を繰り返す。これを何度も繰り返すのだが、薪の時のように先々の楽しみが思い浮かばないので結構な苦行となる。

こんな感じで冬が近くなるとやることが多くある。一応、健康管理のために体脂肪なども測れる体重計でチェックしているのだが、秋が一番シェープアップされる。ついで、外仕事が再開される春、そして雪かきの冬の順になる。リバウンドするのは夏だ。暑くて外作業は最小限になってしまう。

もうひとつ冬になる前にやっておかなければならない重要なことに、鳥たちの餌台の設置があった。雪解けと同時に餌台は一旦片付けるというルールを設けたので、この季節立て直さなければならない。だいたい一冬たつと支柱の木も土と接する部分が腐れてくるので、新しい太めの枝を探してきて取り替えなければならない。それにアカゲラなどのキツツキ用の脂身棒は冬中突かれ続け無残な状態になってしまうのだ。まあ、これもおもてなしの準備と思うと楽しい作業のひとつだ。

秋の深まりと同時に、景色も徐々に茶色のモノトーンに変わってくる。春も茶色のモノトーンの世界になるが、気分的にはずいぶん違う。春は、モノトーンの中にぽちぽちと緑の点が見え始め、あるときからぐぐっぐぐっと群落ごとに緑の塊を成してくる。一方、秋はそれまで青々としていた葉の色が茶色になったり色が抜けていく。そして草花などは徐々に丈が低くなり。やがて黒い斑点が浮き上がりそして溶けるように姿を消して行く。生のベクトルと死のベクトルの違いがそこにはある。ただ、歳のせいか、徐々に弱くなる光のなか植物たちが土に還っていく時間は美しく心の落ち着くものがある。

茶色い色も薄れてすっかりモノトーンの世界に変わる頃、空の雲の様子が変わってくる。心なしか薄くはかなげな刷毛で掃いたような雲になる。そうなると、はらはらと白い雪が舞い降りてくる。こちらでは、その前兆に「雪虫」と呼ばれる小さな虫が飛び始める。お尻に白い綿毛をつけた虫が空中を漂う姿

枯れて土に還るギボウシ

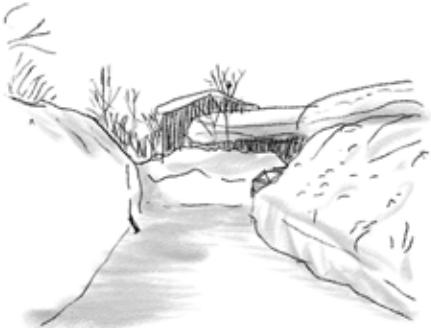
は雪に例えるのに相応しい。そして不思議なことに雪虫を見てから数日経つと本当の雪が舞い始める。最初は、白いものが地上に降り立つと自然に消えていってしまい。雪が止んだあとは何もなかったかのようになる。それを何度か繰り返しているうちに気温も低くなり地上の雪が溶けなくなってくる。それが春まで続くと「根雪」と言われる。だから後になってみないとそれが根雪かどうかは判定できないのだが、北国では口々に「これは、もう、根雪だね。」と自然に言い合う。それは、ほとんど外れることはない。

雪が降り始めると除雪の準備をしなければならない。ここには市の除雪車が来ないのだ。ただ、ありがたいことに住民同士で除雪組合をつくると除雪費用の一部を補助をしていただける。町内会のお仲間の農家のKさんが大型の除雪車を持っているのでその補助金で除雪をお願いしている。除雪していただけるのは基本的に道路で私たちの車を停めているところから玄関までは自分たちで除雪しなければならない。これはあたりまえのことなのだが、量がちょっと多い。原因は住宅プランの誤りにあり私のせいだ。私は建物敷地が南東隅に限られることがわかってからもアプローチは敷地の北西隅からと決めていた。来客は北西隅に車を止めそこから木々の間を縫うように園路を進むと急に視界が開け遠くに我が家が見える。そんな妄想を最後まで持ち続けたおかげで玄関の位置がおかしくなってしまった。駐車スペースから玄関には行くには建物の周りを半周しなければならない。その除雪面積は七十五㎡。

ここらに降る雪は気温が低いせいもありパウダースノーなのだ。さらさらとした雪で、雪かきスコップですくって投げ上げると雪がぱあっと広がり消えていくように見える。一般的に雪の重さは、新雪では五十～百五十kg／㎥といわれるが、ここらの雪は一番軽い五十kg／㎥程度であろうか。それでも十㎝ほど積もると除雪しなければならない雪の量は七十五㎡×〇・一mで七・五㎥になる。重さにすると三百七十五kgにもなる。そしてこの量の除雪はかなり頻繁にある。

昨年の冬は雪が少ないまま年を越したのだが二月の上旬になってから大雪になってしまった。二日降り続きその間に降った雪は九十五㎝になった。ここから一番近い気象庁の観測ポイントでは最高記録だったそうだ。この時期の雪はかなり水分を含んでいてパウダースノーから程遠い。しっかり固まっているのでスコップで四角い塊を切り出してそれを積み上げるようにして除雪する。おそらく新雪であっても湿った雪だと百五十kg／㎥にはなるのではないか。九十五㎝降った時の除雪の量は七十五㎡×〇・九五mで約七十㎥にる。その重さはなんと約十t。そんな大雪が断続的に続き、除雪したところの両側に積み上がる雪壁はどんどん高くなってくる。二月の下旬には私の背丈を軽く越してしまった。

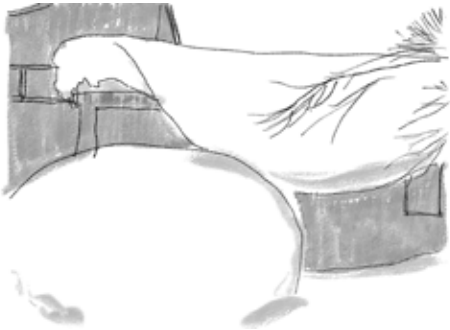
除雪は手作業でやっている。できるだけ機械に頼らず自分の手でできる範囲という考えを除雪まで当てはめる必要はないのだが、まず、除雪機は結構高



大雪でできた雪の壁

い。それに置く場所も玄関の近くに確保する必要がある。なんとなく面倒だなと考えているうちにどんどん雪が降り、成り行きで手作業となっている。当然、ご近所は立派な除雪機を持っている。朝早くから除雪機のドドドドという力強い音がして、雪山越しに雪が高く跳ねあげられるのが見える。さすがに大雪が続いた時には気持ちが動いたが、話を聞いてみると両隣とも除雪機が雪に負けて故障してしまったそうだ。湿った雪が除雪機の中にへばりついて雪を飛ばす羽を回すベルトが切れてしまったそうだ。そうなると修理に時間がかかる。それに動いても人の背丈を超える雪山の上まで雪をはねあげるほどの馬力がなく、雪山の壁に当たって足元に落ちて来てしまうのだそうだ。こうなると確実なのは人力ということか。おかげでかなりの筋トレになった。

そういう面倒はあるが、やはり雪は美しい。雪が降った早朝に外に出ると昇りかけた朝日を雪の小さな結晶が反射し、そこかしこがキラキラと輝いて見える。雪の粒の大きさは気象条件によって様々であるが、時にびっくりするような大きさの雪になることがある。それは雪の粒というより雪の結晶がつながって羽のようになったもので、スローモーションで見るようにゆっくりゆっくり舞い落ちてくる。まるで天上の天使たちが神さまたちが留守の間に枕を投げ合って遊んでいるようだ。雪に落ちる影も深い青みを帯びているし、雪の断面も光の加減で鮮やかな青に見える時がある。雪と風が作り出す雪の造形も優れた彫刻家に迫るものがある。



雪の造形は芸術家並み

春はいつから

北海道の春は遅く、だが一気に来ると言われる。確かに、雪解けの茶色の世界がみるみる淡い緑色でおおわれ、やがてその間に鮮やかな黄や白や赤い色が混じり始める五月は北国に春が来たと言うにふさわしい。

ただ、ここで暮らしていると春はもっと早くからやってきていると思うことがある。例えばフキノトウだ。まだ雪がうっすら残っているところにグッと顔を出す。あの独特の味と香りも合わせて春の訪れを感じさせる。ところが、よく観察しているとあのフキノトウの姿はすでに晩秋に見られるのだ。その時にはすでにフキノトウの形になっていて、そのあと深い深い雪の下に埋もれながらじいっと雪解けを待っているのだ。そういえば木々も冬芽のかたちで春を待っている。冬芽は春になって枝や葉や花になるものが硬い鱗のような殻のなかにギュッとつまっている。その状態で厳しい冬の間じっと時が来るのを待っているのだ。空気中の水分が氷の結晶となって冬芽にまとわりついているのを目にすると早く暖かい日差しが来るように応援したくなる。

冬の間の太陽は、どんよりとした雲に覆われることが多いこともあるが、夏のあの生気は消え失せ、弱々しく感じられる。そんな冬の太陽に力が戻って来たと感じるのは二月である。これはまったく感覚的なものだが、妻もそういう。そもそも、北国のここでは十二月、一月と朝七時になっても陽は登って来ないし、夕方四時半を待たずに陽は沈んでしまう。それが、二月になると日の出は六時台になり、二月の半ばには日の入りも五時過ぎになる。そこから日照

時間もぐんぐん長くなる。太陽が南に来た時の角度も冬至の頃は二十四度台だったのが二月になると三十度まで高くなる。この南中の時の太陽高度は冬至前後の角度の上昇は鈍く、二月前後頃からぐんぐん上昇し始める。そんなこともあって二月になると太陽が戻って来たといういう感覚になるのかもしれない。それに気のせいか、その頃になると鳥たちの鳴き声も力強くなる。長い冬から抜けて春が始まったと感じるのは私たちも鳥たちも二月からということだ。それだから二月の湿った雪の除雪も耐えられるのかもしれない。

我が家のメインの屋根は非常に緩い勾配にしてあるので、冬の間、ほぼ屋根に雪は積もったままになる。それが三月の半ばにもなると厚く積もった屋根の雪も徐々に落ち始め、太陽の熱も加わりどんどん少なくなってくる。三月の下旬になると、敷地の雪原にところどころ窪みが見られるようになる。最も早く見られるのは南向きの斜面の木の根元だ。太陽の光を浴びた木の体温が木の周りの雪を溶かすのだ。それから平坦なところにも大きな窪みが現れる。池や川の場所だ。冬の間、池の表面は氷に覆われ、その上に厚く雪が積もっているのだが、深く掘ったところは下に水が残っている。そこに、徐々に解けた雪が水となって川に集まり流れをつくってくる。そうなると表面を覆っていた氷も解け、その上の雪も他より早いスピードで解けてくるのだ。この頃になると、やることも除雪から、雪解け前にやっておかなければならない作業に変わってくる。冬の間に雪で折れてしまった枝の整理だ。

屋根の雪が自然と落ちてなくなる

これまで、雪で折れてしまった枝はそのままにしておいて、雪が解けてから気が向いたら拾って集めて焚き付けにしていた。それで問題にならない量だったのだが、昨年の大雪でかなり太い枝も裂けるように折れてしまい、量も相当になってしまった。これを雪解けを待ってから運んで集めるのは枯れ草に枝が絡んだり、雪解け水でぬかるんだ土に足を取られて大変になる。やるとしたらまだ雪のあるうちにするのが良いのだ。

雪の上を歩くのにはスノーシューを使う。ここに移り住むきっかけを作ってくれた隣人から、竹山移住記念にプレゼントしてくれたスノーシューであるが、これまで冬の野山の散歩の道具と思い込んで出番があまりなかったのだが、この時を待っていたように冬の外作業に必須の道具だということを再認識させてくれた。歩き慣れないと雪に先端を取られたりして不自由なのだが、慣れてくると補助ストックなしで移動できるようになってきた。両手が自由になると折れてしまった枝を鋸で切ることもできるし、両手に抱えて運ぶこともできる。行動範囲も広くなった。普段は根曲がり竹が行く手を阻んでいたところも雪の上だと自由に行き来できる。これまで行ったことのなかった敷地の端まで行けるのはこの時期がベストだ。

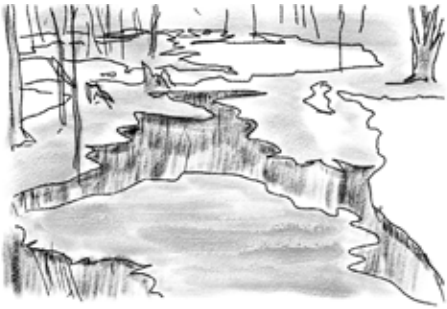
雪の重みで折れた枝は、太いのは二十㎝ほどもあり、大小集めてくるとちょっとしたボリュームになってしまった。とりあえず、家の近くに積み上げたのだが、雪解けになると、そこは川であったりレイズドベットの畑だったり

大雪で折れた枝を集めたら

するのでそのまま放置するわけにはいかない。まずは用途別に分類するところからだ。太い枝は薪にする。比較的長さのある小枝は束ねて土留めなどに使える「粗朶（そだ）」にする。それ以外の小枝は細かく砕いて園路に敷く材料にする。この分類作業は結構時間がかかるのだが、これをしておかないと最後の作業が終わるまで雑然とした状態のままになってしまう。外作業は結構何日もかかるものが多いのだが、その一日一日で一定の始末がつくように作業をして行くのが重要だと思っている。

　ようやく枝の整理が終わったのは、久しぶりの土が雪の下から出て来るころになった。そうなったら、薪にするとして集めておいた枝をさらに、チェーンソーで切るもの、鋸で切るもの、鉈で切るものに分けて、それぞれの作業をしていかなければならない。それも目処がつく頃には別の作業が待っている。フキノトウなどの山菜の収穫だ。フキノトウにしろ根曲がり竹の小さなタケノコにしても、ちょっと目を離すと大きくなりすぎてしまう。敷地のあちこち目星をつけているところを毎朝巡回するのだ。

　敷地の中の雪は最後ひとつの小さな塊になってやがて完全に消える。それはだいたい四月の上、中旬になる。ここで暮らし始めてからの完全雪解けの日で一番早かったのが四月七日だ。そして一番遅かったのが四月の十九日。大雪だった今年だ。それに合わせるように自動車の冬用タイヤを夏用に変えるタイヤ交換がやってくる。

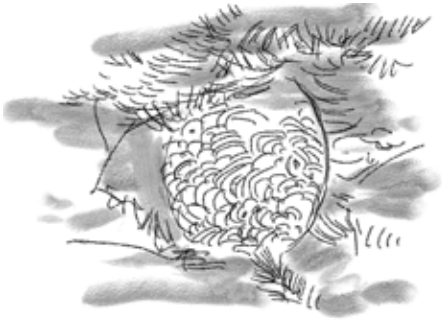


最後の雪の塊がもう少しで

その頃になると、鳥たちの声で季節が変わったことを実感させられる。代表的なのはウグイスの初鳴きだ。これが毎年だいたい同じに日に鳴き始めるのが不思議だ。例えば二〇一九年は四月十三日、翌二十年は四月十六日、二十二年は四月十五日という具合だ。逆に四月二十三日まで鳴かなかった二十三年は、何か自然界に異変があったのかと心配になってしまうくらいだ。同じ頃、その声を聞くとホッとするのがオオジシギだ。前にも書いたようにオオジシギは遠くオーストラリアからノンストップで渡ってくる鳥で、無事に渡りを終えることができないのも少なく無いと言う。オオジシギもほぼ同じ頃にやってくる。最も早かったのが二〇一九年の四月十五日で、最も遅かったのが二〇一八年の四月二十六日だった。オオジシギは鳴き声もそうだが、独特の金属的な翼の風切り音を聞くと、「長旅お疲れ様でした。ここでゆっくりしていってね。」と労いたくなる。

そうなると。エゾノリュウキンカの黄色い花やコブシの白い花、そしてエゾヤマザクラなどの春を代表する花々の出番になる。まちなかにいた時は、それらの花々を目にすると春が来たと感じていたが、ここ竹山にいると春はもっと早くからスタートしていて、その間は、人も生き物もまた一年を過ごすための準備をしっかりするための時間として大切にしなければならないと感じる。

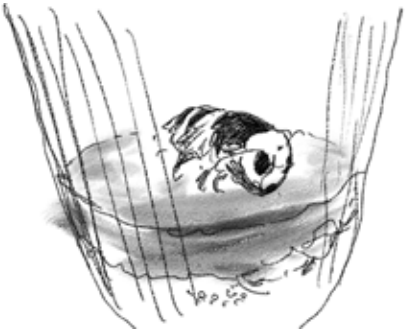
準備といえば、この時期大切なのはスズメバチトラップの設置だ。この頃になるとスズメバチの女王が目覚め、巣をつくり始めるのだ。一人で巣をつく



スズメバチの巣

りそこに卵を産み育て成虫になると、力を合わせて巣を大きくしどんどん卵を産み育てる。それを繰り返して両手で抱えるほどの大きな巣ができあがる。スズメバチはミツバチなどを襲い幼虫のためのタンパク質を集めるようだ。人間もタンパク質であるが、食料として襲うことはない。ただ、間違って巣に近づいたりスズメバチにとって脅威になる存在と見なされたら刺される。ご近所のOさんも草刈りなど畑仕事をしていて刺されアナフィラキシー症状が出て救急車のお世話になったと言う。ちょうど、ここで定住を決めた年の春に家の軒裏に小さな徳利型の巣をつくられてしまった。まだ、女王バチが一人で巣作りしている段階だったので、すぐに刺される事態にはならないと思われたが、そのままにしていると巨大なスズメバチ集団を形成してしまうので、駆除することにした。駆除するにはホームセンターで売られているスズメバチのイラストが大きく描かれた専用の強力殺虫剤を使うのだが、相手も必死だろうから逆襲を恐れて駆除業者にお願いした。

業者に頼むとそれなりのお金がかかるので、それ以降、Mさんに教えてもらったハチトラップを五、六ヶ所設置することにしている。大型のペットボトルにハチが入る穴を開けて中に特別なカクテルを入れるのだ。レシピは極甘口の日本酒二に対して酢と砂糖を各一混ぜる。それをペットボトルに深さ七、八㎝程度入れて、怪しそうなところに吊るすだけ。ただ、自分たちがよく通るところは避けないと呼び寄せるだけになる。



トラップにかかった女王蜂

春から夏そして秋

本格的な春が来るとさらに忙しくなる。畑の準備が始まるのだ。畑といっても前にも書いたようにささやかなものなのだが、老人二人にはそれなりに大変なのだ。まず土なのだが、毎年少しずつMさんに土を分けてもらって畑に足しているのだが、それでも軽のダンプ二杯分くらいはいつも持って来てくれるので、それを土置き場まで一輪車で運び、必要に応じて畑などに使わせてもらっている。それに、落ち葉でつくった腐葉土や、妻が頑張って土間でお世話しているダンボールコンポストの堆肥、それに秋のうちに刈って集めておいたそこらの草、それに必要に応じて石灰や肥料を土と混ぜてなじませておかなければならない。二人とも素人なので、図書館で本を借りてきてはいろいろ試してみる。妻が借りてきた本が「ぐうたら農法」みたいなタイトルで良い選択眼をしている。

今年は何を植えようかと考えるのは楽しい。あれこれ植えてみたくなるのだが実際にうまく育って日々使えるものは限られる。それでも、少しずつではあるが二十種類ぐらいは毎年育てている。ハーブの類は宿根のものが多いので毎年植えるものはさらに少ない。種から育てる計画性はあまりないので、大半は苗を買ってくる。近郊の農家では一株五十円とか格安で売ってくれるところがあったりするのでなおさら苗に頼ることになる。それぞれの植物に適した土や水はけの状態、気温や地温などあるようだが、まだ、そこまで気を配って育てるレベルにはなっていないので、私たちに買われた苗は可哀想かもしれない

のだが。

先に春の兆しは二月頃からと書いたが、野菜の苗を植えるのはもっと気温が高くなってからでなければならない。そのタイミングが今だに良くわからない。地温を高く保つのにマルチという黒いビニールで土を覆う方法があるが、私たちは農家ではないので、毎年、沢山のビニールをゴミとして廃棄するのには抵抗があり今のところ使っていない。そのかわり大量に生えているススキを細かく切って土の上にかけるということなどしているが、若葉が大好きな虫の良い寝ぐらになったりして効果があるのか無いのかわからない。ここ北国ではカッコーが鳴くと豆や苗を植えるタイミングと言われているらしいが、ここに来てからの記録を見返すと五月の十九日が一回、二十日が二回、二十四日が二回とだいたい同じ頃に鳴いている。不思議なものだ。

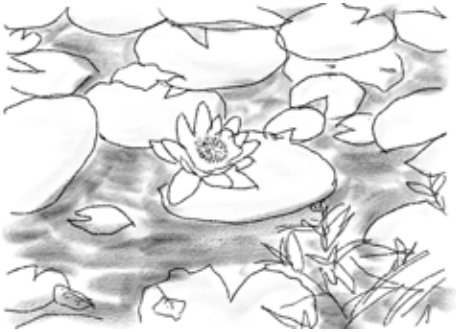
そんな素人の畑仕事も一段落する六月の中旬になると、いろいろな草花の花が顔を出し始める。六月の下旬になると、敷地は新しい緑に覆われるので、外かまどが活躍し始める。枯れ草が目立つ内は火気厳禁なのだ。枯れ草に火がついた時の燃え広がる勢いは凄まじいそうで、そんなことになったら大変である。外かまどの出番はこの春の時期と秋に限られる。あの暑い夏にかまどの温度を三、四百度に上げるために、炎天下に薪の燃える輻射熱を浴び続けるのは苦行に等しい。七月に入るやいなや、暑いと感じる日がやってくる。北国にも夏が訪れる。

ススキでマルチをつくってみる

七月になって夏が来たと実感するのは、お隣のご主人が釣ってくる天然の鮎だ。そう、私たちが竹山に住むのを後押ししたあの鮎だ。ご主人は相当、腕が良いようで坊主だった年は無い。それどころか七月に何度もあの香りをいただけるのだからありがたいことだ。今年は、大雨で型の良い鮎が相当流され、かろうじて流されなかった鮎も食料になる藻が強い流れで川底の石から剥がされ育ちが悪いとぼやいておられたが、それでもきちんと釣果を上げて来られた。近年の記録的な大雨は多大な被害をもたらしているが、生き物の生態にも影響が出ているのかもしれない。

夏になると色とりどりの花が咲き始めるのだが、特に嬉しいのは自分で掘った池に植えたスイレンの花が咲くのが見られることだ。スイレンは最初の年に植えた小型のスイレンのヒツジグサの他に、Mさんが庭じまいを頼まれた家から救出して来た大型のスイレンも仲間に入れていただき、大小、白、クリーム、赤、オレンジなど色とりどりのスイレンの花の共演が見られる。スイレンは早朝は蕾の状態だが、それから数時間の間に花が開き立派な姿になる。じいっと見ていると徐々に開いて来ているのが見えるような気がするぐらいだ。それが夕方が近づいてくるとあっという間に閉じてしまう。同じ花が三日と咲いていないのではないだろうか。

七月は子供たちと会える月でもある。早朝に近くの道を車で走っていると大きな鹿が現れ、その後ろには小さな鹿の姿も見えた。母子だったと思われる。



スイレンの花が咲く

親鹿はじっとこちらを見て私たちが通り過ぎるのを確認し、子供を促しながら道を渡って行った。母子といえば、前にも書いたが我が家の池を手洗いの練習の場に使ったアライグマの家族を見たのも七月だった。

親がつきっきりで面倒を見れれば良いのだが、そうはいかない子供たちもいる。おそらく鳥たちがそうではないかと思う。妻は良くアカゲラが親子で来ているとか、ヒヨドリが兄弟で来ているというが、そう思い込んでいるだけで見分けているわけではなさそうだ。むしろ一人で木々の間を自由に飛び回れるようになった喜びを爆発させているような危なっかしい子供の方が気になる。その飛び方は車を手に入れたティーンエージャーのようで、「どうだ、俺こんな飛び方できるんだぜー」と言っているようだ。そして、案の定、家の窓に激突する。ドンと鈍い音が聞こえるたびに妻と顔を見合わせ、急いで外に出て窓の周りを確認する。幸いにして姿を見ることはほとんど稀なのだが、窓ガラスに一枚羽根が残っていたりすると心が痛む。それでも数回、鳥の姿を見ることがあった。少し体を動かしているので大事にはなっていないことがわかるのだが、それでもすぐには飛び立てないでしばしぼーっとしている。そのうち首を傾けてみたり羽を少し動かしてみたりして、少々ぎこちなく羽ばたき近くの木に移動する。またそこでしばらく体調が回復するのを待ってそれから飛び去るのだ。その間は見守るしか無い。そのようなことも大小の窓に簾を垂らしてからは無くなり少し安らかに七月を迎えられるようになった。

鳥がぶつかっても大丈夫なように簾を

八月になると合唱の季節になる。セミとカエルだ。セミは実はもっと早く五月頃に鳴き始めるエゾハルゼミというのがいる。ミィーキンと長めに引っ張って鳴くのが特徴で夏のアブラゼミほど騒がしくない。私たちにはアブラゼミは気象予報士のような存在で、朝は涼しいなと思っていてもジージジジジと一斉に鳴き始めると、ほどなく強烈な暑さがやってくる。という気がしている。カエルも春先にゲロゲロとドスの聞いた声で鳴くのもいるが、夏のはもう少し軽くゲコゲコゲコと鳴く。彼らも気象予報士で、ゲコゲコゲコとくるとほどなく雨が振り始める。ような気がする。

畑の収穫もこの頃が盛りになる。食卓もそれに合わせて豊かになる。朝はサンダルをつっかけて自家製のヨーグルトに添えるイチゴとブルーベリーを採ってくる。朝早く収穫したものは水々しい。それにミントを加えると目も美味しくなる。フェンネルも意外と合う。朝採ってくるのは他にトマトとバジルがある。たっぷりのオリーブオイルにニンニクを刻んで入れてオリーブの香りとニンニクの香りが立ち始めたらたっぷりの刻んだトマトを加えると乳化してとろりとする。それに昨夜の冷やご飯を加えてリゾット風に。最後に刻んだバジルと加えると完璧だ。新じゃがもこの季節。皮が柔らかいので茹でてそのまま食べると土の香りがする。キュウリも取り立ては包丁を入れると水がしたたる。キュウリを生のまま食べるとその水気で心なしか体がひんやりする。ナス、インゲン、カボチャなど、毎日、畑をのぞいて今日の料理を思い浮かべること

朝は摘みたてのブルーベリーヨーグルト

ができるのはこの季節の楽しみだ。そして、ご近所からのお裾分けの野菜が急に増えるのもこの頃だ。

八月はススキなどが背丈より高くなり、敷地のなかに確保した園路も草をかき分けて行かなければならなくなる。なので、この頃の敷地の変化は意外と見落としている可能性がある。それでもはいろいろな植物がタネを蒔く準備に入るのはわかる。タネを蒔くタイミングは春から秋までそれぞれが他との競合を避けるようにバラバラなのだが、この頃、準備に入るのはススキやガマやアブラガヤが目立つ。単純に背が高いから園路を歩かなくてもわかるとうだけなのだが。ススキはうっすら紫色をした穂ができ始める。それが九月になれば綿毛をつけて白い穂になりいやが上にも秋を演出するのだ。ガマも独特の深い茶色の穂が目立つのだが、やがてそれもほころびができてそこから綿毛のついたタネを飛ばす様になる。アブラガヤは先端に茶色の穂をつける。その茶色い色と名前からして穂をすりつぶすと油が取れそうに思うが残念ながらそうでは無いようだ。背が高くて目立つといえばセイタカアワダチソウもそうだ。ただ、この頃はまだ蕾ができかけた頃で黄色い花が目立ち始めるのはもう少し先になる。

暑い日が続き夏バテ気味になるのだが、それでも、畑の向こうに青々と広がる草はらにススキの紫色やアブラガヤの茶色が刷毛で引いた様に浮かび始める景色をみていると、確実に季節は秋に向かって変わりつつあることがわかる。

ススキノ穂が秋を呼ぶ

九月に入ると秋のキノコの季節になる。我が家の敷地で収穫できるのは限られているが、それでもタマゴタケ、ヤナギタケなどは毎年、食卓に季節を運んでくれる。ただ、キノコはタイミングを逃すとナメクジに先に食べられてしまう。この頃になると散歩と称して先手を打って目星をつけた場所や木を見て歩くのが日課になる。キノコが大好きなのはナメクジだけでは無い。スーパーで売っている栽培したキノコはそのまま調理できるが、自然に生えたキノコはしばし水につけておく必要がある。そうするとキノコのヒダの奥から小さな虫がうじゃうじゃ出てくる。これを見ると一瞬、食欲が後退するが酒のあてのことを思うと見なかった気持ちになる。この頃になると、いろいろ気をかけていただいているMさんも、どこからか採って来たヒラタケやタモギタタケなどをどっさり持って来てくれる。それも夕方に突然電話が掛かってきて「石塚さんヒラタケ食べないかい。」と言って持って来てくれる。この突然のプレゼントはいつも嬉しい。

この頃にはノギクが咲き始める。ノギクは大きなコロニーをつくっているので花畑のようになる。花の色も薄紫が多いが、鮮やかな紫色や赤色も混じって賑やかだ。ノギクに負けじとセイタカアワダチソウも黄色の花が開き始める。ハンゴンソウも同じく少し大きめの黄色の花を咲かせる。セイタカアワダチソウもハンゴンソウもコロニーをつくっているが、園路の両側にそれぞれ陣取っていて競い合って咲いている。

道の右がセイタカアワダチソウ左がハンゴンソウ

九月といえば竹山神社祭が行われる月だ。第二日曜日と決まっていて町内の人たちで境内を掃除し、お参りをする。昔は人出も多かったと聞くが、今は十数人程度が参加する程度だ。お参りし、その後、地区の会館に集まり小宴を催す。小宴といってもここ数年はコロナ禍でお茶とお菓子程度で済ませているが、それでも互いに近況をのんびり語り合う時間は貴重だ。集まるのはほとんど七、八十代なので、元気な顔を見れるのも嬉しい。最近の話題は、夏の暑さと秋の大雨のことで、今まであまりこんなことがなかったという。

十月、十一月と周りの景色もどんどん変わってくる。ヤチダモは、うちの敷地の中では葉を茂らせるのが一番遅いが、黄色に色づき落葉し始めるのは早い。この頃の空はパッと抜けたような青空が広がり大きく見える。十月も中旬になるとグッと冷え込む日もある。そんな朝は土間の薪ストーブに火をつけて湯を沸かしコーヒーを入れる。暖かいコーヒーが喉を通り過ぎお腹に収まる感覚を楽しみながらオレンジ色の炎を見ているのは気持ちが落ち着く。冷え込む日に合わせて木々も紅色や黄色に一気に変わってくる。秋の澄んだ日差しを逆光に透かして見るヤマモミジの紅色は心までしみてくる。イタヤカエデの黄色も加わりそれらが道を埋め尽くす景色は絵に描いたようだ。

紅色や黄色の落ち葉に見とれてばかりはいられない。また今年も冬を迎える準備を始めなければならない。初雪は年によってかなり差がある。ここに来て一番早かったのが十月二十一日で最も遅かったのは十一月二十三日だった。

道を色とりどりの葉が埋め尽くす

雑草という草

季節の変化が鮮やかと言われることもある北国でも、ここ竹山での一年を振り返ってみると、春夏秋冬という一年の区切れ目があるというより、連続する変化の流れの中でいつの間にか春になり、夏になりしているような気がしてくる。特に植物たちは、常に一歩先を意識しながら今すべきことをひとつひとつ律義に行なっている。それが一年の大きなサイクルをつくっているのだ。

そんな植物たちについて、これまで触れてこなかったものも紹介したい。といっても何度も白状しているように、植物についてはまったく音痴で、特に草花は皆目ダメだったのだから偉そうに「紹介する」というより、こんな草花があったんだという私の驚きにおつきあいいただくことになる。

町内のお宅をは拝見すると家の前に色とりどりの草花が綺麗に植えられている。それに比べ我が家は草ぼうぼうで一見放置された空き地に見えなくはない。それは、敷地の大きさからきちんとした庭をつくるのは体力的にいっても無理があるし、何度も触れているが園芸種などが育つ土や水はけが期待できない土地なのだ。それをよく知っているMさんは、どこからかフタリシズカ、ニリンソウ、ユキザサ、ヤマシャクヤク、フウチソウ、コケモモ、シラタマノキ、宿根のヒマワリなどなどを「これ植えないかい？」と持って来てくれる。それらが我が家に彩りを添えてくれているのだが、それ以外にも勝手にやってきて自分の居場所をつくっているのがある。いわゆる雑草というやつだ。

「雑草という名の草はない。」という牧野富太郎の言葉は有名だが、雑草と

いう草は無いわけではなさそうだ。なんせ日本雑草学会という歴史のある学会がある。もちろん雑草それぞれに名前はあるのだが、雑草という類型が学問的に認められているのだ。では、雑草とは何を指すのか。これはどうも歯切れが悪そうだ。アメリカの雑草学会では「望まないところに生える植物」をされているようだが、望むか望まないかは主観的な問題で同じ植物でも雑草になったりならなかったりしてしまう。わたしたちの敷地で言えば植物が生えるのが望まない場所は特にないので雑草は無いことになる。別の定義では「絶えず撹乱される極めて不安定な環境に生活する一群の植物」というのがあるようだ。田畑の草刈りをしてもまた出てくる植物などが思い浮かぶ。さらに「絶えず外的な干渉や生存地の破壊が加えられていないとその生活が成立、存続できないような一群の植物」というかなりマゾな定義もあるようだ。過酷な環境では育たない植物というのはわかるが、その逆はいったいどういうことを言っているのか興味深い。

私たちの敷地でいえば家を立てるために大量の砕石を積んだところがある。駐車スペースや通路として使っているので極めて植物には不向きな環境である。仮に花を植えようとしてもそのままでは育たないところなので、ちょっとした花壇をつくった時も五十㎝くらい掘って土を入れなければならなかった。それがなぜか、数年経った今はいろいろな草花を見ることができる。それを雑草と言わせていただければ紹介したいものがいろいろある。

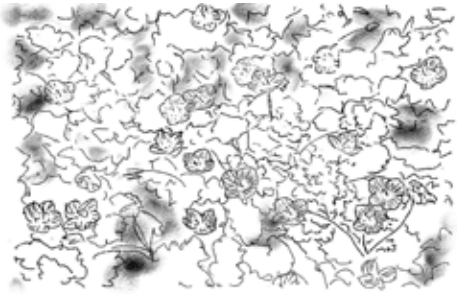
砕石を積んだ駐車場のもいつの間にか草花が

砕石だらけの駐車スペースで目につくのに地面を這うように広がり小さな白い花が咲く草がある。それが何かを見分けられる知識が無いのはもう何度も書いたことだ。「北海道の野の花」という図鑑を買って調べようとするのだがなんせ千百三十二種も収録されているので、そこから目的の草を探し出すのは至難の技だ。少しでも知識があれば何々に似ているということから絞り込むことができるのだろうが、それができないので一ページ目から順に探していくしか無い。大概は途中で挫折する。運が良く似たようなものに出会ったとしても、その前後には同じく似たような草が並んでいてなかなか特定できずに終わってしまう。私より妻の方が圧倒的に草花の名前を知っているのだが、いちいち聞くのも気がひけるというより聞いてふむふむとわかったような気になっても明日には忘れている。そんな時に出会ったのがスマホのソフトで、写真を撮ると瞬時に名前を教えてくれるという優れものだ。ソフトが特定した草花の名前を図鑑で再確認するのだが、最初のころはご愛嬌のような間違えが結構あった。それがAIを活用しているとのことなのかだんだん精度が上がって最近ではピタリと当ててくる。このソフトを頼りに腰を屈めて砕石の中から顔を出している草花をパシャパシャしながら見て歩くのは私でも楽しめる。

そのソフトによると先ほどの小さな白い花が咲く草はゲンノショウコという名前のようだ。ゲンノショウコは「現の証拠」と書くらしい。これは何かの事件と関係があるのかと図書館からまとめ借りをしてきた雑草図鑑六冊を頼り

ゲンノショウコ

に調べると、薬用に用いられる草で、すぐ効き目が現れるということからその名がついたとある。それがどうして現の証拠なのか今ひとつピンとこないのだがまあそういうことのようだ。おなじように地を這うように広がる草を見つけた。こちらは小さな黄色の丸いかたまりの周りに白い花びらのようなものが五枚ついていて可憐な趣だ。さっそくソフトに聞いてみるとなんとハキダメギクという名前だという。漢字にすると「掃溜菊」。図鑑を総合すると大正時代に渡来した帰化植物で花の黄色の丸いかたまりはそれ自体小さな花の集まりだという。そのせいか繁殖力が旺盛で一年で三、四世代まで子孫を広げるようだ。それにしても掃溜菊とはかわいそうなネーミングだ。図鑑によるとこの名前をつけたのは牧野富太郎だとある。牧野といえば「雑草という名の草はない。」という言葉を残し、その言葉が教育界などで個性尊重の代名詞のように使われているのだが。その人がゴミ捨て場に生えているのを見つけてつけた名前が掃溜菊では、名前がなかった方が良かったのではと思ってしまう。この牧野先生、ネーミングには独特のセンスがあるようで、我が家の畑の端っこに生えている春先に青い花を咲かせるのがあるが、それはオオイヌノフグリだと言う。ヨーロッパ原産の帰化植物だが、在来種はイヌノフグリと言い牧野先生のネーミングだそうだ。これはぷくっとした実が二個つくのだが、それを見て犬のタマタマに似ているということで名付けたと言うことだ。これも美しい青色の花からするともっと別のネーミングにしてあげて欲しかった。



ハキダメギク

雑草の名前は牧野流だけではなく変な名前のものがいろいろある。我が家の駐車スペースでよく目にする黄色の小さな花を咲かせているのはコメツブウマゴヤシという。コメツブは小さいという意味か。ヒメなになにという名前もよくあるがこれも小さいという意味のようだ。ウマゴヤシは馬が食べて肥えるということで名前にされたようだ。ヘクソカズラという名前をもらったのもいる。葉や実を揉むと臭いからといって屁と糞を重ねなくても良いものを。幸いうちの敷地では目にしていない。同じく目にしていないがその名前のインパクトに気持ちが持っていかれているのにママコノシリヌグイというのがある。スペード型の葉に小さな花が集まって咲く姿からは名前がイメージできないのだが、図鑑によると茎にトゲがたくさん生えていて痛いことから「この草で継子の尻を拭ったらさぞかし痛がるだろう」ということでつけられた名前とある。その説が本当だとしたらなんとおぞましいネーミングであることか。昔話には継子いじめ譚というジャンルがあるようなので、その流れだったのか。

名前だけからするとあまり出会いたくないものが続いたので、うちで見られるめでたい名前のものも紹介しよう。家の周りの園路の際で細長い茎に黄色の小さな花を点々とつけているのはキンミズヒキというようだ。紅白の水引に似ていることからミズヒキと名付けられたものに似ていて黄色の花をつけることから頭に金をつけてもらったのだ。金とくれば銀ということでギンランも。敷地斜面の日陰に白いぷくっとした花を茎の周りに沢山つける可憐な感じの花

ヨウシュヤマゴボウ

ビロードモウズイカ

ギンラン

だ。これは雑草というより山野草のグループというべきか。

雑草は本来植物が生存しにくいところで他の植物との競争を逃れるという独自の生存戦略で子孫をつなぐものという定義にもどって砕石だらけの駐車スペースをもう一度見てみよう。さっきは地面を這うように探していたが、そんなことをしなくても堂々と自己主張してるのがいくつもある。代表格はビロードモウズイカ。これも変な名前だが、全体が白い毛で覆われて手触りがビロードそのものなのだが、モウズイカはイカのような形をしているからではなく毛蕊花と書いて毛深い雄しべの意味だそうだ。春先は大きい葉をべたっと地面に広げた姿なのだがいつの間にか立派な茎が伸びその丈は私の身長より高くなる。黄色い花を茎にびっしりつけるので良く目につく。明治期に観賞用に導入され野草化したそうだが、文明開化にふさわしい新奇な植物として取り入れられたが、やはり日本人の感性に馴染めず野に放たれたということか。もうひとつモンスター系をあげるとすればヨウシュヤマゴボウか。やはり明治期に北アメリカからやってきたようで、ヨウシュは洋種の意味であちら産ということだ。背丈はやはり私と同じくらいになる。花は緑色の粒状の雌しべの周りを雄しべが囲んだだけで花弁はなくそれが房状になる。やがて緑色の実になり熟すと黒紫色になるので見かけブドウのようなのだが、図鑑には食べてはいけないとある。有毒なのだ。密やかに地を這うものから。でんと異様な姿を見せるモンスターまで野草の世界も多様で興味深い。

ワインのブドウを植えてみる

ここ竹山に暮らすことにしてから何かとお世話になっているMさんが、しきりと「石塚さん何か実のなる木など植えないのかい？」と言ってくれて、ご推薦のマルメロの木を植えたら、そろそろ実がなるかなという時にネズミにかじられて枯れてしまった話は以前に書いたと思う。その後もMさんは「植えないのかい」を連発してくるのだが、マルメロのトラウマが尾を引いてその気になれなかった。なんせブルーベリーなら良い苗を買ってくればその年から収穫を楽しめるが、桃栗三年柿八年ではないがそれなりの果実を得ようと思ったら、そもそも古希の私で間に合うのか。ということだ。それでも同じ年のMさんが、これから果樹園をつくるという構想をもっていろいろ育てているのを見ると、そう簡単に余生の可能性を自分で閉じてしまうのは勿体無い気もしてくる。

ちょうどそんな時に、コロナで中断していたブドウの苗木の頒布会が再開されるという情報を得た。ブドウの苗木はどこのホームセンターに行っても売っているのだが、その頒布会は北海道のワイン醸造の草分けで町立のワイナリーをもつI町が年に一度、一日だけ行うものなのだ。北海道では、比較的温暖なY町などをはじめワイナリーが急増しており、山梨、長野に次ぐ全国三位の数になっている。その草分け的存在のI町だが、冬の最低気温がマイナス二十八度を下回る年もあったほど寒さが厳しいというハンディがある。そのような土地でも育つワインを探し、品種改良を重ねる努力によって「十勝ワイン」というブランドをつくりあげたのだが、それでも課題があったのだ。どう

しても冬の間は棚から枝を下ろして雪の下で保温しないと凍ってしまうのだそうだ。そのたいへんな手間からブドウ栽培農家を救うために、さらなる品種改良を重ね生まれたのが「山幸（やまさち）」と「清舞（きよまい）」という品種だ。いずれも寒さに強い野生のヤマブドウを掛け合わせてつくった品種で、これだと棚をそのままにしても越冬できるのだそうだ。そして、その「山幸」は、国際認定機関によって日本固有種として三番目の品種登録をされるに至ったという。いわゆるピノ・ノワールとかカベルネソービニオンだとかの品種名と同等にヤマサチが認められたということのようだ。その「山幸」の苗が頒布会で入手できるのだ。これには大いに気が引かれた。

お隣でも食用の葡萄棚があるが、やはり冬になると枝を下ろさなければならないという。もし「山幸」や「清舞」を手に入れることができれば、枝を下ろさなくて済むのでブドウの生垣ができるのだ。これは、殺風景な我が家の砕石だらけの駐車スペースにもってこいだ。それにブドウは痩せた土地でも育つというメリットがある。大事なのは水はけだが駐車スペースは水はけを第一に砕石だらけにしたのだからうってつけと思われた。それに、苗を植えてから三年で収穫できるようになるというではないか。今のところそれまでは生きていることができそうな気がする。

そうと思い立ったら頒布会に向けて植える場所を決めて、植える穴を掘るなど準備をはじめなければならない。それが、また、大変だったのだ。

I町の役場のブドウの生垣

これまでも穴を掘る機会は数多くあったし、なんせ川と池を掘ったこともある。少々、石があってもそれをスコップで掘りあげることも慣れてきていた。ところが駐車スペースは砕石を一m近く積み上げたところで、とにかくスコップが刺さらない。たまたま妻の実家の物置を片付けた時に出てきたツルハシを興味本位でもらってきたのが役にたった。これが無ければブドウの生垣は諦めていたことだろう。

まず生垣の大きさを決めなければならないのだが、ブドウを植える間隔は二m。少なくても一・五mは必要ということだった。それに砕石を積んだところとそうでないところの高低差を行き来しやすいように駐車スペースの中間に階段をつくってしまっていたことから、確保できるのは必然的に六mというあまり長くない生垣に落ち着いた。幅は根をそこそこはれるスペースを確保するとなると六十cmということだった。深さは四十cm。体積にすると一・五㎥程度なのでたいしたことがないはずなのだが。

しっかり踏み固めた砕石を掘るのは容易ではない。まず、ツルハシを打ち込み固まった砕石をほぐしていく。それをスコップですくっていく。それを何度も何度も繰り返して穴にしていくという地道で力のいる作業だ。「ブドウの生垣、ブドウの生垣」と念仏のように唱えながらひたすらツルハシをふるいスコップですくっても、なかなか穴らしい深さになってこない。でも、こういう作業は塵も積もれば山となるの言葉通り、いつかは目標に達する。わたしが長

砕石だらけのところにブドウを植える穴を掘る

年かかわってきたまちづくりなどは、頑張ったとしても確実に一歩一歩進むということは殆どなかった。いろいろな要素が複雑に絡み合い、目指す目標に向かって努力はしても進んでいるのか、足踏みしているのか、はたまた後退してしまっているのかはっきりしないことも多くあった。それに比べると、その都度の成果は微々たるものだけれど、それを黙々と繰り返すことによって着実に目標に近づいてくるのを目にすることができるのは快感でもあった。体力的に半日作業を限度としたが、それでも一日五十㎝くらいの長さの穴が掘れる。二日で一m。休みも入れて一週間でなんとか目標の大きさの穴を掘りあげることができた。

つぎは、その穴に水はけの良い火山礫と、黒土と腐葉土を混ぜながら埋めもどす作業になる。腐葉土はホームセンターで買ってくればそれまでだが、なんせ敷地にはタダで積もっている落ち葉が膨大にある。それをかき集めて運んで埋める作業を繰り返す。掘るのもたいへんだけど、埋めもどすのも結構体力を使った。それでも雪が降るまでにはなんとかブドウの苗を植えられる環境が整ってきた。あとは、頒布会のある来春のゴールデンウィークを待つだけだ。

妻はブドウの生垣をつくるのにさほど反対はしなかったが、どうせ砕石だらけのところにブドウを植える穴を掘れるとは思っていなかったのかもしれない。それでも、「これで、我が家はお金がなくなってもお酒には不自由しないよ。」と、つまらん冗談を言って妻の気持ちが変わらないように祈っていた。

頒布会は朝からなので妻と前泊してのぞむことにした。晩飯は地元の牛肉に十勝ワイン五種飲み比べセットということで気分を盛り上げる。それにブドウの生垣の仕立て方を見ておくということで役場にある生垣の構造、スケールなどを実測したり写真に収めたりした。頒布会は九時からだけど八時半に行くともう人の列ができていた。苗は「山幸」「清舞」の他、「清見」の三種。事前にご近所さんと相談し、それぞれにブドウの生垣をつくってみようということになっていたので、それにきっかけをつくってくれたMさんへのプレゼントも加えて、「山幸」七株、「清舞」四株、「清見」一株をいただくことにした。

私が購入の順番を待っている間、妻は誰かと話している。どうも地元新聞の記者のようだ。ちょっと悪い予感がして購入後、話の輪に入ってみると記者曰く「奥さんから聞いたらワインを造られるんですって？」と。妻の気持ちをつなぎとめておくためのホラを真に受けて、それも新聞記者に話すなんて。あわてて、それは冗談で生垣用に購入して、もし収穫があれば生食でもいけるそうだし、ジュースやジャムにして良いかと思っていると訂正した。その後が気になって帰ってからしばらくしてその新聞のインターネット配信にアクセスすると「I町でブドウの頒布会に多くの方が来られて賑わう。遠くK市から来られた石塚さんは・・・」とあるではないか。その先を読むのは有料ということで気にはなったが、その先を読むのが怖くてなかったことにした。数年後に国税の方が無駄足を踏まないことを祈る。

夕暮れの風景を見ながらワインの飲み比べを堪能

苗は、ご近所やMさんにたいへん喜ばれ、さっそくそれぞれで植えて「三年後が楽しみだね。」と笑顔をかわした。七十過ぎの老人たちが、三年後が楽しみだと言い合うのも良いものだ。それからは、時々「散歩の途中」とか「元気にしてるかな」とかの理由をつけ、互いのブドウの生育を確認し一喜一憂することに。それでもMさんは我が家のブドウに大きな芋虫がいるのを見つけてくれたり、施肥のタイミングなどいろいろアドバイスをもらえて感謝している。秋になり剪定にも気を配りながら、ネズミやスカシバの幼虫などから苗を守りブドウの実がなるのを楽しみに待とう。

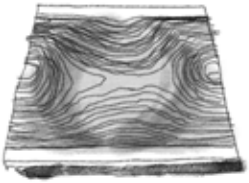
そうやって日々、ブドウの成長を観察していると、敷地のなかの見え方も違ってきた。そう、そこら中にヤマブドウが生えていたのだ。灯台下暗しというより、ブドウを見る「目」ができてきたという方が正しい。いままで笹藪の中に埋もれていたり、高い木に絡みついて地上からは気がつかなかったりしたのが見てわかるようになった。そのままでは勿体無いので、笹藪から引き出し支柱を立てて第二第三のブドウの生垣をつくった。あちこちにブドウの房状の花が咲いて、三年待たずに収穫が楽しめると期待された。ただ、だんだん様子がおかしくなりその花が枯れていくではないか。いろいろ調べたらヤマブドウには雄株と雌株があり、私が見つけたのは全部雄株で実がならないことがわかった。その落胆ぶりを見かねたのかMさんが高いハシゴを持ってきて高い木に絡みついた雌株を地上に下ろしてくれた。

無事苗を植えて支柱も

あるものでつくる楽しみ

地上に下ろしてもらった雌株にはブドウの実がいっぱいできた。ちょっと酸っぱく果肉も少ないけれど、得した気分になる。得した気分になるといえば、「山幸」と「清舞」の生垣をつくるのでホームセンターで支柱になるものをいろいろ探していたら、またMさんから「じゃまな木があって切ろうと思うけど支柱にうってつけなので使わない？」と言ってくれた。「エンジュ」という木でとても丈夫なのだそうだ。さっそく切るのを手伝いに行ってもらってきたらちょうど良いサイズで、それも年輪がきめ細かで見るからに丈夫そうな木だった。左右の支柱の高さを揃えるのに切ると独特の良い香りがした。それに年輪は丈夫なだけでなく美しい。これを薪にして燃やしてしまうのは勿体無いと思い。彫刻刀で小さな豆皿をつくってみたら、これがなかなか味があって良いのだ。それにおやつのクルミの実を潰してできた油を塗って見たら、油が木の組織に染み込み濃い飴色に染まり年輪もくっきり浮き上がってきた。自然に生えている木と、食器売り場に並ぶ木の器との間をつないで見たことがなかったが、こうやって自分の手で木を切り、彫って油で磨くということをしてみると、その木のことが身体の記憶として別の見え方がするということを体験した。

少し木の道具作りについて調べて見ると、イギリスや北欧などには「グリーン・ウッド・ワーク」というのがあることがわかってきた。生木加工とでもいうのだろうか。木を切って生木のうちに手斧や特殊なノミやナイフで削って器やスプーンなど日用品をつくるというものだ。動画配信サイトでその製作プロ



エンジュの木でつくった豆皿

セスを見ることができるのだが、海外のものはたいてい森に入って行くところから始まる。そしてテントを張り火をおこす。それから森の木や木の瘤などをノコで切って器などに加工していくというパターン。だから工芸品をつくるというより森の生活で必要なものをそこにあるものでつくるというもののようだ。だからじっくり時間をかけるというより、手斧でザクッザクッザクッといく感じである。そうして大抵が立派なヒゲを蓄えている人が製作にあたるというパターンも、自然の恵みを使わせていただく感を強めている気がする。

私には立派なヒゲもないし、森にこもって器づくりをする気もないが、手斧でザクッザクッザクッといく感じだけは気が引かれた。さっそくネットでその特殊なノミやナイフを取り寄せてみるとウクライナ製だった。木の加工に使える鋭い刃の手斧はスエーデン製だった。そして、もう少しあとになって手に入れた六センチm巾の大きな丸ノミはスイス製だった。やはり森と暮らすことの多かった地方の伝統を引いているのだろうか。

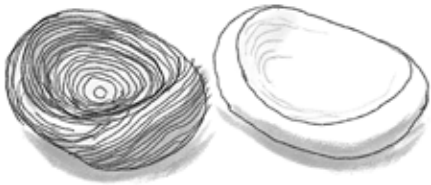
作業をするには、これらの刃物だけでなく、材料を固定する道具とかノミを打つ道具とかあるが、彼らの間ではそれらは手づくりするのが常道のようだ。私もそこから初めて見ることにした。少し太めの枝を手ごろな長さに切って握り手の部分を斧で削っていくと絵に描いたような棍棒ができた。固定する台は丸太を削って、その隙間に材料を置き、木のクサビを打ち込んで固定するようだ。これは手元にある端材をけずってつくってみた。

木工用に揃えた道具たち

手斧などを使った木の器の材料はシラカバを多く見る。我が家にもシラカバはたくさん生えているが、器づくりのためにシラカバを切ってしまうわけにはいかないと思っていいたら、お隣からチェーンソーの音が聞こえてきた。大風が吹いた時に倒れると危険なシラカバの上部を切るとのこと。ここでも神様は「やってみなさい」と言ってくれていると解釈し、切り終わった頃に訪ねてみた。結構まっすぐで節の少ないところをいくつか切ってもらうことができたので、さっそくつくってみることにした。

生木は確かに削りやすい。手斧も結構食い込むし鉛筆の先を削る時のように手斧をスライスさせても気持ちよく削れる。比較的細い枝を削って三十五センチmくらいの長いスプーンともしゃもじともつかないものをつくってみたが、自分でもここまでできるとは思っていなかったので、何だか楽しくなってしまった。次は、もう少し大きめのボールのような器ができないかと欲もでてくる。お隣からもらってきたシラカバの幹の部分は直径二十cmほどありイメージした器をトライするにはちょうど良いと思った。ここからは、せっかくなので製作工程を詳しく書いてみたい。とはいっても動画配信サイトのつまみ食いでやり始めて三ヶ月に満たないど素人で、まったくいい加減なものではある。それでも、誰かこの木を削って器をつくることの面白さに興味を持たれたらぜひ試していただきたいという思いで書かせていただく。

まず、当たり前だが出来上がるもののイメージを描く必要がある。円形な



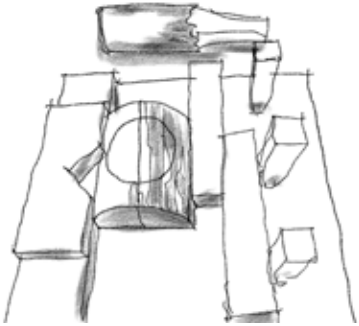
エンジュ（左）とシラカバ（右）の器

のか四角なのか、浅いのか深いのかなど大まかな形をイメージする。細かなところまで考えても良いのだけれど、最初はその通りにできるものでもない。削っては手にして眺めてここをもう少し削りたいとか、自分の手や目の感覚をとおして自分がつくりたいものが何なのかに近づいていく。そういうアプローチで良いと思うし、実際そうすることで自分が納得する形になってくるのが面白く感じるのだ。

おおまかな形のイメージができたら、それに近い塊をつくっていくのだが、その時に私がびっくりしたのは器の凹みを彫っていくのは年輪の中心を掘り下げるのではなく、木の表面から掘り下げるのだという。確かに木の年輪の中心は徐々に水を吸い上げる機能はなくなり死んだ組織として硬くなっていくのに対して、成長をつづける表面は柔らかく割れにくい柔らかさがある。その柔らかい表面から掘り下げるのだそうだ。そうするためには、まず木の表面を整える必要がある。木の皮を残すのもあると思うが乾燥して剥げ落ちやすいので一番外側は削っておく。それから、表面から必要な器の深さのところで割る必要がある。私は割る場所を決めたらそこにナタをあて、自分で作った棍棒で叩いて割っている。まっすぐ均等に成長していれば良いがそうでなければ斜めに割れることがあるのであまりギリギリを狙わないほうが良いかもしれない。それから、器の幅に合わせて前後左右を切り落としていくのだが、その前に掘り下げる部分の大きさと縁の厚さを決めなければならない。

もし円形に彫り込んだ器をイメージしたのなら、そこらにある瓶の蓋でもなんでも良いのでそのイメージの大きさのものを探してきて、それを型紙にすると良い。コンパスを使って直接鉛筆などで書いても良いのだけれど、何か形のあるものを使うと自分のイメージにあった大きさかどうか確かめながら進めることができる。次にその周りに縁になる形を書いてそれが収まるように前後左右を切っていく。前後は年輪と直角方向に切る必要があるのでノコが良い。左右は木の繊維方向なのでナタで割っていくことができる。そうするとイメージした器の塊ができてくる。そこまでできれば、断面方向の形のイメージも木に書いておこう。徐々に底に向かって小さくするのか、凹みのエッジから縁にかけて一旦膨らませてから小さくするのか、寸胴のままにするのかなどだ。そこまで木に描いてくると早く削ってみたくなる。

削るのは先に書いたように器のメインの凹みからだ。先に周りを削ってしまうと器の凹みを力を入れて掘り下げる時に器がグラグラしないように固定できなくなってしまう。まだ周りが四角い箱のような状態だとしっかり作業台に固定することができる。端材でつくった固定台は両側に厚めの板を止めたもので、その隙間に器を入れ隙間を木でつくったクサビを打ち込んでがっちり固定する。そうやって固定してから描いた形に掘り下げていくのだが、それは手斧ではできない。私が使っているのは長く曲がった丸ノミだ。使い方にはちょっとコツがあって深く突いてしまうと木に食い込んだままになってしまう。出だ



器の形に手斧で削っていく

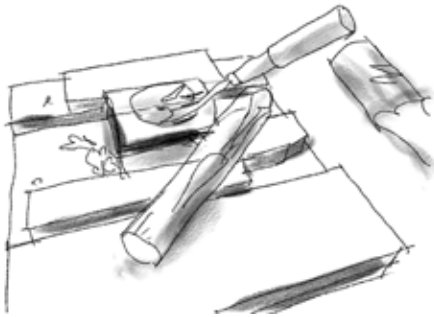
まず器のくぼみを掘る

材料を固定して

しはノミを立てて力を入れて突いても途中からしゃくるように削り切るようにする。もし、食い込んでしまったら一旦抜いて反対側から突いてしゃくるようにして削り取るとリカバリーできる。それを下図に沿って目標とする深さまで繰り返す。出来るだけ凸凹や彫り込むカーブが不揃いにならないように丁寧にしておくとあとが楽になる。

器の凹みができたら今度は外側だ。ここは手斧を使う。丸太を立てて台にすると良い。四角い木を丸く整形にしていく時は、闇雲に斧を振り下ろすより、角をねらっていくとやりやすい。それも少し木を斜めにして振り下ろす。角を下から順に削り落としていく感じか。角を削り落とすと新しく二つの角ができるので、それらの角をまた削り落としていく。それを繰り返していくと徐々に形ができてくる。時々、手にとって撫で回してみると形の歪みなど把握できるし、愛おしさも増してくる。細かに削りたい時とはナイフを使う。斧もナイフも怪我に注意しなければいけないが、私はそれらの先に自分の手足が位置していなければ刃は当たらないという理屈でやっている。あと大切なのは刃を切れるようにきちんと研いだ状態にしておくということ。これは今の私のレベルでは語る自信がないので割愛する。

この作業を丁寧にしていくとそれだけで器ができる。もちろんノミ跡とか斧で削った跡がある状態だが、それはそれで味がある。もう少しつるっとした仕上がりにしたい場合は磨いていくことになる。



器の仕上げに磨くか磨かないかは難しいところである。最初は磨いた時の完成度や手触りなど我ながらここまでできるようになったのかと感動したものだ。それはそれで磨く価値がある。ただ、そうすると製品に近いものになっていく。それが面白くないという気持ちも湧いてくる。かと言って荒削りのままで雑なだけの器に見えるのはいやだ。そんなジレンマがある。

さて、磨くとして使うのは紙やすりだ。丁寧に彫っていれば紙やすりの荒いのから細かなのまで順番に磨いていけば良い。私は八十番、百二十番、二百四十番、最後の六百番をよく使う。最後の磨きを終えた時の肌触りはすべすべとして気持ちが良いものになる。ちょっと掘りがいびつで修正をしたいという時は奥の手でグラインダーに円盤型の紙やすりをつけて磨くと、いとも簡単に削れて微妙な形の調整ができてしまう。いい加減に削ってグラインダーで強引に整形していくというのでも結構それらしくなる。そうするかどうかは、作る人が何をしたいかによる。グラインダー用の紙やすりはホームセンターに行けばいろいろ置いているが、私が使っているのは百均のそれだ。私のレベルではそれで十分。ただ、器の凹みを磨こうとすると円盤の淵まで丸く紙やすりを回したものが必要になり、それは百均にはない。

掘りや磨きが終わったらあとは塗装である。一番おすすめなのは先に書いたクルミ油か。大量に使う場合は食料品店に行って食用のクルミ油を買うのが良い。仮に挫折して油が残っても料理に使えば無駄にならない。器にぬっても

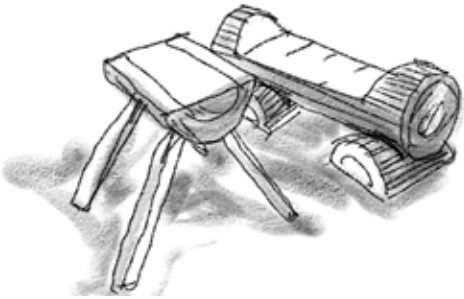
食用油なので安心して使える。ただ、水気のものを入れて完成時の状態を維持したいとなると漆を塗る必要がある。それはハードルが高いのでウレタン塗装や最近ではガラス塗料というものもあるようだ。食器に使っても安全基準を満たしていると表示しているが、素人で塗装後の乾燥を完璧にできるかどうかという問題があるのでどうか。あと、塗装をするとクルミ油でも色がつく。始めてシラカバで器をつくったときに、その柔らかな手触りの白肌に驚いたのだが、油を塗るとそれが苦労を重ねた肌合いに変わっていく。それはそれで暖かな味わいがあるので比較してどちらが良いというものではないのだが。

できあがったシラカバの器を見ているうちに、この竹山に生えているいろいろな雑木で同じ形の器をつくってみたくなった。それをMさんに言ったらさっそく「うちでハウスを建てるのに邪魔になる木があるのでおいでよ。」ということになった。切って運ぶのを手伝っていただいたのが、エンジュの太い部分、ホウノキ、サクラ。それに我が家の薪にしようと思っていたナラを加えると四種。つくってみるとそれぞれに掘り具合や木肌、塗装した後の色などまったく違って面白い。追加でご近所から太いイチイの丸太をもらったし、薪にするつもりの丸太でトドマツとヤチダモがある。そのうちどこかで切る木もあるだろうから、竹山の雑木シリーズはしばらく続けてみようと思う。

そんなことをしていると古巣の事務所のスタッフに話したら、欲しいという声があがった。

前につくっていたエンジュのスプーンが良いということで、いくらで手に入れたいかという話になってきた。私のつくったものを褒めるつもりで金銭価値に置き換えるとということだと思うのだが。最初、一六八〇円からはじまり最後は、これでどうだという感じで二〇二二円。これが私が一日かけてつくったものの対価かと思うと出来の良し悪しはともかく複雑な気持ちになる。確かにネットでは木の皿が数百円で売っているし、百均には百円の木の皿がある。木工芸の工房でつくったものでもなかなか一万円を超えるのはない。最低賃金が千円を超える時代にものづくりの手仕事の金銭的評価は低すぎないかと思ってしまう。私のをもっと高く買えという言っているわけではない。念のため。そのかわり事務所のスタッフには、欲しいものをリクエストしてもらえたら私なりにつくってプレゼントするということを始めた。今までオーダーをいただいてつくったのが酒のアテを盛る器、キャンプの時に箸置きがわりになる器、そして竹山雑木シリースで荒削りのままの器の三種。スタッフの顔を思い浮かべながらコンコン木を削っているのは良い時間だ。そこらに生えている木を事情があって切らなければならないときに、それを親しい人に渡せる器にしていくのは意味のあることに思える。

あるものでつくるといえば、以前にトライした池を掘る時に出てきた粘土で器をつくりピザ窯で焼くというのもそうだった。温度の限界があって釉までは行き着かなかったけれど素焼きでは良い味を出していた。こちらも、機会を



木の杭で階段をつくる

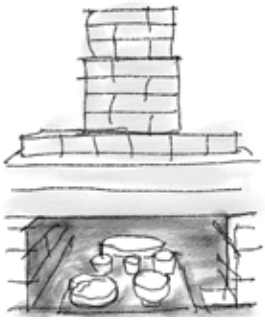
ピザ釜を改造して粘土の器を焼く

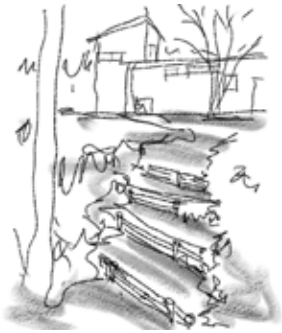
丸太でつくった椅子とテーブル

見つけてまたやってみたいと思っている。

器ではないが、これまでも敷地の段差を行き来しやすするための階段を、木の枝の先を尖らせて杭として使い、枝を束にしたものを土止めとして使ってつくったことがある、年月が経つと腐ってきたりするが、それはそれで土に帰るものだし新たに杭を打てば使い続けられる。敷地の斜面に降り積もる落ち葉が水路に溜まるのを少しでも少なくし、腐葉土もできる一挙両得の落ち葉受けも毎年大量にでる枝をつかってつくってみた。これは機能的でもあるし、景色としても悪くない。

そういえば、水はけの悪い土地に畑をつくるにあたって採用したレイズドベットもヤナギの枝や密集して生えてしまったヤチダモの幼い木を使ってつくっていた。そこにあるものを工夫して使いながら生活に必要なものを得るのは、それ自体楽しい。なんせ子どもの頃熱中した工作がし放題なのだから。そして不要になれば土に還ったり、少し乾燥させて薪として燃料にすることもできる。薪を燃やしてできる灰も土づくりには役に立ち、やがて草花や木々を育てる一助になる。このような循環は頭では理解していたけれど、実際に手を動かして体感するとその大きな循環のひとつに自分もいるような気がしてくる。これは日本で言えば五、六十年前には身近に体験できたことなのだと思う。なにもその時代に戻ろうと言うつもりはないが、その感覚をどこかで保ち続けることがこれからを考えると大切なのではないか。そう思う。





炊事当番

あるものでつくる楽しみといえば、料理をするのもそうだ。実は、二年半ほど前から我が家の炊事当番をやっている。金土日の三日間、朝昼晩の三食を私がつくっている。この話題は同年代の男性たちにはすこぶる評判が悪い。「奥さんの点数取りはやめてほしい。」とか「カミさんから、あんたも見習ったらとか言われいい迷惑だ。」とか、なかには「俺は昔の人間だからできないね。」とか言い出すものもいる。私は決して、妻の機嫌をとったり男女平等を実践するという理念で炊事当番をやり始めたわけではない。

ここ竹山で暮らしていると、一日は慌ただしく過ぎていく。大きな仕事があるわけでないが、薪を焚き付けに割ったりしてストーブに火を入れ、雪が積もって入れば雪かきをする。今日はどんな鳥たちが来てくれているのか眺めながら餌台に餌を足す。春であれば敷地のなかに会えている山菜を取りに行く、夏になれば畑の野菜の収穫もある。ちょっと園路伝いに敷地を回りながら植物の変化を見て回ればそれだけで時間が過ぎて行く。必要であれば園路の草刈りもあるし、枯れた枝を集めて束ねて使えるようにしておく。散歩ついでにご近所さんと立ち話をしていたりするとだんだん日が傾いてくる。そして一日の終わりを迎える時に良い日だったなと思い返すのは、温かい食事に舌つづみを打つ時なのだ。何があっても、一日の終わりに美味しいご飯を食べることができることで、良い一日を過ごせたという実感を得ることができる。ここでは、そういう気がするのだ。

妻は、自分でやっていた建築設計事務所をたたんだあと、長年やりたかったことということで調理師専門学校に通うことになった。一年コースだったが卒業すると調理師免許を手に入れることができる。それで店を開業するとかいうことではなく、嫌いではなかった料理を基礎からきちんと身につけてみたかったということのようだ。学校では当然、調理実習というのがあるのだが、大根の桂剥きが課題になると毎日大根が食卓にのぼる。鳥の唐揚げという課題もあった。毎日鳥の唐揚げというのもどうかと思うが、まじめに作ってあるので美味しくついつい食べてしまう。まあ、いろいろなことがあったがなんとか無事卒業ができ、おかげで私は美味しいご飯に毎日ありつけることになった。

その後しばらくして竹山での暮らしが始まるのだが、さっき書いたように一日の終わりに美味しいご飯をいただけるのは妻の調理師専門学校通いが効いているのだ。何がどういう巡り合わせで意味をもつのか不思議なものである。あらためて食事ということを考えると、年をとって終わりに近づいて何がありがたいと思うか、何をもって今日も良い一日を無事に過ごせたと思えるのかを考えると、それは美味しい食事につきるのではないかと思う。

年をとって身体を悪くして病院の栄養だけのご飯だったり、そうでなくてもコンビニの総菜や弁当の宅配サービスに頼るようになったら、この充実感はおそらく失われるだろう。もし、妻がご飯をつくるのが大変だと思う時にでも、代わりに私が美味しいご飯をつくれるようになりたい。それが理由だった。

1日の終わりの美味しい食事に勝るものはない

ただ、私のそういった思いが金土日の炊事当番として実現するのは、そう簡単な道のりではなかった。私はこれまで、まったく料理をしたことがなかったわけではなく正月のおせちの何品かをつくるということを数年やってきたので、私も晩御飯をつくると言い出してもそう無茶苦茶なものはつくらないと認めてもらえると思っていた。ただ、なかなか台所の使用許可が出なかった。「あなたも自分の仕事部屋を誰かにそこにあるもの何でも使って自由にやって良いよとはならないでしょ。」という話だが、要はつくった結果ではなく、そのプロセスが信用できるまでに至ってないということか。それは信用してよという言葉では説得力がない。よく「男の料理」とか言うものを見ると高価あるいは普段あまり使わない食材を買い揃えてじっくり時間をかけて凝った料理をつくるものがある。そりゃ結果は美味しい料理ができるはずだが、使いかけの使わない食材が残り、ありったけの鍋釜を使い積み上げたままオサラバされたら台所の管理者はたまったものではない。そうはならないというのを証明しなければならないが、そのためには使わせてもらわなければならないという堂々巡りになる。そんなこんなで台所を使うのは諦めた。

たまたま我が家には土間があり簡単なものではあるが流しもある。それに何と言ってもオーブン付きの薪ストーブがある。ここを私の拠点とすることにした。それも急に晩飯を競うようにつくってはダメで妻が手を出さないけれどあると嬉しいものをつくるという戦略をたてた。スイーツをつくるということ

桜餅２種

レモンケーキ

だ。オーブンも活用できる。最初はクッキーから徐々にいろいろなケーキに幅を広げていった。この作戦は見事あたって笑顔で受け入れられた。そうこうするうちに私自身がケーキづくりに飽きて来て和菓子に転向した。これも小豆の本場である北海道には、おいしい餡を売ってくれる店があり、それを使うとかなりいけることがわかった。和洋のスイーツぜめにはさすがに「よくそこまで作れるわね」と感嘆の言葉を引き出すことができた。

時を同じくして妻が母親の面倒を見に時々A市まで行くようになり、疲れて帰ってからご飯をつくるのは大変だろうから私がつくっても良いよと、相手の弱みにつけ込んでという訳ではなく、そう言う時のために美味しい料理をつくれるようになりたいということだったので快諾をもらったときには嬉しかった。季節的に温かいもの、そしてお腹に負担にならない優しいものということでいろいろ考え、とても満足していただけた。ここまで来れば免許皆伝というかお店開店といけるかと思ったら、まだ、そうはならなかった。

ピンポイントで「今日の晩御飯は私がつくる」と言われても家の料理は流れでつくっていかなければならないので、かえって大変になるんじゃないかというのだ。「流れ」って何だよと思ったけれど、そこはやんわりと聞きだすと、買った素材はその日に使いきれないものも多く、作り置きになるものもあるので、次の日、その次の日をどうするかもある程度想定して「流れ」で回さなければならないのだとのこと。

そこで生まれたのが炊事当番制。月火水木は妻が、金土日は私が担当するということになった。金土日の三日間、朝昼晩をつくるなどというのは考えていなかったが、このチャンスを逃すと料理番はできないと腹をくくってチャレンジすることにした。一番最初は二〇二〇年の六月六日のお昼ご飯。薪ストーブで焼いたパンにわさび菜をのせソーゼージとベーコンそれにオリーブ入りマヨネーズがけだった。今から見ると随分力が入っているな。晩御飯は豚ロースの豚丼にポテトサラダ。そんな感じで始めて二年半。

最初は妻が持っていた料理本を頼りにしていたが、どうも私の技量にはあわないのでもっぱらネットのレシピに頼っていた。しかし、ネットのレシピもピンキリで見極めが必要なのだが載っている写真を頼るしかない。それでも美味しそうに思えるものは美味しいのだ。ただ、豚肉を使った料理をしたいと思って検索すると膨大なレシピがあり、なかなか決めきらなくなってしまう。そこで信用できる、といってもマスコミでよく目にするということだが、「人」に着目してその人のレシピから探すということもやってみた。それだと今度は狙った素材のレシピがない場合があり、またあちこち探すことになる。レシピを探すだけで疲れてしまっては元も子もない。最後に行き着いたのはメインの素材だけでなく冷蔵庫にあるそれも賞味期限の近いあるいは過ぎた食材を複数選び、複数キーワードで検索する方法だ。こんな組み合わせの料理は絶対ないよなと思うものでも必ずレシピはある。それだと決断は早くできる。あとは図

書館の活用だ。レシピ本など買い始めるときりが無いが図書館には山のようにあり無料で借りて読める。外れても後悔はしない。そうやって探して、作ってを重ねていくと、見極めも早くなる。これは美味しそうだというものと、これならあるもので簡単にできそうだというものが見えて来る。最初は、この簡単にできそうだというのがわからず時間と手順の複雑さに泣きそうになることもあったが、今はそんなものに手を出さないのでかなり余裕でつくれるようになった。そうしてわかったことがいくつかある。

ひとつは妻のいう「流れ」だ。金土日、朝昼晩、一日一日が完結することはまれで、晩御飯は朝御飯にかぶってくるし、場合によっては昼にもかぶって来る。ただ、同じものをだすのではなく冷蔵庫にあるものを加えて違う料理に仕立てていく。そうしてくうちに金曜日に買った素材が日曜日にはあらかた無くなっている。あるいは作り置き的なものを妻に託すという流れができると二人の台所は上手く回るし、もっともいやなフードロスが生じない。家庭料理は、この「流れ」を意識することが大切だと実感することができた。

二つ目は、妻の「今日の○○は美味しい」の一言が嬉しいという感覚だ。私自身を振り返ってみると「美味しい？」と聞かれて「美味しいよ」と言うことは何度もあったが、「美味しい」を先出しすることはそうなかったかもしれない。互いに「美味しい」を先出しすることが、食事自体をどんどん美味しくしていくスパイスだと気が付いたことで食卓が豊かになっていく。

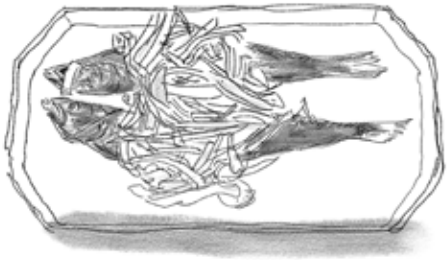
パンを焼き最初のサンドイッチ

マスのソテーにきのこを添えて

黒酢酢豚をチンゲンサイにのせて

そして、次に気が付いたのは「そこにあるものでつくる楽しみ」だ。やはり敷地に生える山菜をいただくのは季節を運んでくれるし、独特の味と香りは変えがたい。思わず天ぷらにはまってしまって、随分気軽に油物をやれるようになった。自分で上手くあげられた山菜をアテに酒を飲むのは、一日の終わりにふさわしい充実感がある。それに畑に植えたハーブもなかなか良い。朝御飯をつくっていて、ちょっと彩が足りないとか、味がボケているという時に、土間の台所からつっかけで外に出てオレガノとかバジルとかパクチーをちぎってきて加えるなんてことができるのは贅沢だと思う。肉は固まりで買うことが多いのだが、ミンチにしてセージを加えるとか、ローストにローズマリーを添えるとかそれだけでご馳走になる。そんな楽しみも一歩外に出れば手に入る。

それにご近所からおすそ分けいただくものは、みな、一番美味しい時を知っているからスーパーで買って来るものとは別ものに近い。それを料理するだけで腕が上がったような気になれる。農家さんが持ち寄る直売所も魅力だ。直売所に行って今日の晩御飯が決まることも度々ある。それに行きつけのスーパーには魚屋が入っていて、北海道内各地の漁港から来た新鮮な魚を丸っと売っている。目が透き通って身体が黒いイカを買って来て刺身にし、げそなどを肝といっしょにゴロ焼きにしたりするともうたまりません。刺身のパックを買ってくるのではなく経木に包んでくれた魚を自分で捌いて食べるということを経験できたのは幸せだ。肉は歩いていけるところにエゾシカ肉専門店がある。食肉



パエリアもどき

ルーローファン

シシャモの唐揚げの甘酢かけ

加工場も持っていて自分で狩猟もするという一貫した管理体制が敷かれていて臭みのない「美味い」と言いたくなる肉が手に入るのだ。いろいろな部位を売っているのでロースト、煮込みなどバリエーションを楽しめる。

流通時間を最小限にした新鮮さを食べるという贅沢を実感をもって知ることができたのも、自分で料理をするようになって得られた感覚だ。地産地消は地域経済にとっても環境的も良いことであるが、それを頭でとらえるのではなく胃袋でとらえるべきだ。と思ってしまう。

もうひとつ。自分で作ると調理の途中で味わう楽しみが加わる。つまみ食いということではなく、調理が上手く進み素材に熱が加わることによって立ち上がってくる香りと、色艶などを味わえるのは料理人の特権だと思う。

こんな楽しみを今まで味わってこなかったのは勿体無かったなと思ったが、それは自分勝手な思いであることに気が付いた。ついこの前めずらしく朝からリモートでのお話や会議が夕方まで続いたことがあった。あいにくその日は炊事当番だったのだが、妻の臨時交代の申し出を断って合間をぬって朝昼晩をつくることにした。朝は八時半から開始だったので早起きしてささっとコーヒーと朝食を準備して、それから四時間お話をしたら次の会議は一時間後。急いで時短のそうめんにきのこの卵とじをつくって自分も食べたらもう時間になる。それから三時間半の会議。ヘトヘトになりながら晩御飯は手抜きの豚汁定食。こんなことを妻は四十年近くやってきたことにようやく気がついた。

老いを生きる

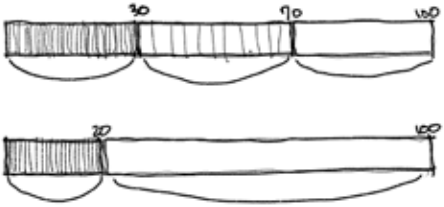
炊事当番の初日のレシピを紹介したので、そんなことまで記憶しているかと驚かれたかもしれないが、この二年半、金土日の三食のレシピをずっと書き留めてあるのだ。沢村貞子が二十六年半、毎日の献立を記録した「献立日記」を書かれていたのを知って真似をしたのだが、ちょっとサボると金曜日は何をつくったか思い出せない、なんてことがままある。そればかりか昨日の日曜の朝食に何をつくったのかさえ思い出せないことがある。

思い出せないといえば、漢字もそうだし人の名前もだ。固有名詞はアレアレで済ませているが、通じているのかどうか。そういう昔固定されたものが薄れていくだけではない。書斎らしきものを我が家の二階にいただいているのだが、思い立って階段を足早に降りて、ふと、何のために二階から降りて来たのかを自問することがある。やれやれだ。人に迷惑をかけないようにと、スケジュールはデジタルと食卓の壁のアナログと両方で管理している。それでもどちらかに書けばそれで終わった気になって、別の方で確認したときに抜け落ちるということも長い間にはある。困ったことである。

振り返れば、年を取ったなと感じる節目がいろいろある。最初に感じたのは六十になった時だったか。以前のように徹夜ができなくなったのが意外とショックだった。まあ、あまり無理をしないことだなと言い聞かせていたが、六十五の引退の年になると少し体力に自信が無くなった。それまでは一日中まちを歩き回ってもまだ夜飲み歩くことができたが、その頃になると半日歩き回

れば疲れるようになってきた。それからは、一年一年が年を刻むように衰えを感じるようになって、七十でいよいよ頭にも霧がかかってきたということだ。

釈迦が悟りを必要とする思い通りにならぬ苦しみのひとつに老いることをあげているが、苦しみとはあまり思わないが確かに思い通りにならないことではある。そう思って争うことなく老いに従えば良いのであるが、今まで当たり前のようにできていたことが出来なくなるのは辛いものがある。我が国の男七十歳の平均余命は現在十六年ちょっとなので、その間老いがどんどん加速していくと思うと明るい気持ちにはなれない。一方で人生百年時代と言われ現実に長寿の方が多くいることを考えると十六年では済まないかもしれない。仮に百歳大往生とするとこれから三十年もある。三十年といえば、生まれてから事務所を友人と立ち上げ自分の道を開くことを決めるまでであり、がむしゃらに仕事をして次の世代にバトンをタッチすることを決めるまでである。それらと比較しこれからを人生を畳むために残された三十年と考えるとあまりに長い。今まで当たり前のように出来ていたことが一年一年できなくなるのを自覚することで過ぎる三十年はあまりに長く辛い。そう思ってしまう。人生百年時代をどう生きるかは、老人だけの問題ではない。二十歳そこそこの若者がこの先の八十年という時間をどのように生きるかという、考えただけでも息苦しいテーマを抱えることになる。私が二十歳の時の平均余命は七十二歳までだったので私の今に近い。それならあまり悩むこともなかったかもしれないのだが。



人生１００年時代の一生尺度

視点を変えて竹山に暮らしてこの間を振り返ると、今まで当たり前のように出来ていたことで出来なくなって来たことはいろいろあるが、一方でこれまで一切やったことがなかったことでできるようになったこともいっぱいある。

太い丸太をチェーンソーで切ってそれを重い斧を使って薪にし、木熊に仕立てて家の暖にするなどということを自分でやろうとは思ってもいなかった。

自分で沢水を引いて川をつくり池を掘るとは思っていなかったし、そんなことを自分ができるとも考えたことがなかった。

こんなに多くの鳥と出会うことは今までなかったし、パッと見て名前が言えるようになるとは思っていなかった。

植物もそうだ。恥ずかしながら木の種類を見分け名前をいえたのは片手ちょっとだったかもしれない。それが今では、他人に木の見分け方をもっともらしく語る自分に驚く。

季節の変化を見る目も大きく変わった。単に気温や雨や雪の状態からだけでなく、身の回りの全ての環境が太陽の周りを回る地球の状態に呼応しながら刻々と姿を変えていくのを見ながら感じることができる気がしている。

雪の上に残された足跡を見ながら昨夜誰が訪れたのか想像する楽しみもできた。

草花についてはまだまだだが、知らない道を歩くときにも関心を持つ視線がぐっと低くなった。

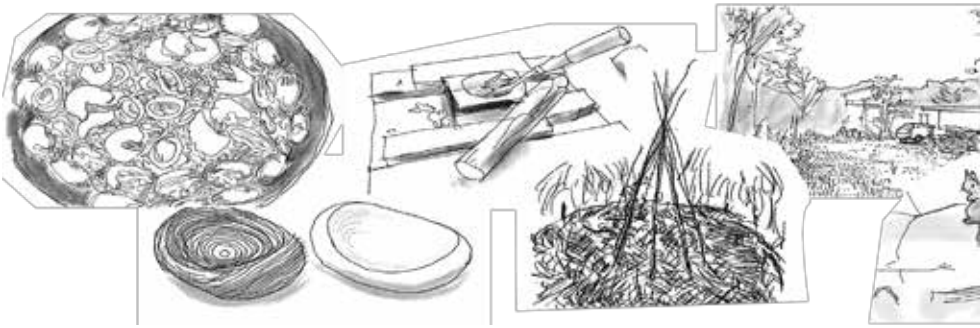
また、自分でレイズドベットをつくり畑らしきものをつくることも初めてだった。

そこで育った野菜やハーブなどを使って自分で料理をする楽しみも味わうことができた。

切った木で器を彫り親しい人に手渡すことも自分がやるとは思っていなかったし、それを通じて木のことを五感で感じる体験もできた。

何より、日々、生活に必要なことをやることで充実した時間を過ごすことができ、大げさかもしれないが生きていることを感じることができる時が持てるようになった。

これらは、五年ほど前には想像もしていなかったことで、ここ竹山に来て初めて体験したことばかりだ。今から振り返っても不思議な五年間である。これがもし。もしこうだったらという想像をするのは不毛なことではあるのだが、もしあのままS市のまちなかのマンションに暮らしていたらどうなっていたのであろう。おそらく、なんだかんだ言って仕事に首をつっこみ、次世代の人たちの足を引っ張っていたであろう。そうすることでその道で経験豊富な自分だからできたと自負し自分を支えていたかもしれない。新型コロナによる行動制限は、外界との限られた人と人の繋がりさえ絶たれ、引きこもりを余儀なくされていたかもしれない。それは、ここでの竹山ごもりとは意味が全然違うものになっていたのは間違いない。



そう考えると、これまでの六、七十年を一旦リセットして新たな自分の可能性を探求してみるのも悪くない。目の前にチラチラする偶然の誘いに思い切って乗ってみることで新しい自分や、新しい生き方に出会えるかもしれない。そう考えると、二十歳の若者も現在の選択が一生の選択であり、現在の自分が一生そのままの自分と考えずに、節目節目で違う自分を試すことができる時間をたっぷり持っていると考えられれば素敵ではないか。

とは言っても、老いが人の迷惑になるのはできるだけ避けたい。妻の母が高齢になって戸建て住宅に独り住まいを続けるのが難しくなったので家を畳むことにした。その手伝いに行ってその家財道具と衣服の類の多さにいささかびっくりした。半世紀以上の家族の生活の歴史がそれらには込められていて、なかなか処分ができずに屋根裏の片隅に眠っていたものも多い。子供らがそれらの片付けに行くのだが、なかなか捗らないようだった。自分たちの知らない家族史の痕跡などはどうして良いのか途方にくれるという。また、自分たちに関わるものもそのまま廃棄するのを躊躇する。そうこうしているうちに時間だけが経つという具合だ。私はそのような繋がりがないことを良いことにどんどん仕分けをするのだが、それでもこれはどうしたものかというものに度々出会う。私たちには、そのような悩みを預ける子供達がいないが、それでも最後にたたみやすい状況にしておくのが老いの務めかとその時思った。

書籍の類は竹山に居を移す際にかなり処分したが、写真や書類はいちいち

目を通していると余生を全てそれに費やすのではないかという気になってしまう。書類は余程のものでないと捨てると決めたがそれでも半端な量ではなかった。写真は何が写っているかわからないネガもあり、とりあえずデジタル化して現物は処分と決めたが、これは作業が途中で挫折したままになっている。

そればかりではない。記憶が怪しくなってくると家や身の回りに関しての様々な書類がどうなっているか、改めて把握し直して不要なものは破棄の手続きをして、重複するものは統合していかないといけない。最近は、それらにIDだのパスワードなどがからんで記憶はもとより、記録の記憶も怪しくなって破棄や統合の手続きが厄介なことになる。

それら一連の面倒なたたむ事業を促しナビゲートするためのものとして「エンディングノート」というのがある。ネーミングは九十歳くらいに書くのであれば確かにそういうことかなとも思うが、そんなときに書いても意味がない。書くとしてそれはおそらく六十五から七十くらい。私の年代だ。そのときに書くのが「エンディングノート」では切ないし、私自身を振り返るとエンディングどころかスターティングだったりすることが多かった訳だから、人生百年時代のもう一コマか二コマに向けて生き生きとダッシュする背中を押してくれるネーミングであって欲しい。そうボヤいたら、古巣のスタッフのKさんが「ネクストステージノート」という素敵なタイトルを考えてくれた。そうだよ。そうこなくちゃ。

デジタル化してもきりがない

酒と温泉の日々

老いを生きるにあたって、今まで当たり前のように出来ていたことで出来なくなって来たことを悔やむのではなく、これまでやったことがなかったことで、できるようになったこと、やりたいことに目を向けるとしたところで、次は「酒と温泉の日々」とくるのはあまりに能天気か。

ここはポツンと一軒家ではないと以前に書いたが、実は、それどころか隣は温泉旅館なのだ。家の目の前には露天風呂があり、鬱蒼とした木々に囲まれているので見えこそしないが、風呂に浸かる時の「はぁーあーー」という極楽浄土からの声のようなものが聞こえてくる。そういう距離感だ。温泉は源泉掛け流しではないが、天然温泉で泉質は単純泉とあるが、茶色が特徴のモール泉で身体は温まるし肌はつるつるになる良い温泉だ。それに、食堂も充実していて宿泊もできる。事務所のスタッフが大挙して来てくれたときは、この温泉に泊まってもらった。炊事当番制が定着してしばらくして、私が金土日で妻が月火水木だと不公平とまでは言わないが、木曜日を「温泉の日」と決めて、その日の晩御飯は温泉の食堂でいただくということにした。湯上りの生ビールをぐいっとやるという楽しみがまた増えた。食事もそう品数が多いという訳ではないが丁寧につくられていて美味しい。冬場限定の鍋焼きうどんは妻と私のお気に入りだ。我が家に遠くからわざわざおいでいただいた際は、タオル片手に温泉に行きこの温泉オススメのジンギスカンを食べていただくというコースもある。昔ながらのスタイルのジンギスカンだが味は美味しい。とにかく、毎週温

隣の露天風呂

泉ざんまい、それもお隣でというのは贅沢至極。一足先に極楽極楽。

露天風呂の少しぬるい湯にゆったり時間をかけて浸りながら、人生百年時代と歴史というまあ温泉にでもつからないと思いもしないことをつらつら考えてみた。湯は江戸時代に日常生活の一コマになっていたという。江戸時代ははるか昔のことであるのだが、私の経験してきた七十年間という時の長さを時間尺度とすると、その尺度で五回遡ると江戸文化が花開く頃になるのだ。。十回繰り返すと鎌倉時代の終わり頃になる。さらにもう十回繰り返すと大化の改新まで遡ることになる。人生百年を時間尺度とすると二十回遡ると弥生時代になってしまう。一人の人の人生は、歴史の流れのなかではほんの砂つぶみたいなものではあるのだが、人生百年時代ともなってしまうと、その間一定の空間を占め、それだけ長い時間、人や環境との関わりを持ち続けることになる。砂つぶとは言いながら人が一生をどのように生きるのかということの総体が歴史であり。その歴史の変化に否が応でも責任の小さな一旦を担うということでもあるような気がしてくる。ちょっと長湯でのぼせたみたいだ。

酒と温泉の日々ということで、酒の話もしよう。我が家は二人とも酒好きだ。食が細くなり、温泉の日以外はめったに外食をしないので、食費のかなりの割合は酒なのだ。酒の種類は雑食系なのだが、その時々のブームもある。ちょっとフランス旅行をしたらキールとパスティスにハマったり、要はミーハーで酒に哲学があるわけではない。

酒はほぼなんでも飲むが、竹山に来る前からと来てしばらくはワイン中心だった。なにもボルドーのなんとかがということはなく、単にアルコール度数が、がぶ飲みニーズに比較的あっていたというだけだ。二人でほぼ毎日一本。数えたことはないが年間おそらく三百本は飲んでいたと思う。そうなると当然一本単価も千円前後に限定される。それでも私たち的には美味しいと思えるし、十分楽しめる。特に円高だった時期は、相当美味しいものも飲んでいたのではないかと思うが、なんせその値段のものをいちいち記録に取るほど暇ではなかったので何を飲んでいたのかははっきりしない。

それが、今ではほとんどワインを飲むことが無くなった。がぶ飲みは変わらないのだが飲む酒が日本酒にガラッと変わったのだ。きっかけは北海道に新しい酒蔵が誕生したことにある。北海道はその寒さゆえ長らく米には恵まれてこなかったのだが、近年は品種改良と農家の努力によって寒さに強いだけでなく美味しい米ができるようになっていた。その努力が酒米にもおよび「吟風」「彗星」「きたしずく」と美味い酒が醸せる品種が開発されたのだ。その酒米で「飲まさる酒（北海道の言葉で思わず飲み進んでしまう酒）」を信条に酒造りの名手が登場したのだ。その杜氏は以前から注目されていた人だったが、ある時からぱたっとつくるのをやめてしまい伝説の杜氏となっていたのだが、北海道に新しい酒蔵をゼロからつくるというプロジェクトで復帰するということになったのだ。このストーリーを聞いて最初の蔵の酒を予約注文し飲んでみたらびっ

好きな日本酒いろいろ

くりした。酒はスッキリとした辛口が良いというイメージが頭にあったが、この酒は口に含むと香りがいっぱいに広がり、ふくよかな甘みも感じるが、それがだんだん力強い旨味になり、長い余韻を引くという、私には未体験の酒ですっかり魅了されてしまったのだ。日本酒の好みは人それぞれだし、その土地の食べ物との相性で好みが決まることもあるので、この酒が絶対とは言えないのだがとにかく美味かった。

北海道はビールが有名だけれど日本酒はねぇ。と言われることが多いかもしれないが、漁業で賑わったところ、炭鉱で賑わったところ、軍隊が駐屯していたところなどでは盛んに日本酒がつくられ今でも酒蔵は健在だ。個人的には北海道の最東端のN市の酒蔵が醸す酒が好きで、飲み屋で北海道の魚介類を食べるときには良く合わせていた。それでも日常的に飲みたいというほどではなかったのだが、先の酒はまた飲みたいとい気持ちを強くさせるものがあった。飲まさるのだ。それに刺激されて北海道内の酒蔵をめぐってみたりしながら改めて味わってみたら、それぞれに個性があり面白い。

その酒蔵巡りをしているときに手に入れた「全国日本酒酒蔵マップ」というのがある。全国の酒蔵千四百二十二について、酒蔵の名前と主要銘柄について都道府県別の一覧と酒蔵の場所を地図にプロットしたものである。正直、日本酒の酒蔵がこんなに津々浦々まであるとは思っていなかった。沖縄を含め日本酒の酒蔵が無い都道府県は一つもないのである。

そこで一つの目標を立てた。全国四十七都道府県の日本酒を飲むという目標だ。できれば全ての酒蔵といきたいところだけれどまずは控えめに。ただ、全国各地の酒を飲むにあたってネットで注文すれば簡単なのだが、それでは味気ない。実際に訪ねてと思っていたらコロナで行動規制。そこで近在の酒屋をめぐりそこで扱っている酒でどこまで都道府県をカバーできるかチャレンジしてみた。北海道ということだからなのか、東京以北は比較的にするすると達成できたが、それから西がなかなか手強かった。最後まで探すことができなかったのは三県。宮崎、鹿児島、沖縄だ。酒米の生育問題もあるからなのか、それらは焼酎、泡盛全盛なので日本酒は分が悪い。酒蔵の数も宮崎二軒、鹿児島と沖縄が各一件。それでもよく多勢に無勢で頑張ってると言える。それら三県については、近在の酒屋のどこを探しても見つからなく諦めてネットで注文した。個人的には鹿児島で一軒頑張っている酒蔵のが気に入った。

目標を立ててからは、日本酒四合瓶を一日一本というペースでほぼ一年でコンプリート。計算が合わないのは、地元北海道は全ての酒蔵を制覇したし、訪ねた酒屋で未体験の県の酒が無くても手ぶらで帰るのは勿体無いので、同じ都道府県で重複しても買うことになる。そのころには毎日のように飲んでいたワインがピタリと無くなり、毎日が日本酒に変わってしまった。飲んだ酒蔵の数は百八十九。なんせ美味しいし、それぞれに個性があり楽しめる。飲めば飲むほど酒蔵それぞれの個性があるばかりでなく地域性もあるように感じる。こ

日本の酒蔵地図（東日本）

の県のお酒ならほぼ間違いなしという指標もできてきた。これはあくまで我が家の指標なので異論は多々あるだろうが。そういう好みの違いも含めて日本酒の世界は広く奥が深い、ということに初めて気がついた次第だ。

私たちの乏しい知識でも日本国内だとある程度その地域のことを知っているので、それに日本酒の味や香りを紐づけて楽しんだりすることができる。ワインとなるとそうはいかない。それに、日本酒は米農家さんや麹屋さんなどなどいろいろな産業との関係で生まれるので、日本酒を飲むということで生まれる経済循環もその地域にとっては大きな意味がある。それに蔵元も世代が代わり新しいことにチャレンジする人たちが増えてきて、ますます面白くなってきている。なかには個人的にこれはどうなのというのもあるが、それも含めて小さいけれどエールを送りたい。特に北海道はこの間に五つの新しい酒蔵ができたのが嬉しい。そんなことを思いながら今夜も冷蔵庫に林立する四合瓶のなかから今日の食事や気分に合わせ封を切るのだ。

一口飲むとパッとひろがり、余韻が長く続くのが良いねとかなんとか言いながら飲んでいるといい加減出来上がってくる。あれだけワインを好んでいたのに、わざわざエネルギーを消費して遠くから運んで来たものを飲む必要があるのかねとか、こんなに農家さんや蔵元が頑張っているのにもっと日本酒を飲まなければとか、日本酒は和食と対の日本の誇る文化だねとか。最後は鍋にはやはり日本酒だよねというところで落ち着くのだが。さて食べるか。

日本の酒蔵地図（西日本）

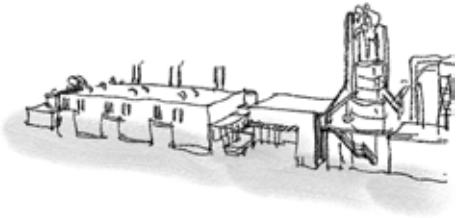
竹山へのお返し

酒と温泉の日々などと言って現を抜かしていたら、急にまわりが慌ただしくなってきた。新規就農で頑張っているお隣の息子さんから「畑の隣の土地で木質バイオマスの発電施設をつくるという計画があって、そこの廃熱を使って温室栽培などをしないかと持ちかけられたのだがどんなものだろうか？」という相談をされたのが事の始まりだったと思う。森林の間伐材を有効活用して発電や温熱利用をしている事例は見聞きしたことがあり、森林経営のサイクルに乗るものであれば再生可能エネルギーとして注目されているなどの情報を提供をしたと記憶している。一方、町内会長のMさんの意見は、「燃やした時に出るものでせっかくつくった作物が汚染される可能性があるのではないか。なかには規格に合わないものを燃やしているケースもあるようだ。」というものだった。バイオマス発電は再生可能エネルギーとして注目されているという認識だけで、それが実際に地域の生活にどのような影響を与える可能性があるのかについては正直あまり深く考えたことがなかったのだが、事業者のホームページには来年度に稼働予定と記載せれるなど動きが急になってきたので、いろいろ調べてみることにした。

事業者のホームページによると計画されているのは千七百kwの発電所二基とのことで、他事例をみると年間四万tくらいの木材を燃やす結構な規模のものになる。近くに大規模な森林があるわけではないので、その木材を遠方から運び込み計画地でチップに粉砕して使う計画のようだ。それだけでもチップ工

場や発電所ボイラーの騒音、木材の大型車による搬入など竹山に暮らす人たちへの影響は大きい。それにバイオマスエネルギーを推進するためのガイドブックを見ると故障やトラブルの原因の八割は木材不足等による燃料の品質の悪さによるとされており、Mさんの話も一部の特殊例とも言えない状況のようだ。大規模な森林経営と一体的に運用する地産地消エネルギーであれば良いが、遠方から調達してくるスタイルでは無理がありそうなことがわかって来た。それに計画地は竹山川の源流の森の沢地を伐採埋め立てをするもので、自然環境への影響も大きく、竹山を特徴付けているダイナミックな眺望景観の近景に大規模な発電所ができると景観は台無しになるのは明らかだった。さらに、木質バイオマス発電所関連の事故、事件例も全国で散見されることもわかった。

計画地の土地取得の経緯について地主さんの話を伺うと、太陽光発電施設をつくるのに土地を買いたいと仲介業者から話があり売ったとのことで、騒音なども懸念される木質バイオマス発電施設とは聞かされていなかった。実家は計画地に隣接しており親が住んでいるので心配しているとのことだった。事業連携を持ちかけられた農家も連携条件などの問い合わせに回答のないまま、事業者のホームページには農家の敷地も記載され、農業施設を勝手に配置されているとのことだった。発電所計画が地域の生活に与える様々な影響ばかりでなく、計画を進めるプロセスにおいても疑問を感じざるを得ないものであった。このままではいけない。町内会の役員も計画反対の意向で固まった。



同規模の木質バイオマス発電所

私ができることは、木質バイオマス発電所の建設が地域に与える可能性のある影響について、これまで得られた情報をわかり安く資料にまとめることであった。それをもとに町内会の役員会で対応を協議し、早々に竹山町内会の緊急総会を開催し建設反対の意思表明をすることとした。臨時総会では、参加者全員が発電所建設に反対したことから、欠席者も含め町内会全員の署名を添えて、市に対して建設反対と開発許可を出さないことを求める要望書を提出することにした。さらに隣接する町内会にも資料を元に説明し、同様に反対署名を市に提出することになった。この間、発電所の求人広告が出されたり、事業者のホームページには千七百kwの発電所だったものが二千kwの発電所に規模が拡大されるなど緊迫した状況になっていった。

竹山町内会から市に提出した木質バイオマス発電所建設反対と開発許可を出さないことを求める要望書に対して、市も迅速に対応していただき、まず事業者に市から今後の計画に有無について確認していただくことになった。なにせ今回のことは、たまたま町内の農家に連携事業の打診があったからわかったことで、町内会には一切事業者からの説明が無いなかで、こちらで調べたホームページの情報や、建設予定地の土地所有関係や、事業者の法人登記などから計画の確度を推測し、先手を打つかたちで動いたという経緯がある。市からの問い合わせに対して事業者からは二年後の稼働を目指して計画していることが正式に確認できたことから、市からは事業者に対して地元説明会の開催を要請

していただくことになった。地元説明会の開催が決定して以降、説明会で確認すべき点、反対の論点整理、説明会の進め方などを町内会役員で回を重ねて協議し、念のため発言の原稿まで用意した。

町内会館で開催された説明会には、竹山町内会を中心に、不本意に土地を売ってしまった地主さんや、連携事象を持ちかけられた農家さん、それに反対の歩調を合わせてくれた隣接町内会、されに広域の連合町内会の役員のみなさんも参加していただいた。さらに市の関係課の方もオブザーバー参加していただくことができた。

説明会では、事業者から計画内容の説明があり、特に発電事業をつうじて地域貢献をしたいということを強調し、事業利益の一部を地元に還元することを検討していることを匂わせたうえで、計画をごり押しするつもりはなく、地元の方々の理解を得て事業を進めたいとした。それに対して、町内会からは木質バイオマス発電所建設が地域に与える可能性がある影響について一つ一つ事業者の具体的な対応をただし、十分安心できる回答が得られないことを確認したのち、計画反対の意志を伝えた。これには隣接町内会からも同調する意向が示され、連合町内会からもできれば建設して欲しくない旨の発言が続いた。さらに、事業者の「計画をごり押しするつもりは無い」との発言を踏まえて、建設計画の撤回を求めたところ、渋々ではあるが撤回の同意を得ることができた。緊張の二時間であったが大きな成果を得ることができた。

説明会にのぞむ町内会役員のみなさん

木質バイオマス発電所の建設計画撤回について、後日、文書での確約を要求したが、それへの回答はないままだ。とはいえ、事業者に電話連絡をしても通じず行方もわからない状態で計画の継続はあり得ないと思っている。なぜ、一度の説明会で計画の撤回を表明せざるを得なかったのは、大手企業を事業パートナーとする事業スキームを描いていたので地元の強固な反対が明らかになれば大手も手を引くのは目に見えていたということなのではないかと考えている。いずれにしろ、この件で私に新たな生き方を与えてくれた竹山に少しでもお返しができたかもしれない。それ以上に、日頃、何かとお世話になっている町内会長や隣家の副会長と同志のような関係が築かれたのは嬉しかった。そこに町内会長の「いやあ今回は石塚さんの力をもらえたのは本当に大きかった。ありがたいね。これからもいろいろ力になって欲しいので町内会の総務を引き受けてくれないかな。」の一言。さすがMさん、高齢化して町内会の役員のなり手がいないところに、上手いな。それじゃあ断れないじゃ無い。

総務といっても年の初めの総会の資料をつくるくらいなので気軽に引き受けたらそうではなかった。今度は、大規模太陽光発電所の計画が浮上してきたのだ。太陽光発電所は木質バイオマス発電所に比べると近隣の生活への直接的な影響は少ないかもしれないが、仮に竹山川の水源林を伐採したり丘陵部の森林を伐採するとしたら、水源への影響や河川の汚濁などの問題や、良好な眺望景観への影響が懸念された。さっそく、町内会として環境を守るための開発に

あたっての基本的考え方をまとめ市に要望しようと考えたが、市には開発許可の権限がない。その時に市議会議員のSさんから、議会に請願を出してはどうかというアドバイスをもらった。すぐに町内会の臨時総会を開き、町内会でまとめた基本的考え方を市も尊重して、開発許可に際して市も意見を述べることと、市独自の大規模太陽光発電所等の開発規制条例の制定を求める請願を市議会に提出することにした。市議会ではS議員の尽力もあり満場一致で可決していただくことができ、早々に市も対応を検討してくれることになった。

竹山は、以前に書いた通り戦後すぐに入植した人たちが拓いたところだが、今はその二代目にあたる人たちが多く暮らしている。それぞれに苦労してつくった広い畑や山林を持っている。ただ、次の代になると大家族で同居することは少なくなり、まちの中心部や隣の都市に住んで時々親の面倒を見にこられている。おそらく代がかわっても竹山に暮らすことは無いかもしれない。さらにここは市街化調整区域なので住宅などの建築は制限されている。そこに木質バイオマス発電所や大規模太陽光発電所が土地を求めてくる背景がある。特に通常であれば土地活用が難しい沢地などは売買の対象になってしまう。何か、竹山の環境を生かした土地利用の道筋がつけられないと、この問題の根本的な解決には至らないであろう。良好な自然環境と代々築かれてきた暮らしがある市街化調整区域をどのような形で誘導していけば良いのか、地域合意と合わせて重い宿題をいただいたが何かお役に立てる道があるだろうか。

竹山の暮らしはどうなっていくのか

竹山に暮らして

竹山に土地を買ったのが二〇一五年の十一月の末。住宅を建てたのが翌二〇一六年の十月。そして本格的に暮らし始めたのが二〇一七年の六月頃。丁度私が六十五才になってからであるから、それから五年半が経ったことになる。この間、竹山に暮らして体験したこと、感じたことなどを思いつくままに書いてきたが、こうやって振り返るとこの五年半は私にとって大きな意味のある時間だったとつくづく思う。改めて竹山に暮らして感じたこと、思ったことを書き留めておこう。

まず驚くのは「偶然の妙」だ。計画的にここでの暮らしを選んだわけではなく、隣人の冗談とも言える「石塚君、隣の土地を買わないかい？」の一言が、私の想像もしなかった今に繋がっている。それも私の人生を振り返ってみて重要な転機のひとつになっているとは。もし、ここでの暮らしがなければおそらくかなりの密度で仕事に関わり続けていたと思うし、結果的に次世代のスタッフもこのように生き生きと自分たちの世界をつくれていなかったのではないかと思う。どうして、あの一言に反応したのかは今もって謎である。ただ、振り返ってみるとこれまでも誰かとの出会いや、誰かの一言、何気なく目に止まった文字、そしてそこから始まる偶然の連鎖が大きな変化を私にもたらしたことがいろいろある。やり過ごしてもおかしくないことにどうして反応して来たのかは良くわからないが、知らず知らずに潜在意識のなかに、それらに反応するセンサーができていたのであろうか。これは私だけでなく誰にでもそれぞれの

センサーがあり、微細なサインを送ってきているのだと思う。そのサインに気づく好奇心を持ち続けていたいものだ。

新鮮だったのは「自然を感じる力」が私にもあったということだ。自然といっても何度も書いているように竹山は良く言う「自然豊か」な環境ではない。それに私たちが暮らしている家の敷地は、造成地で一旦は裸地になったところだ。それが今のように様々な種類の木々や草花に触れられるようになったのは、それぞれの木々や草花の日々、年々の営みが生み出したものなのだ。そのことに気づいただけでも私には新鮮だった。そして、それらの営みを促しているのが土や水や地形が持つ力であることも体験的に理解することができた。

これまで自然の風景に触れるといっても、ある瞬間を切り取って美しいとか感じるというものだったが、ここ竹山での暮らしを通じて、連続的な時間の流れのなかで自然を感じることができたのは新鮮だった。それもひとつひとつの木や草花が変化していく姿だけでなく、それらが相互に関係しあってひとつの世界をつくり上げていく姿を間近に観ることができたのは私にとって大きな体験だった。身の回りの自然をこのように観たことはこれまでなかったが、こういう自然の静かだがダイナミックな動きには畏敬の念を感じないわけにはいかない。そして、私の小さな力が加わるだけでも、自然はそれに反応し姿を変えていくことがあるというのも驚きだった。もっと多くの人が、それも次世代を担う人たちが、このような体験をしていって欲しいと思うのだ。

冬の私たちの家

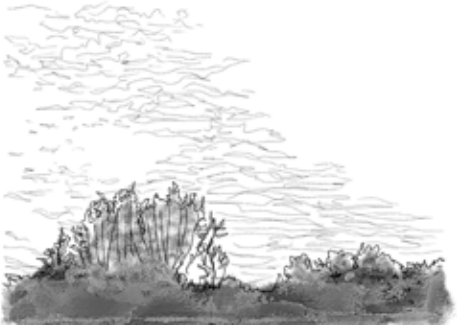
私にいろいろなことを気づかせてくれたのは木々や草花ばかりではない。鳥たちをはじめ竹山に暮らす動物たちとの出会いも新鮮だった。最初は今まで身近に見ることのなかった動物たちをこんな近くで見ることができるという驚きだったが、徐々にその感覚も変わってきた。これまでの生き物と関わりは小さな頃に家で飼われていた私より年寄りの犬を除けば、一方的に人の世界から見るという関係だったといってよい。それが竹山では、彼らの世界に私たちが加わったかたちで、いろいろな面で共存のための配慮が求められた。外の景色を思いっきり楽しもうと思うと大きなガラス窓が欲しくなるが、それは鳥たちの事故を呼び寄せることになる。朽ちかけた木などは見かけからすると切って整理したくなるが、それは虫や鳥たちにとって大切な棲家であったり食料を得るところであったりする。餌台にやってくる鳥たちを観ているのは心が和むが、それが年中となると鳥たちが虫や木の実を食べることで生まれる循環を邪魔することになったりする。それらひとつひとつにどのように折り合いをつけていくのかを考え形にしていくうちに、竹山に暮らす動物たちと同じ場所、同じ時間を過ごしているということを自然に感じるようになってきた。

生き物だけではない。風の音の体験も新鮮だった。そのゴゴゥゴゴゥゴゥという音は叫び声にも似て気持ちがざわめく。床につきながら夜の暗闇をあちらからこちらへ近づいては遠ざかる巨大な生き物を感じたり、晴天の空を見上げた時にどこからともなく湧きたち大空を通り過ぎる風の音にしばし身が固ま

私たちの大好きな動物たち

ることもあった。耳だけでは無い。鼻も随分刺激を受けた。鍋から広がる美味しい香りだけでなく、ここには香りが満ち溢れていた。最初に気が付いたのは空気の香りだ。玄関の扉を開けて一歩外に出た時に鼻をすうっと通り抜けるピュアな香りは瞬く間に脳や身体の隅々まで染み渡る。木々や草花と同じように生きる栄養をもらった感じがする。それに比べて、あんなに住み慣れたS市の街中で感じるのは揮発性の化学物質のような匂いだ。それもしばらく街中にいると慣れて忘れてしまうのだが、あの感覚は忘れられない。薪を割る時に立ち上がる匂いも最近感じるようになった。エンジュの豆のような匂いや、ナラのスモークの香り、そしてトドマツの松ヤニの匂い。木の種類を調べようとすると樹形や木肌、葉の形など視覚に限られがちであるが、そのものを知ろうとすると嗅覚の大切さも忘れてはならない。

これら聴覚や嗅覚に関わる体験は新鮮に感じるのだが、見方を変えれば本来生き物が持っている感覚に近いものが私にも戻ってきているのであろうか。そんな気にもさせてくれる。そういう体験を重ねるうちに、都市の中の公園やオープンスペースというものも、単に目を楽しませてくれる憩いや休息の場というだけでなく、人がまだ持っているであろう生き物としての五感を刺激し、少しでも取り戻せる場にならないものであろうかと思ってしまう。そういう感覚を持って現代の閉塞感に満ちた状況を見直すことができれば、これまでとは違う選択肢も開けてくるのではないか。そんな気になってくる。



夕焼けに染まる大きな空

竹山でのこの五年半を振り返って考えさせらたことはいろいろあるが、切実だったのは老いとの向き合い方だ。すでに書いた通りこの年になると体力や記憶の衰えに愕然とする。以前は出来ていたのに覚束なくなったことを挙げだすと切りがない。年を取るということはこういうことかと思うと情けない気持ちにもなる。ところが竹山での暮らしは出来なくなったことの倍かそれ以上に、今までやったことがなかったのにやらざるを得ないことの連続なのだ。太い丸太を斧で割ったり、川や池を掘ったり、必要に迫られるといつしかできるようになるものだ。調子に乗ってこんなこともやってみようかと思うとこれも意外とできてしまう。そして、それらは大変なのだができると楽しくなってくるのだ。さらにそこから学ぶことも多い。この年になって、そんなことができるようになるとは、年を取るのも捨てたものではないという気になる。生涯何々一筋という生き方も清いが、人生百年時代、残された豊富な時間を生かして新しい自分に出会うのも悪くない。それも趣味の世界とは異なり日々の暮らしのために求められることを全力で取り組むというのも大いに気に入った。本来は仕事もその一部であるはずなのだが、これほど真剣に日々の暮らしのために全力で打ち込むことは新鮮であった。今の私には、相変わらずどんどん出来なくなることが増えていくが、それ以上にこれをしてみたい、こんなことができればということが待っている。そういう思いを持ち続けられるのは竹山に暮らしてだからこそだと思う。本当にありがたい。

池にうつる森の景色

これまで得られた知識や経験を仕事で生かす道は自ら閉ざしたことになるが、それは五年半経ってもあまり後悔はしていない。この間に、コミュニケーションのあり方はコロナ禍で大きく変わったし、AIなどの進展は私などにはどこに導く技術か検討もつかない。昔取った杵柄などを振り回している時代ではなさそうだ。それでも強引な木質バイオマス発電施設の建設計画に竹山をあげて抵抗することに少し役立てたのは嬉しかった。これまでに身につけてきた知識や経験を仕事に生かすということではなく、地域社会の求めに応じてその一員として役立てるという道があることにあらためて気付かされた。これから人生百年時代を生きる年輪を重ねた人たちが、培った力を地域社会の一員として発揮することができれば、少しは良い方向に向かうことになるかもしれない。くれぐれも自己実現を目的に力の押し売りをするのは避けて欲しいが。

昨年の春のことになるが、その年の大雪で裂けてしまったヤナギの木を切ったことがある。切り口からは綺麗な年輪がでてきた。試しに外側から年輪を追って五年のところに線を引いてみた。この幅が私たちがここに暮らし始めてからの時間を表しているということだ。細かった幹が倍の太さに育っていっちょまえの木になったことがわかる。私たちが竹山に暮らして得たものはこれまで書いきたことの他にまだまだある。だとしてもこのヤナギの成長に負けずに大きくなれたのかは自信が無い。まあ、そうであっても、この年になってこれまでにない体験と気づきを得ることができたのは幸せだと思う。

私たちが住み始めた頃の年輪

おわりに、そして

「竹山に暮らして」を書くきっかけは、古巣の事務所の中堅スタッフＳ君から、「石塚さんも、事務所のホームページに竹山での暮らしとか書きませんか。」と提案されたことにある。連載形式で百回を目標にが書き始めたのだが、いつの間にかこの文章を書くまできてしまった。こんな機会をもらわないとおそらくここでの暮らしを振り返って、観たこと、感じたこと、体験したことなどを記すことはなかったと思う。Ｓ君ありがとう。

この雑文を読んでいただいた方はおそらく、記憶が不確かになったと言う老人にしてはこと細かに五年余りの出来事を書いているのは不思議に思うかもしれない。実は、竹山に家を立ててから初めて迎えた新年に「十年日記」なるものを買ってその日その日にあったことを書き続け今日に至っているのである。日記など、つけたことがないわけではないが、続いた試しがない。そんな私が五年余り書き続けてこれたのも、ここ竹山の力かもしれない。書いていることといえば、まずその日の天気か。それに暑ければ何度まで上がったか、寒ければ零下何度とだったと書くこともある。あとは、出かければどこに言ったか。まあ、大抵は買い物なのだが。あとは、誰が訪ねて来たか。それも滅多にはないのだが。だからほとんど書くことがなく、薪を割ったとか、畑で何を収穫しただとか季節になれば毎日同じことを書くことになる。それでも残る空欄を埋めるように何の花が咲いたとか、何という鳥が団体でやってきたとか、紅葉がはじまったとか季節のことを書き留める。そんな程度だ。けっしてその日

の所感などは書かない。そんなものを書こうとするから長続きしないのをよく知っているから。そんなほぼどうでも良いようなことでも毎年書き続けていると、不思議と何か見えてくるものがある。この十年日記がなければこの「竹山に暮らして」も書くことができなかっただろう。

十年日記なので、まだ半分が空欄のままだ。さて、それに何が書き加えられるのか。闘病記にならないことを祈るが、それはさておいてどのような新しい体験が待っているのか楽しみである。仮に変化のない同じようなことを書き続けることになっても、十年たってみるとまた違ったものが見えてくるのではないかと思ったりする。日々の生活というのはそういうもので、毎日毎日代わり映えのしないことの繰り返しだとしても、それが積み重なることでその人にとって意味のある時間になるのかもしれない。

読み返せば竹山での暮らしは妻との共同作品のようなものだとつくづく思う。そしてこのような暮らしのきっかけを与えてくれた隣人には心から感謝したい。特に「石塚君、隣の土地を買わないかい。」と無茶振りしてくれた浦一也さんには私たちのために描いていただいた絵を表紙に使うことまで快諾いただき嬉しい限りである。また、竹山での暮らし方を折に触れそれとなく示唆してわからないことをいろいろ教えていただいている町内のMさんと出会わなければ、この「竹山に暮らして」はなかったと思う。それに、新参者の私たちを暖かく迎え入れていただいた町内の皆さんにも深く感謝したい。

これから十年日記の空欄がどのような生活で埋められていくのか。もしかしたら、その時、この続編が生まれるのかもしれない。その時には、また、竹山でお会いしましょう。

二〇二三年一月
雪に埋もれた静かな風景を観ながら